昭和59年6月15日号（毎月2回1日、15日発行）第27巻・第12号　通巻609号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1984
12
6.15.



ソ日共同取材

五つの目で見たシベリア⑤

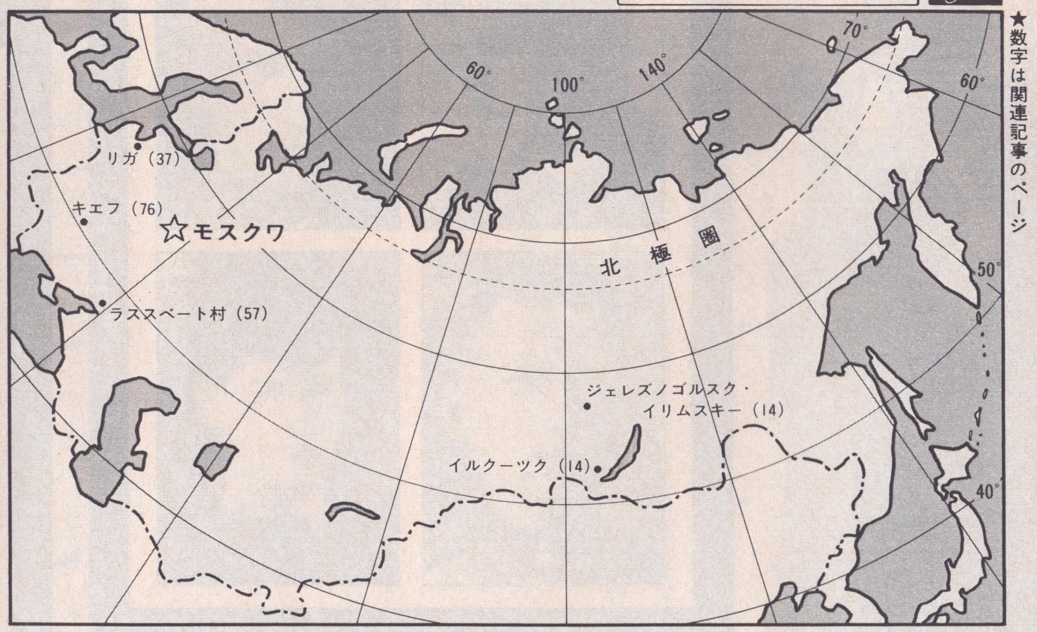
ソ連の人気俳優 オレグ・ヤンコフスキー

心筋梗塞と闘う救急医療

第12号　1984年6月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

銅像になった同級生

作家 ミハイル・コルシュノフ
カメラ A・ルイスキン



1 グリーシャ・ロージン（1941年撮影）
2 ユーラ・ジビリコフスキー
3 イーゴリ・クプツォフ（1943年撮影）
4 ガボル・ラーブ（1941年撮影）
いずれも学校の博物館に保存されている写真からの複製



戦争に行って戻らなかったモスクワ第一一〇学校の5人の生徒の像と作者のダニエリ・ミトリャンスキー。

モスクワ第一一〇普通教育学校の構内には、あまり高くないコンクリート製の台座の上に5人の少年のブロンズ像が立っている。シンボリックな英雄ではなく、実在した同級生たちの像である。彼らは私と同じ年齢だったが、もう永久に年をとらない。私は彼らの名前を知っている――ガボル・ラーブ、イーゴリ・クプツォフ、グリーシャ・ロージン、ユーラ・ジビリコフスキー、イーゴリ・ボグシェフスキー（彼の写真は残っていない）。

ガボルとは低学年で一緒に学んだ。私たちは同じ通りに住んでいた。ガボルは物理学者になりたいと言っていた。9年生になったとき、彼はモスクワ大学付属の物理・数学コースに通うようになった。彼はいつも目立つ存在だったが、多分それは、勉強がよくできて、性格が明るかったからだろう。

イーゴリ・クプツォフは“クラスでいちばん有望な若者”と呼ばれていた。彼の母親は学校で衣類保管係として働き、女手一つで3人の子供を育てた。イーゴリ・クプツォフは歴史学者になるつもりだった。

ユーラ・ジビリコフスキーは詩人を、グリーシャ・ロージンとイーゴリ・ボグシェフスキーは探検家をめざしていた。

一九四一年にファシスト・ドイツ軍がソ連に侵入したとき、彼らはみんな兵士になった。

彼らは兵隊外套を着たが、それを脱ぐことはなかった。外套に包まれたまま葬られ、その上に土をかけられた。グリーシャ・ロージンはモスクワ近郊で、イーゴリ・クプツォフとガボル・ラーブはベルリン近郊で、イーゴリ・ボグシェフスキーはポーランドで、ユーラ・ジビリコフスキーはウクライナで死んだ。

前線へ赴くにあたって、ユーラは友人たちに遺言を残して行った――「ぼくが完全に、文句なく自由にすることができる唯一のものは、ぼくの“我”、ぼくの人間としての実体だ。ぼくは詩人だ。ぼくには生活の意味、世界の体系の中での自分の位置、自分の個性の意義が分かる……戦争が勃発した、そしてぼくたちは自分の課題が何であるかを理解した。ぼくたちは戦いに行く。多分、ぼくたちは死ぬだろう。だがぼくたちは知っている。ぼくたちは自分の生命によって未来を確立するのだ――ぼくたち自身はその未来を見ることはできないけれど」。ユーラは自分を最大限要求主義者だと感じるあの年ごろだったのだ。

彼らは一九四一年の6月に出かけて行って、一九七一年の6月に戻ってきた。モスクワのありふれた学校の構内に立つ記念碑として。

彼らの像を作ったのは、やはり同級生で彫刻家のダニエリ・ミトリャンスキーだ。彼もまた前線で戦った。彼は5人の同級生が永久に戻ってこないことに我慢できなかった。彼らが再びモスクワを、スボーロフ並木道を、ニキータ門のそばの学校を見られないなどということに我慢できなかった。我慢したくなかった。一九七一年の記念碑の除幕式には大勢の人々が集まった。その中には、年をとったベーラ・グーセワ先生もいた。この人は教え子の帰りを待っていたのだ。

グーセワ先生はいま90歳。先生はいろいろ奔走し、やはり教え子である彫刻家ミトリャンスキー、建築家ローゼンブリューム、スコカン、マルクース



戦争で死んだ第110学校のかつての98人の生徒と2人の先生の名を刻んだ碑の前に立つ第110学校のもと生徒で、やはり戦争に参加したエブゲニー・レービン生物学博士。



前線からの手紙や古い写真を見る生徒たち



学校の博物館運営委員会議長キリール・ラブロフ

が作った記念碑が全国民的な追悼の日――大祖国戦争が始まった6月22日、その30周年目のまさにこの日に除幕式が迎えられるよう骨折って下さった。前日に記念碑の予定地にアスファルトを敷き、基礎穴を掘らなければならなかった。グーセワ先生は学校から遠くないところでアパートを建設している労働者に援助を求めた。労働者は仕事時間が終わってから駆けつけ、すべてをやってのけてくれた。先生がおカネを払おうとしたら、彼らはそれを拒否した――「そんなことができますか。それよりも、ほかに何をする必要があるかおっしゃって下さい。これは神聖な仕事なんですから！」

ブロンズ像は学校の入口わきに立てられた。彼らはここから前線に向かったのだ。彼らのために鳴り響いたのは卒業パーティーのワルツのダンス曲ではなく、軍歌「立て、大なる国、行け、決死の戦闘に……」の厳しいメロディーだった。

記念碑の台座の石の板には、さらに一〇〇人の名前――戦争で不帰の客となったモスクワ第一一〇学校の2人の教師と98人の生徒の名前が刻まれている。ソ連全国では二〇〇〇万人のこうした人々の名前が各地の記念碑や墓碑に刻まれているのである。これこそ先の大戦の最も恐ろしい損失――失われた人命である。

グーセワ先生が記念碑に最初の花を献げた。次いでいちばん若い1年生、ブロンズ像の少年たちと同じ年齢の17歳の少年たち、われわれ生き残ったかつての同年齢者の順に花を献げた。

記念碑への献花は学校の行事となり、以来毎年、6月22日とソ連で新学年が始まる9月1日に行われている。

あの9学年のかつての級長だったイーラ・ゴリャミナは一九四五年の初めにダニエリ・ミトリャンスキーに書き送っている――「勝利したら、戦争に行ったすべての同級生を思い出しましょう。各自がそれぞれ、自分なりに思い出しましょう」

ミトリャンスキーは自分なりに思い出した――記念碑という形で。しかし、そのためには長い年月が必要だった。



モスクワ第110普通教育学校の戦争記念博物館



「平和」の授業時間に〝私たちは成長したい！〟と書いた第一一〇学校の2年生たち。



一九四一年にファシスト・ドイツ軍がソ連に侵入してきたとき、ほとんどすべての上級生は志願して前線に赴いた。花崗岩の板に刻まれたこれらの文字は生きて帰らなかった生徒たちの名前。



いまでもすべての生徒のことを覚えている歴史の生き証人ベーラ・グーセワ先生

彼は級友たちの姿を、ゆっくり、慎重に、全体の輪郭から描き始めた。そして顔は、無から再現しなければならなかった。

彼らの青春は学校の博物館に大切に保存されている。写真、ユーラ・ジビリコフスキーの遺言、死んだ仲間たちの肖像画。この普通の、だが無類の博物館（というのは、このような博物館はソ連のほとんどすべての学校にあるが、同じものは二つとないからだ）の新しい展示品は一九八三年6月22日に公開された。

9年生のキリール・ラブロフを議長とする博物館の運営委員会は、大祖国戦争についての文書を注意深く集めている。委員会にはすべてのクラスの代表がメンバーとして加わっている。委員たちは一致協力して神聖な事業——記念碑の保全にあたっている。なぜならこの記念碑は、死に対する勝利であり、平和への呼びかけであるからだ。

オリンピックに関する真実と中傷

――プラウダ紙一九八四年5月16日号論文

ソ連選手のロサンゼルス・オリンピック大会参加は不可能だというソ連オリンピック委員会の決定に、ワシントン公式筋は特異な反応を示した。米国務省の指導者その他の若干の政府当局のスポークスマンたちは今になって、ロサンゼルスではすべてが平穏無事であり、「誰も、何もオリンピックの選手や来賓を脅かしはしなかったし、いまも脅していないのであって、すべてはロシア人の作り話なのだ」と躍起になって言いくるめようとしている。

だが、実際の事態はどうなのか？ここ数年間にわたって米国では当局の完全な承認のもとに、ソ連その他の社会主義諸国の選手のロス五輪参加の妨害を目的とする露骨に敵対的なキャンペーンが行われてきた。

社会主義諸国の代表に対する挑発がどんなに大規模に行われてきたかを示す新たな事実が、次から次へと明らかにされている。刑事犯罪人、祖国を裏切った者、元ナチス党員などを含めて一六〇の極右グループやギャング団に統合されたありとあらゆるならず者たちやキューバ反革命派のテロ組織〝オメガ66〟が〝八四年五輪からソ連を締め出す〟と称する連合をつくった。この連中はその目的を隠そうともしなかった。ソ連その他の社会主義諸国の選手に対してテロを繰り広げることが、その目的なのである。

ソ連オリンピック委員会の決定採択の直前に、ロサンゼルスで連邦および現地当局の承認のもとに一連の反ソ組織、テロ組織、民族主義組織の代表の会合が開かれた。その席上で社会主義諸国の選手団に対する破壊活動――直接の肉体的制裁行為から五輪期間中のきたない中傷や卑劣な挑発にいたるまでのありとあらゆる行動の計画が発表された。その惰性によるものであろうが、米国では相変わらずソ連選手、社会主義諸国の市民に肉体的制裁を加えるという脅迫の声が響いており、ロサンゼルスのキオスクでは〝ロシア人を殺せ！〟と呼びかけるバッジが相変わらず売られている。リーフレットやポスター、新聞記事、サンフランシスコのソ連総領事館にかかってくる電話にも、脅迫が含まれている。米国各紙でさえ「ロサンゼルスには極度に緊張した反ソ気運が存在することになろう」とか、「五輪期間中の逃亡者工作のためのロシア語を話す専門家のチームがつくられた」とか、「ソ連の選手や観客に対する暴力行為が準備されている」とかいう事実を認めていた。

ロサンゼルス・タイムズ紙の次のような報道もあった。「〝八四年五輪からソ連を締め出す〟連合の指導者たちは、当局は連合の行動に共感をもっている、と請け合う手紙をホワイトハウスの高官マイケル・ディバーから受け取った」。この祝福を受けた〝連合〟指導者バルジガーは、「選手やソ連人観光客に対する暴力行為もないとは限らない」と述べた。

そうした後に、米当局がこの犯罪的活動と関係していないという今回の米大統領の言明は、いったいどんな価値があるのか？ ディバーは米大統領に最も近い助言者として知られているのだ。〝自由をめざす若い米国人〟と称する組織の戦闘隊員たちが、自分たちはソ連選手の誘拐を計画している、と述べた事実も、ワシントンは否定できない。この組織も、現政権と密接につながっている。

この数カ月間五輪色を強めた病的なスパイ妄想も、公式当局から発したものだ。ウィリアム・ウェブスターFBI長官は、「FBIは社会主義諸国その他若干の国の選手の中にいるスパイの探索に特に力を入れる」と公言した。彼の言葉によれば、ソ連のエージェントの監視には一五〇〇人のFBI職員があたるという。この発言と完全に呼応する形で、その後米国のある出版物は次のように報じた。「テロリストがロサンゼルスにやって来るとするなら、間違いなくアエロフロート機で来るだろう」

このように、バカバカしいまでにヒステリーが高じ、五輪前の一種独特の心理的風土がつくり出された。米国最大手のラジオ・テレビ会社の、自社のデータにもとづくという次のような報道は、全くバカげてはいないだろうか。「ソ連では、巡航ミサイルと航空機の基地を破壊するテロリスト部隊が養成されている。これらの部隊にはソ連の五輪選手も入っている」。米国の一般人を欺くために、わが国の選手たちはこうした形で米国内の世論に紹介されているのであり、しかもそれは米国内ばかりではない。

米国の特務機関が社会主義諸国の市民（選手、観光客、ジャーナリスト）に対する挑発活動実施のため特別〝五輪部隊〟〝セクション〟〝グループ〟を編成したことは、知られている。これらの、あえて言えば対策（CIAとFBIの五〇〇人の幹部スタッフがその実施に当たるはずになっていた）の総指揮は、CIAの副長官の一人にゆだねられた。彼は、どのような仕事をするはずだったのか？ 言わずと知れた、きたない仕事だ。

さまざまな方向で挑発を実施することが予定されていた。たとえば、特務機関は市内のいくつかの商店をその管理下に置くことを計画した。しかるべき従業員スタッフをそろえることまでやってのけた。何のために？ 挑発の組織――〝現行犯逮捕〟、〝万引〟とやらによる逮捕――のためだ。

ロスの名所の撮影の際にスパイ行為として〝現行犯逮捕〟することも計画された。また、社会主義諸国で購入し、あらかじめ軍事施設を撮影しておいたシネフィルムやスチールカメラ用フィルムも準備された。それをつきつけて、スパイ行為の〝証拠〟だと言うわけだ。

個々の選手、観光客、ジャーナリストを誘拐し、引き続いて洗脳する計画や彼らが祖国に帰らないよう勧誘することが研究された。事態は、祖国を裏切ることを選手たちに呼びかけた文が社会主義諸国の言語で宣伝パネルに書かれるところまでにいたった。幾千ものリーフレットやパンフも同じことを目的にしていた。

ワシントン当局はいま、これらすべては〝民間〟組織によって準備されたことであり、政府機関は彼らの活動に全く無関係だったと主張している。このような主張は事実によってくつがえされている。いわゆる〝民間の〟挑発者・テロリスト組織はすべて、米国の特務機関とつながっている。そしてこのことはホワイトハウスも承知している。ヒューズ国務省スポークスマンがその声明の一つで、過激派グループの〝活動を制限するために米政府が特別措置を講じるよう求めるあらゆる提案〟を拒否したのも理由があってのことだ。テレビに出演したダム国務省副長官の方は、社会主義諸国の市民への暴行の準備を整えているファシスト型の極右グループのギャング計画を公に糾弾することを断固拒否した。

以上のすべてのことを考慮するなら、米国当局がロス五輪開催の正常な条件を整えるために万全を尽くしていると、はたして言えるだろうか。おのずと別の結論が出てくる。米当局はソ連その他の社会主義諸国の市民の安全を保障するつもりがないだけでなく、事実上、ヒステリーと憎悪と挑発の雰囲気の増幅を促してきたのだ。

反ソ・反社会主義ヒステリーの音頭が上から取られているのだ。ソ連とその平和愛好政策への組織的な非難がそこから流されている。ロス五輪をめぐって作られている狂気と憎悪と敵意の空気は、米大統領が表明している反共〝十字軍〟の一環にほかならない。

米特務機関の側からの挑発や、自分たちは五輪組織委員会のすべての下部組織にもぐりこんでいると自慢しているテロリストたちの活動によって事実上安全を脅かされているのは、ソ連や社会主義諸国の選手だけに限らない。これは、他の五輪参加者にとっても脅威である。

諸国民間の平和と友好の祭典となるはずの大会を、どうやら、敵意と暴力の騒ぎに、中傷し人間の品位をけがす騒ぎに変えようと狙っているようだ。こうした中で、自らの名声と品位を大切にするあらゆる国は自国市民を危険にさらすことはできない。

グラモフ・ソ連オリンピック委員長の記者会見

（一九八四年5月14日）

ソ連オリンピック委員会のマラト・グラモフ委員長は、5月14日にモスクワで開かれた記者会見で、ロサンゼルスの第23回夏季オリンピック大会にソ連選手が参加することは不可能になったという同委員会の決定の再検討の可能性に関する一連のジャーナリストの質問に答えて、この決定は最終的なものだと述べた。

ソ連の選手たちは五輪出場に向けて精力的に準備してきたし、今回のロス五輪においても彼らの成功を十分に期待できた。にもかかわらず、ソ連オリンピック委員会はこれ以外の決定を下すことができなかった。米当局はオリンピック憲章に違反し、反ソ主義を煽り立て、各種の反動過激派グループを黙認し、ソ連選手を、なによりもまず安全の問題において極度に複雑で、他国の選手に比べて明らかに不平等な条件のもとに置き、ロス五輪出場の可能性を事実上ソ連選手から奪った。

もろもろの事実は、五輪運動の伝統が米国では無視されていること、米当局がIOCに与えられた保証と約束に違反していることを証明している。ソ連オリンピック委員会は、諸困難の克服に努め、その排除に協力した。一九七九年以降、われわれは、米国によるモスクワ五輪ボイコットにもかかわらず、ロス五輪組織委との緊密な接触を打ち立て、同委関係者に対してモスクワ五輪の組織と実施の経験を詳しく調査するために必要なものすべてを提供した。しかし、すでに当時、ロス五輪に対する米国政府の態度は重大な懸念を引き起こしていた。

当時、IOC会長であったキラニン卿は五輪と五輪運動に対する米政府当局の態度について次のように述べた。「本質において米政府当局は、大会を自分の考えで催し、IOCの規則、その伝統とプロトコールに特別な意義を与えないことを声明した。……私は、五輪問題に対するホワイトハウスの無知ぶりをますます確信するにいたった」

一九八三年1月のNOC連合総会で参加者たちは、オリンピック憲章の規則が十分に守られていない点を厳しく批判し、特別な文書「ロサンゼルスにおける第23回オリンピック大会に関する宣言」を採択した。しかし、この重要文書（ついでに言えば、それは当時全会一致で採択された）の多くの条項は、今にいたるまで遂行されていない。

その間にロス五輪をめぐる情勢は、改善されるどころか、逆に悪化した。たとえば米政府はロス五輪を利己的な目的――選挙キャンペーンに利用することを決めた。

1カ月前にわれわれは、この状況を変えるもう一つの試みを行った。4月10日の声明の中でわれわれはIOCに対し、ロス五輪をめぐってつくり出された情勢の問題を検討するよう要請し、米国側がオリンピック憲章の規則と条項に乱暴に違反していることを納得のいくように示す例を挙げた。五輪組織者、米当局が五輪運動の最重要原則、客をもてなす際の初歩的な掟を踏みにじっていることが、実例によって示された。

ソ連オリンピック委員会は、五輪開幕が近づくにつれて反ソ・ヒステリーが煽り立てられていることが、すべてのソ連人に特別の不安の念を起こさせていると強調してきた。当局の明らかな放任のもとで米国の反動勢力は、ソ連その他の社会主義諸国のスポーツマンのロス五輪参加に反対する正真正銘の十字軍運動を展開した。反ソ、反社会主義の基盤の上で、さまざまな過激派、亡命者、テロリストその他のグループの統合が行われ、挑発が準備され、ソ連選手に肉体的制裁を加えるという脅迫の声が聞こえている。

たとえばDPA（西独）のロサンゼルス電は、14の反ソ団体の代表が4月18日にロサンゼルスで会合を開き、五輪期間中の行動計画を採択したと報じた。〝ソビエトを禁止する〟連合が「ロシア人にとってロス五輪参加をできる限り不愉快なものにする」であろうと声明したことが指摘された。

IOC理事会はユベロス・ロス五輪組織委員長の参加のもとに4月24日にローザンヌで開いた緊急会議でソ連オリンピック委員会の4月10日の声明を検討し、その要求を正当で根拠のある公正なものと認めた。

しかし4月27日に米国務省代表はワシントン駐在ソ連大使館員を招き、ソ連オリンピック委員会あてのステートメントを伝達した。それは米当局が現に行っているオリンピック憲章の規則の違反のすべてを頭から否定し、IOCもロス五輪組織委も正当と認めたソ連オリンピック委員会の当然の要求を〝いつわりの非難〟ときめつけるものであった。そればかりか、国務省代表は米国内につくられたありとあらゆる過激派やテロリストの組織の活性化に対する全責任を、何とも奇妙なことではあるが、ソ連に転嫁したのである。

われわれの共同の努力、ローザンヌで採択された三者協定に対する回答は、以上のようなものであった。事ここにいたっては、米政府のこのような態度のもとで、われわれのとっている行動は無意味であることが明白となった。その結果、最も原則的な、最も肝心な問題――ロサンゼルスにおけるソ連選手の安全の問題は、ついに解決されないままとなった。そればかりか、米保安機関はテロリスト、過激派組織の代表を五輪組織委に入り込ませた。ソ連人を誘拐し、祖国に帰らないようそそのかす方法、神経系を破壊する向精神薬を含む特殊手段で彼らに働きかける方法が開発された。

これまでの五輪大会でもわれわれは、米特務機関に操られるさまざまな破壊分子や挑発者の策動にぶつかることを余儀なくされてきた。しかし反ソ・キャンペーンがこれほどハメをはずした性格をおびたことは、かつてなかった。米国での反ソ・キャンペーンは五輪に関連して煽られているだけではない。ソ連の国連常設代表部に対する挑発が組織され、個々のソ連市民に対する無頼行為が容認されている。

当然ながら、これらすべてはソ連の世論に深い不安を起こさせている。ソ連オリンピック委員会は数万通の手紙を受け取ったが、それらの中でソ連の人々は米当局が差別措置をとり、ロサンゼルスでソ連選手にとって耐えがたい状況をつくりあげている点を正当に指摘し、こういった状況下で第23回オリンピック大会にソ連選手団を送ることに断固反対している。5月8日に開かれたソ連オリンピック委員会総会に出席した著名スポーツマン、五輪チャンピオン、コーチ、各競技連盟の指導者、学者、医師、ジャーナリストたちも、一致してこれと同じ意見を述べた。

5月8日のソ連オリンピック委員会声明がすでに発表された後に、米大統領が安全の保証を約束したという報道があらわれた。しかし反ソ、反社会主義のキャンペーンはおさまるどころか、逆に米当局の援助もあってますます盛んになっている。ソ連オリンピック委員会の決定は、かまびすしい反ソの大騒動――その期間に五〇〇万部のリーフレットとパンフ、〝ロシア人を殺せ〟と書いた数千個のバッジを配布する予定になっていた――を組織する計画を挫折させた。

一部の西側のマスメディアは、われわれの決定をボイコットと言っているが、これは根本から間違っている。われわれはいささかもオリンピック憲章に違反していない。各国のNOCは五輪に参加するか否かを決める権利をもつ。われわれは参加を断念し、その理由を述べた。米国のカーター前大統領が呼びかけ、現大統領もそれを支持した五輪ボイコットについて言うなら、その中には開催地をソ連からよその国へ移すか、あるいは開催を全くやめてしまえという要求、一連の国の政府に対する政治的圧力、モスクワ大会を開催不能にするためのさまざまな経済制裁が含まれていた。そこにはテレビ局の放映の禁止、契約を結んだ商社が設備を納入することの禁止その他も含まれていた。ボイコットとは、まさにこういうことなのである。

ソ連選手は米国の反動層のせいでロス大会に参加できない。安全の欠如、反ソの煽り立て、ソ連選手にたえずトラブルをつくり出す政策――これがソ連オリンピック委員会の決定の条件となった現実のファクターである。われわれは五輪の原則と目的への忠誠、IOCその他の国際組織、すべての大陸のスポーツマンとの協力を発展させようとする希望と用意を、改めて強調する。

近年、米国は政治、経済、科学の分野での対ソ関係を実質上縮小してしまった。いまにいたるまで両国間には文化交流協定が結ばれていない。ニューヨークその他の米国諸都市へのアエロフロート機の飛行は禁止されている。最近までスポーツのみが両国関係の一種の潤滑油となっていた。しかし、われわれがいま見てきたように、米政府はスポーツ交流をも悲運に陥らせた。ソ連オリンピック委員会やソ連のスポーツマンはどうかと言えば、われわれはスポーツ分野での密接な接触をめざしてきたし、今後もめざしていく。

一九八二年には四三三名のソ連選手が米国を、二五〇名の米選手がソ連を訪れた。一九八三年には四三九名のソ連選手が米国で開かれた競技会に出場、これにこたえて二八二名の米選手が訪ソした。一九八四年にはこの数字はそれぞれ一〇六名と八〇名であった。われわれはスポーツ競技をボイコットすることは考えておらず、今後も競技会に選手を派遣するだろう。

米テレビ局と組織委に数百万ルーブルの放映権料が払い込まれたこと、グラブスポルトプロム（ソ連スポーツ委員会の機材・技術サービス機関）が四〇〇万ルーブル分の設備機材を無償でロサンゼルスに提供したことといった事実もまた、ソ連のスポーツマンがロス五輪参加をめざして準備していたことを物語っている。

〝代替競技会〟開催の可能性については、ソ連のスポーツ指導者は、ありとあらゆる代替、同時開催の競技会（ついでに言えば米国はモスクワ五輪の時にこれを思いつき、実施したのだが）、あるいは五輪に対抗するものと解釈されるようなその他の何らかの競技会の開催に反対してきたし、いまも反対している。もちろん、4年にわたって五輪をめざす猛トレーニングにはげみ、めざましい記録を出したソ連選手たちは、もろもろの大きな国際競技会に参加して好成績をあげることができるだろう。昨年度に五輪種目に入っている各種競技の世界選手権やワールドカップでソ連が獲得した金メダルは62、ドイツ民主共和国が44、米国が28であった。これら競技会でのすべてのメダルを数えると、その約65%を社会主義諸国の選手が獲得していることになる。

日ソ学術文化長期交流計画の調印を終えて握手
を交わすクルグロワ対文連議長と松前対文協会長



ソ連対文連と日本対文協が 日ソ学術文化長期交流計画に調印

5月16日、東京霞が関ビル33階の東海大学校友会館で、ソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）と日本対外文化協会（対文協）との、一九八四—一九八八年にわたる学術文化長期交流計画の調印式が行われ、ソ連側から日本対文協の招待で来日中のZ・M・クルグロワ対文連幹部会議長が、日本側から松前重義対文協会長が長期交流計画に調印した。

この長期計画は、一九七七年に同じく東京でクルグロワ・松前両会長の間で締結された第1次計画に次ぐもので、6部70項目にわたる両国間の膨大な交流を定めている。

交流の内容は、両団体間の総合事業として、日ソ円卓会議、宗教者会議、婦人都市会議、ジャーナリスト会議、映像分野での協力などを約したほか、第2部の二国間シンポジウムでは(1)アジアの安全保障、(2)経済学、(3)出版、(4)エネルギー、(5)エレクトロニクス、(4)世界文学、(7)歴史学、(8)農学、(9)教育学など、すでに実施されている両国間のシンポジウムにいくつかの新しいテーマを加えて開催することを決定した。

両国間で大きな成功をおさめながら実施されている文化・学術展についても、この長期計画は多くの行事を盛込んでいる。本年から八八年にいたる5年間に、日本では「ソ連宇宙・天文学展」「シルクロード文明史展」「武器庫展」「第3回古生物展」、その他多くの展覧会計画が含められ、ソ連でも「日本総合デザイン史展」「北斎展」「日本南画展」などが開催されることが定められた。

ソ連対文連と日本対文協の間には、現在多くの分野の協力関係が展開されているが、その一つに、ソ連文化省と西武美術館との美術展交流、ソ連高等教育省と東海大学、創価大学などとの研究者と留学生交流が続けられている。

この協力関係もむろん、新しい長期計画に継続された。日本対文協とソ連東欧貿易会がレニングラード大学と実施している研修生交流も当然、新計画に含まれることになった。

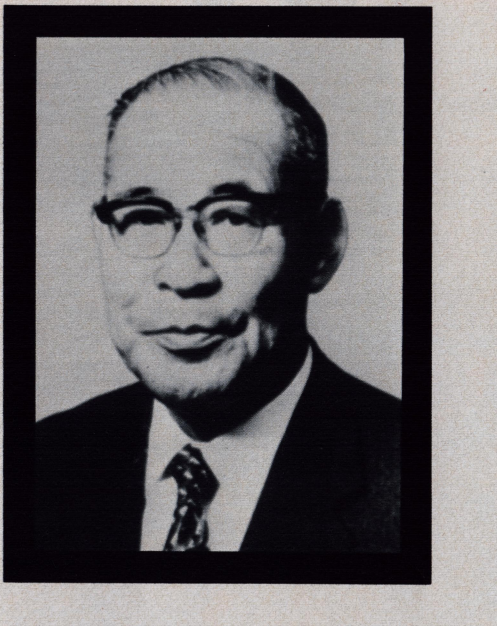
新しい長期計画の調印を終わってクルグロワ議長は、「本計画は日ソ間の新たな可能性を切りひらくものであり、長期にわたる両団体の友好的な事業の発展を保障するものである」と語り、松前重義会長も「日ソ間の友好関係を増進することは、現在ますます必要となっている。このたび調印された計画がその一助となることはまことに喜ばしい」と述べた。また来賓として出席したパブロフ駐日大使も、「この計画に含まれている内容は、まことに大きく、日ソ間の友好増進に寄与することは疑いない」と祝辞を述べた。

この日の調印式には、ソ連側からクルグロワ議長のほか、パブロフ駐日大使、スミルノフ対文連極東部長、ハーリン駐日ソ連大使館一等書記官、日本側からは松前会長、松前達郎副会長（参議院議員）、横川正市副会長（日ソ貿易協会会長）、中村曜子副会長、辻原弘市理事長、杉森康二事務局長らが出席した。

なお、クルグロワ議長は滞日中、福永健司衆議院議長、木村睦男参議院議長への表敬訪問を行ったほか、松前重義日本対文協会長、桜内義雄日ソ友好議連会長、赤城宗徳日ソ親善協会会長、鳩山威一郎参議院議員、原文兵衛参議院議員、安部文男衆議院議員・自民党日ソ懇談会事務局長、石橋政嗣社会党委員長、竹入義勝公明党委員長などの政治家、池田大作創価学会名誉会長、堤清二西武流通グループ代表、加藤琢治日ソ交流協会会長、横川正市日ソ貿易協会会長、中村曜子月光荘社長らと精力的に会談し、今後の日ソの友好関係増進について話し合った。

クルグロワ議長はまた名古屋を訪れ、鈴木礼治愛知県知事、本山政雄名古屋市長を表敬訪問したほか、竹田弘太郎名古屋商工会議所会頭、鈴木重信東海テレビ社長と日ソ間の交流について協議した。また、滞在中、日ソ友好団体代表との間で、今秋モスクワで開催される第4回日ソ円卓会議の運営について意見を交換した。

永野重雄氏の逝去を悼む



日本商工会議所会頭、日ソ経済委員会代表委員の永野重雄氏が5月4日、入院先の東京女子医大病院で逝去した。83歳だった。永野氏の死去に際し、ニコライ・チーホノフ・ソ連閣僚会議議長をはじめとするソ連側関係者は次のような弔電とお悔やみの言葉を寄せた。

永野重雄日本商工会議所会頭・日ソ経済委員会代表委員のご逝去を知り、深い悲しみにくれています。

ソ連では永野重雄氏は、ソ日両国間の互恵の経済協力の源に立ち、ソ日通商・経済関係の発展に大きく貢献した日本の著名な財界人として知られてきました。

1年少し前にモスクワで行われたわれわれの会見の心暖まる実務的な雰囲気を、私は覚えています。

ソ連と日本との善隣と協力の発展をめざす永野重雄氏のけだかい活動は、われわれの記憶にいつまでも残るでしょう。

私の心からのお悔やみをお受け取り下さい。

ソ連閣僚会議議長
N・チーホノフ

尊敬する五島　昇　様

ソ連貿易相、ソ日経済委員会代表委員N・S・パトリチェフの委託により、日本商工会議所会頭、日ソ経済委員会代表委員永野重雄氏のご逝去に対する彼の深い哀悼の意をお受け取り下さい。

ソ連の人々は、日ソ通商・経済関係の発展に多大の努力を払い、日ソ間の相互理解と善隣関係の強化に大きく貢献した日本財界のすぐれたリーダーとしての永野氏をよく知っており、いつまでも忘れないでしょう。

故人の親族の方々にわれわれの深い哀悼の意をお伝え下さい。

駐日ソ連大使
V・Y・パブロフ
駐日ソ連通商代表
V・B・スパンダリヤン

日本商工会議所会頭臨時代行
五島　昇　様
東京
一九八四年5月7日

五つの目で見たシベリア(5)

ソ日共同取材



ニジネイリムスク地区のあるイリム川下流部のタイガ

編集部から——8号から始まったソ日共同取材「五つの目で見たシベリア」の5回目。本誌初の試みとして、昨年の10月、日本のソ連経済専門家・仲　弘氏、本誌モスクワ編集部のフェリクス・プラテ記者、それにカメラマンのワレリー・シュストフがシベリアのイルクーツク州を中心に共同取材しました。は、その成果です。次号で完結するこのシリーズ画についての皆さんのご感想、ご意見をお待ちしています。

タイガの中の林業場

本誌モスクワ編集部
フェリクス・プラテ

前号で触れたように、イルクーツク州ニジネイリムスク地区には鉄鉱石だけでなく、豊富な森林資源もある。だから、われわれソ日共同取材班がこの地を訪れながら、タイガへ出かけて、この地区で第2位の意義を持つ経済部門の実態を取材しなかったら、片手落ちということになろう。

ニジネイリムスク地区には木材の調達（伐採と搬出）と加工に従事する企業が21ある。地区は年間三五〇万立方mを超す良材を生産している。これは主としてアカマツ、カラマツ、エゾマツ、トドマツ、ドロノキ、シラカバである。



伐採現場を訪れた共同取材班。左からヘルメット姿の似合う仲さん、プラテ記者、伐採作業について説明するノーバヤ・イギルマ林業場のウラジーミル・チチカーノフ場長。

現代の林業経営がどういうものか、詳細かつ十分な知識を得ようと、われわれはジェレズノゴルスク・イリムスキーの北にあるノーバヤ・イギルマの国営林業場へ向けて出発した。

ジェレズノゴルスク市内では、3日間に降った雪が、冷え込みが零下5度ほどと大したことがなかったため、自動車のタイヤと人間の足の下で黒い泥と化していた。ノーバヤ・イギルマまでジェレズノゴルスクから自動車道路で約一〇〇kmである。しかし、このちょっとした距離の道中で、われわれは冬のシベリアではどんな旅行に対しても細心の注意をもって臨まなければならないということを思い知った。

出発は朝8時と決められた。早朝にもかかわらず、ホテルのキチンはもう働いていて、われわれはレストランでおいしいハムエッグを作ってもらい、新鮮なキュウリとトマトを食べ、紅茶を飲んだ。ここの野菜はすでに述べたように、すべて他の地区から移入されている。しかし、その質のよさは、モスクワから来たわれわれもうらやましさを感じたほどだった。

8時までに党ニジネイリムスク地区委員会のユーリー・チェクラエフ部長がホテルに車で迎えに来て、われわれは出発した。

農村地帯で最も普及していて人気の

▶ ここでは機械による伐採と平行して、チェーンソーによる伐採も行われている。



左上　切り倒された木を道路まで搬出するＬＰ18Ａ型機

左中　重量挙げ選手のような動作で丸太を運搬車に積み込むＰＬ２型ローダー

左下　木材運搬車は１回に最高30立方ｍの丸太を伐採区から運び出す。

木の切り倒しから片づけまで"ひとり"でこなすＬＰ19型木材伐採機



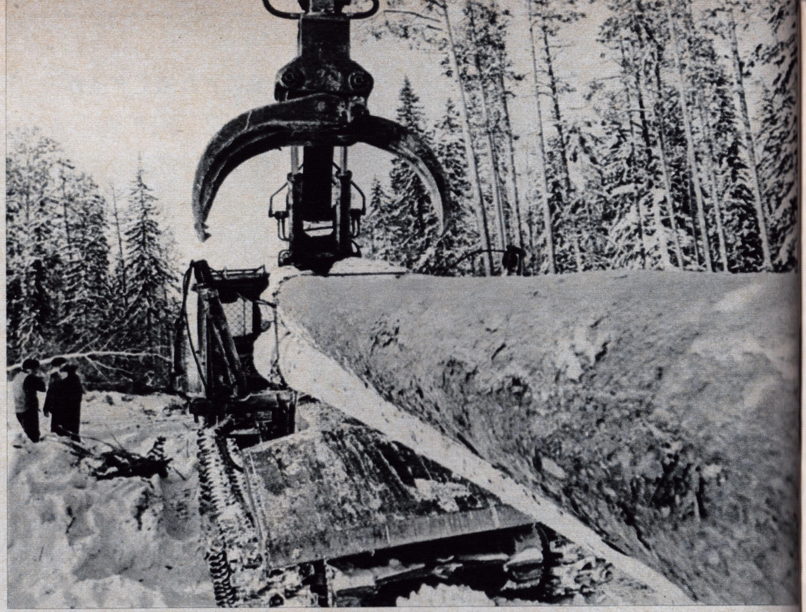
ある車は、"ジープ"や"ランドローバー"に似た車高の高い4輪駆動車である。これらの国産車は絶えずモデルチェンジや改良が行われていて、需要が伸びており、今ではお互いに大して違いのないこのタイプの車をソ連のさまざまな自動車工場が競って生産している。われわれがイルクーツク州で乗った車はUAZ469（ウリヤノフスク自動車工場製469型車）で、一般には"ウアージク"という名で通っている。

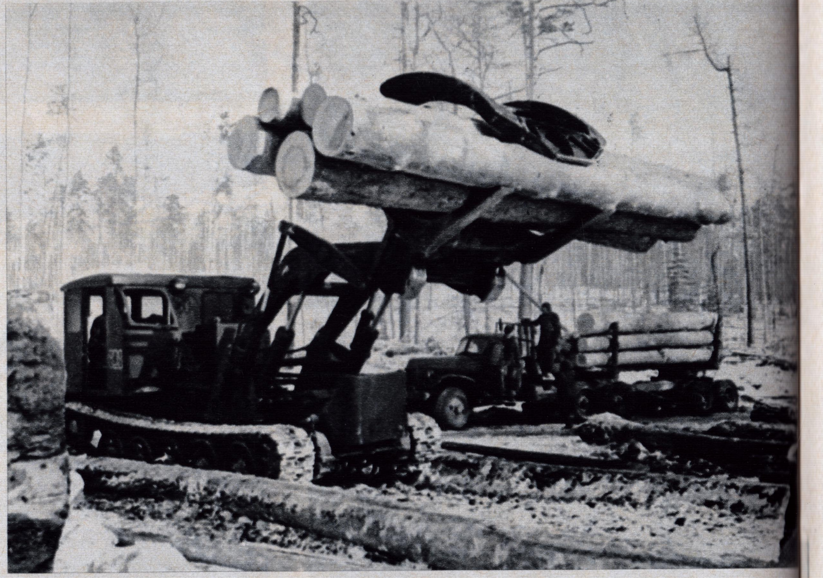
中緯度地帯用や南部用にはこの車はコンバーティブルの幌つきで製造されているが、ここシベリアではその幌を木とフェルトで補強し、クッションも追加してある。北部ではこの種の車に以前から二つ目の、より強力なヒーターを追加し、窓ガラスも追加して乗りこなしている。最初の窓ガラスと補強した窓ガラスの間に出来た空気の膜のおかげで窓は曇らないし、霜に覆われることもない。こういった防寒対策で車内は外気温が零下30度以下の時でも比較的暖かい。

われわれがノーバヤ・イギルマに行くために乗り込んだ車もそういう"ウアージク"だった。市内から出た直後はまだ、反対方向から来る大型トラックや乗用車によく出会い、同じ方向へ行く自動車を見かけたが、ほんの15分ほども行くと、われわれの車は果てしないタイガの中を事実上たった一台だけで走っていた。

タイガというのはヤクート語で、通行困難な原生林という意味である。ユーラシアと北アメリカの温帯の広大な地域がタイガに覆われている。タイガの木は主に針葉樹である。シベリアのタイガにはエゾマツ、トドマツ、ベニマツの多い"暗い針葉樹のタイガ"と、アカマツとカラマツの多い"明るい針葉樹のタイガ"が見られる。われわれが訪れたイルクーツク州はまさにそのアカマツとカラマツで名高い。タイガをのんびり散歩することは不可能だ。タイガはそういう森とは違う。ここではびっしり生えている木と木の間を通り抜けねばならないし、しょっちゅう倒れている木を腰をかがめてくぐり抜けたり、よじ登ったりしなければならない。タイガは場所によっては非常にうっそうとしているので、そういう所では夏の晴れた日でも薄暗く、日光は地面まで届かない。

文字通り、いつの間にか、あたりの風景も、道路の状態も変わっていた。道はかなり急な上り坂となり、道路の泥は次第に白く見えるようになり、やがてトラックの車輪で踏み固められ、つるつるになった氷まじりの雪に完全に変わった。こうしてわれわれはジェレズノゴルスクのある盆地を出るために七〇〇ｍほどの峠を越えた。そのあと道は下り坂となったが、やがてまた小山に向かって上りはじめた。







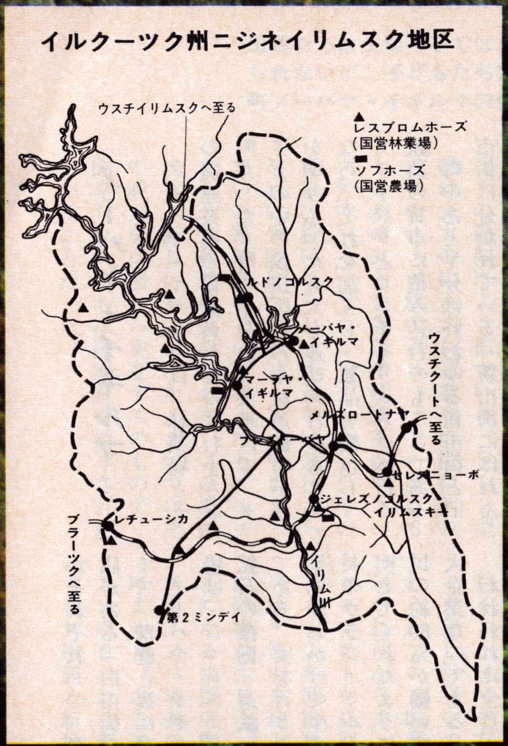
寒くなったのがはっきり分かった。あたりは山岳地帯になっていた。運転手は速度を落とし、前車軸駆動のレバーを引いた。われわれは会話を中断し、車内の手すりにつかまりながらやはり道路を注意深く見守りはじめた。車はハンドルの言うことを聞くのをやめ、スピンで振り回され、道路に直角に向きを変えたり、道路のふちぎりぎりのところを走り抜けたりした。

言っておかねばならないが、ここではいわゆる道路の端は事実上ないに等しかった。道路は盛り土した堤防のような感じで、全線雪に覆われており、その両側は大きく深い斜面になっている。だから道路から下へ車が滑り落ちたら、トラクターかクレーンを使わなければ引き上げはまず無理だ。

そこからさらに数km進むと、トレーラーをつけた大型ダンプカーの列が止まっているのに出会った。先頭の一台が長い上り坂を乗り切ろうと頑張っていた。明らかに、この道路が滑りやすくなってから余り時間がたっていないようだった。道路管理事務所はまだ最も危険な個所に砂利や砕石その他を撒いていなかった。ここにはもう自動車交通監督局（交通警察）のパトロールカーが出てきていた。

われわれの車は急ブレーキをかけ、キャタピラー式のブルドーザーに引かれてトラックの一台が坂を上り終わるのを待った。それから、ダンプカーの運転手たちのうらやましそうな、そして同時に軽べつ的な視線を受けながら、特に苦労もせず危険個所を通り過ぎた。

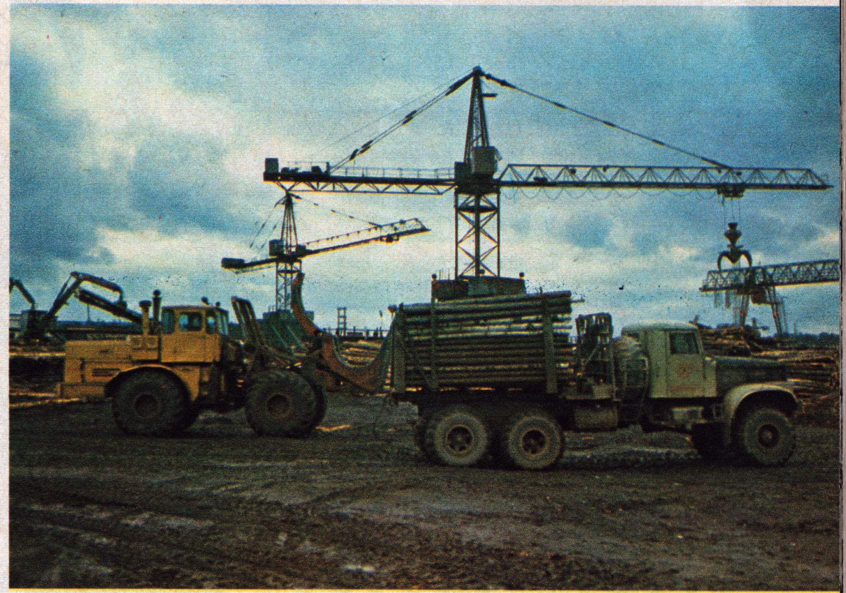
しばらく停車している間に、われわれの同行者は自動車交通監督官と短い言葉を交わした。監督官の話では、彼らは朝からこの道路で砕石や砂を積んだダンプを何台も止めて、事故と渋滞を予防するためにその積み荷を利用したということだった。確かに、ノーバヤ・イギルマに行き着くまでの間に、われわれは道路から斜面の下に滑り落ちたダンプカーを2台見かけた。運転手たちはうらめしそうな顔で救いの手が来るのを待っていた。





◀風にざわめくタイガ

ノーバヤ・イギルマ林業場の貯木場。さまざまな運搬車とローダーが場内の至る所で丸太を積み上げている。





木林運搬車が運んできた丸太はクレーンでコンベヤーの上に乗せられ、加工部門へと進む。

加工の第1段階で丸太はいろいろな寸法に切断され、ホッパーへ入る。



林業場の労働者ビリチェンコの家で。ウラジーミルとナージャの夫婦はジャーナリストに質問されたり、写真を撮られたりすることに慣れていないので、取材に少しとまどっていた。



ノーバヤ・イギルマ

ノーバヤ・イギルマは、林業場とその関連業務の従業員たちの住む小さな町だった。町の半分は工業地区で、タイガの中の伐採区から木材運搬車が枝を切り払った丸太を運び込むのもここなら、それを加工し、製品を梱包し、ブラーツクとウスチイリムスクへ行く鉄道の貨車に積み込むのもここである。

町のあと半分はいわゆる新市街と旧市街に分かれている。新市街にはれんが造りとプレハブの家、百貨店と病院がそれぞれ一つ、幾つかの幼稚園と商店がある。旧市街の家は平屋か2階建てで、前庭と裏に菜園がついている。

ノーバヤ・イギルマにとっての林業場は、ジェレズノゴルスクの場合の鉄鉱石の採掘・選鉱コンビナートと同じである。実を言うと、町そのものも林業場のおかげで生まれたのだ。林業場長のウラジーミル・チチカーノフが説明してくれたように、林業場は地元住民の約80%が働いているたった一つの大企業なのである。

われわれは全員――仲さんも、シュストフ・カメラマンも私も――シベリアでの木材の伐採がどういうものか、これまでに見て知っていた。それでも、ノーバヤ・イギルマで目にしたものは、われわれを驚かさずにはおかなかった。その理由はこうだ。

誰でも知っていることだが、木材産業ではまだ手作業が非常に多く、労働者は悪条件の中で働かなければならない。木の伐採と運搬に従事する人たちは冬は厳しい寒さと深い雪、交通困難という条件下で働いている。夏は夏で沼沢地に難渋し、ブヨや蚊、その他いろいろな血を吸う虫に悩まされている。これらの虫のために労働生産性が時には半分以下に低下することもあるほどだ。

このため、木材の調達作業を軽くしてくれる新しい機械ならどんなものでも、関係者の真剣な関心と考案者への感謝の気持ちを呼び起こすことになる。このノーバヤ・イギルマ林業場はまさにそういう新技術をテストするために創設された林業場で、新技術はここでのテストに合格すれば、シベリアの他の林業場でも使われるようになる。しかもここでテストされるのは国産の技術だけに限らない。外国の機械もテストされる。外国製の林業機械の場合は、ソ連の貿易公団にその機械を買うか買わないかの勧告をしている。

われわれが林業場を訪れた時は、国産の機械だけをテストしていたが、ソ連製の機械が実に器用に働き、人間の労働を大幅に軽減しているのを見て、われわれはすっかり感心してしまった。

伐採現場でわれわれが見たのは、タイガの奥深くへ入り込み、木材を伐採して片付ける機械LP19だった。この機械の外見はパワーショベル（掘削機）に似ているが、ブームの先のバケットの代わりに、強力なリング状のグリップのある機械の手を持っている。この手が、握りこぶしのように最大60cmまでの直径の木の幹をつかみ、1秒もたたないうちに木を切断し、そのまま木を持ち上げ、脇の方へ動かし、丸太の山の上へきちんと積み上げる。そのあと、枝が切り落とされる。優秀なオペレーターだと、1交替時にこの機械で最高五〇〇立方mの木材を調達できるという。

搬出機のLP18Aは外見がキャタピラー式のトラクターに似ていて、ゆるい傾斜の荷台を持っている。前述のLP19型伐採機のあとに従い、切り倒された木を引き寄せ、自分でパケットにまとめ上げ、ロープをかけ、自分に縛りつけて、伐採現場から木材運搬車の入れる平坦な場所まで運び出す。LP19型機も、LP18A型機もオペレーター一人ずつで、助手は一切必要としない。しかもオペレーターは運転室から外へ出ることがない（必要がないのだ）。

木材運搬車は一度に30立方mまでの丸太を運ぶが、丸太を運搬車に積み込

母親たちは土地っ子ではないかもしれないが、子どもたちは林業の町ノーバヤ・イギルマの生まれだ。



むのは投げ込み式のローダーPL2型機である。この機械の動作は重量挙げ選手の動作によく似ている。PL2型機は丸太の山と木材運搬車の間に入り、二つのリング状のグリップで一度に3～4本の丸太を重量挙げ選手がバーベルを持ち上げるように差し上げ、自分の背後に投げ下ろし（重量挙げ競技なら、これは失敗になるが）、そこに止まっている運搬車の上に積み上げる。チチカーノフ林業場長の話だと、この機械はもう新しいものではなく、すでにその威力を以前から実証ずみのもので、開発した人たちは国家賞を授与されたということだった。

時間がなかったため、残念ながら、チェーンソーを使っている伐採現場へ行くことはできなかった。チェーンソーを使う世界中の伐採労働者たちに恐れられている職業病に振動病という病気が以前からあったし、今もある。チェーンソーを長期にわたって使っていると、手の関節にある種の変化が生じ、神経・筋肉系統と骨・関節系統の活動に障害が生じる。その結果、身体障害者になる伐採労働者も少なくない。チチカーノフ場長の話してくれたところによると、ここの林業場は最近、チェーンのまったく新しい作動原理を利用するソ連製の新型チェーンソーにすばらしい評価を与えたという。このチェーンソーは振動がほとんどないので、恐らく、この職業病は完全に消滅するだろうということだった。

ビリチェンコ一家

タイガの中の木材の伐採と搬出の現場でも、″下の倉庫″と呼ばれているノーバヤ・イギルマの製材工場でも、働いているのは主に若い人たちである。

林業場の労働者の暮らしぶりを知りたかったので、われわれはだれかのところを訪問したいと申し入れた。林業場長は労働組合委員に、だれがいま非番かを教えてもらった。彼らは相談して、だれかが急いで車でどこかへ行って戻ってきた。やがて、ビリチェンコ一家が私たちを招いてくれることになった、と告げられた。

ウラジーミル・ビリチェンコは製材工場の大割りラインのオペレーター班長。36歳で、労働歴18年。ウラルの出身で、この林業場へきて9年目だとのことだった。

彼の作業班は16人から成っており、主として3級と4級の技能資格の作業員で、ビリチェンコ班長自身も4級である（6級が最高）。賃金は平均月額四〇〇ルーブル（林業場全体の平均は



授業が終わって学校から出てきた子どもたちはどこでも同じようだ（ノーバヤ・イギルマで）。



船に引かれて川を下る木材



いかだが通過したあと、川はまた元の静けさに戻った。

四七〇ルーブル、月に七〇〇ルーブル稼ぐ者もいる)。ソ連の賃金基準からすればこれは非常に高額だが、シベリアや北方の厳しい労働条件の下で働く人々にとっては普通の額である。

ビリチェンコの妻ナージャ(34歳)は鉄道病院の補助医で、イルクーツクの出身。町では中級医療員が足りないので、ナージャはしばしば2交替制で働く。これによって収入がかなり増え、月平均二五〇ルーブルほどになる。

ビリチェンコ一家には子どもが2人いる。5歳の娘は幼稚園へ行っており、7歳の息子は1年生である。一家4人は集中暖房つき7階建てアパート3階の3DKのフラットに住んでいる。このフラットを林業場から受け取ったの



ウスチイリムスク木材工業コンプレックスのパルプ工場

は4年前で、それまでは木造の平屋の家に住んでいた（そこの自家菜園はいまでもビリチェンコ一家が使っている）。

　私たちがウラジーミルと話している間に、ナージャが食卓の用意をした。メーンは魚の煮こごり。この魚は店で買ったのではなく、ウラジーミルが一昨日、家から15kmほど離れたところにある貯水池で釣ってきたものだ。そのほか、キノコや野菜の塩漬けとマリネー、コケモモのびん詰めとジャム（酸味が強く、肉料理に合う）、ブルーベリーとキイチゴのジャム——すべて森の幸に手を加えたものだ。野菜の一部もビニールハウスで作った自家製だとのことだった。

　一家は自家菜園に熱中している。林業場の管理部と労働組合のイニシアチブによって、町ソビエトは町から13km離れた協同組合農園の近くの土地を労働者に提供している。各家庭に割り当てられるのは六〇〇平方m。このためにビリチェンコ一家は協同組合農園に80ルーブルの出資金を払っている。

　ビリチェンコ一家の菜園にはまだ建物がない。一家は出来合いのものを購入するつもりはなく、多くの家庭と同じように、自分たちで建てようと考えている。4m×5mの、屋根裏部屋つきの丸太小屋にすることまで決めている。できるものなら自分で建てるにこしたことはない。安くつくし、その上、林業場の労働者は割引で木材が買える。

　部屋の中には家具はあまりない。日本製（ソニー）のテープレコーダーとプレーヤーは町の百貨店で買ったものだ。ナージャの話では、家具がほしくないわけではないが、特定の家具がほしいので、オリジナルな輸入品がこの町かジェレズノゴルスクに入荷するのを待っているのだそうだ。

　数年まえ、ウラジーミルは小型乗用車ジグリ（一五〇〇ccで値段は約八〇〇〇ルーブル）を買い、レンガ製の共同ガレージの使用権を二〇〇〇ルーブルで手に入れた。この車で釣りや猟に行き、森や地区の中心地へ行く。

　ウラジーミルは悠長な性格だから釣りや猟が好きで、子どもの相手をしたり自動車をいじくっていれば退屈を知らない。おしゃべりがしたくなったら、友人と一緒に蒸し風呂へ行く。それだけで十分楽しめる。ナージャはときどき退屈で、にぎやかなところへ行ったり、大都会の商店をのぞいたり、都市の人々とつき合いたい、と漏らした。そのために彼らは毎年、休暇には子どもを連れて、ナージャの親戚が住んでいるモスクワへ行く。鉄道病院に勤めているナージャには毎年、鉄道を使って無料で休暇に行ってくる権利が与えられている。

　ビリチェンコ一家は財産に五〇〇〇ルーブルの保険をかけている（保険料は年に12ルーブル）。自動車保険の保険料は年に30ルーブル。ウラジーミルと子どもたちが各一〇〇〇ルーブル、ナージャが主婦と母親として2倍の（彼女自身が冗談っぽくそう説明してくれた）二〇〇〇ルーブルの生命保険にも入っている。若い人はみんなそうだが、保険に対してはそれほど真剣ではないが、すでに一定の利益にあずかった。たとえば、息子が指の骨を折ったが、これに対して一二〇ルーブルの保険金を受け取った。

　……私たちはシベリアっ子の大好物である砂糖のかかったびん詰めのコケモモを食べ、マツの実をかじって、貯水池での釣りやタイガでの猟の話を聴いていたが、とつぜん無言のうちに理解した。われわれ3人——モスクワと東京の住人には、まさにシベリアのこの広大さ、空気、毎日雄大な、いまのところまだほとんど手のつけられていない自然とつき合う可能性がいちばん欠けているのだ、ということを。

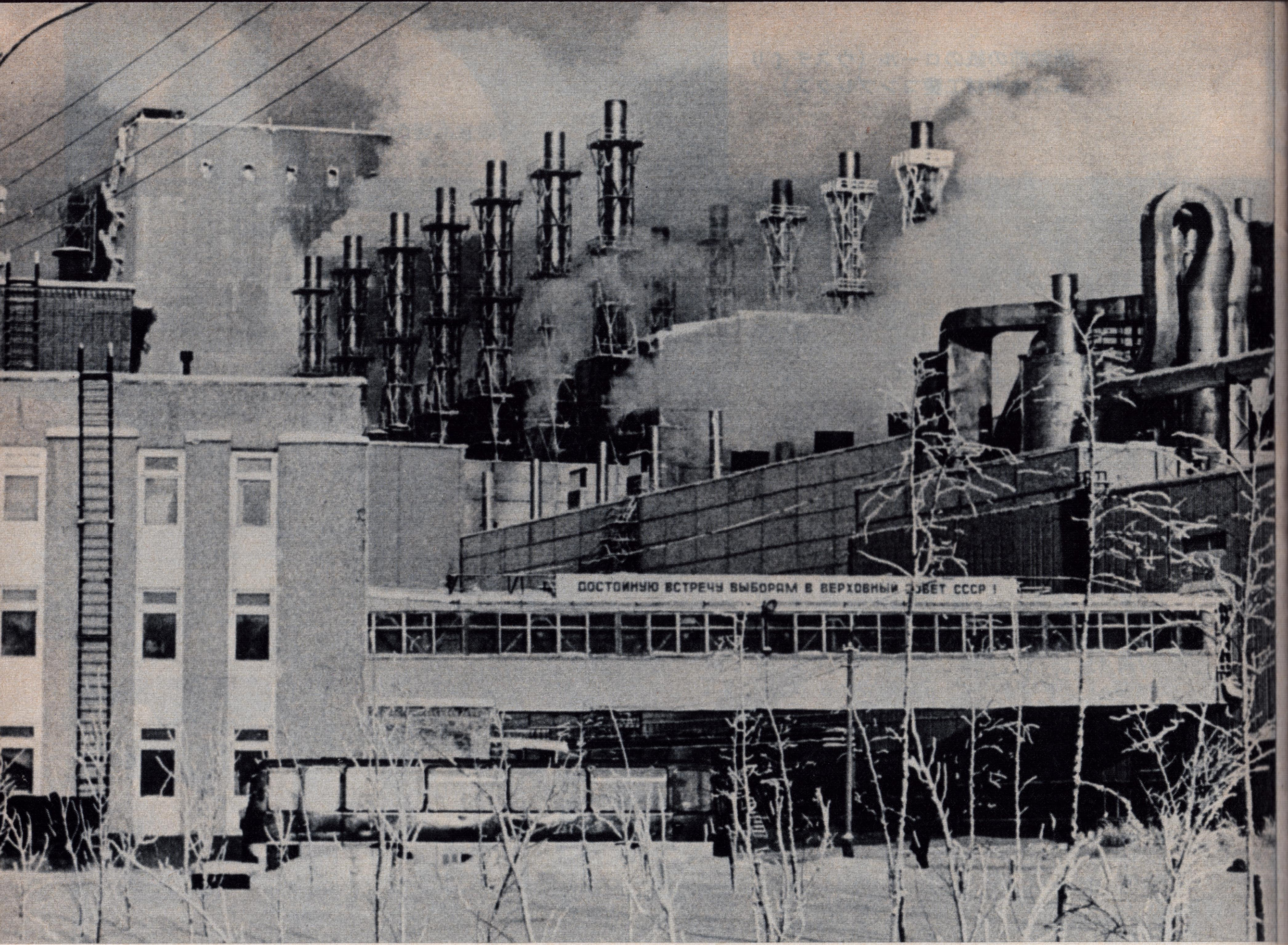
シベリアの森林資源と日本

ソ連経済研究家　仲　弘

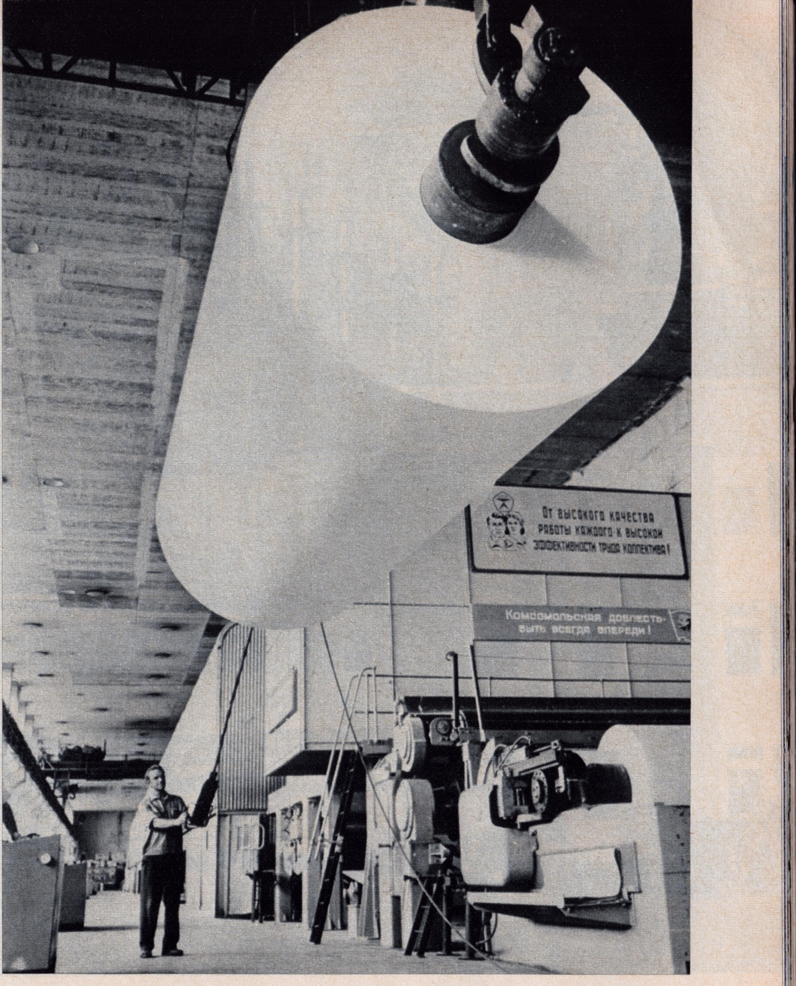
　すでに読者には地域生産コンプレックス（総合体）の名は耳なれたものになっているとおもう。しかし大多数の人々は大きな工場や鉱山の建ち並ぶ人口の密集した工業地帯を思いうかべるにちがいない。事実ソ連にはこのイメージに近い地域生産コンプレックスも存在する。完成した工業地帯が地域生産コンプレックスの名で呼ばれるべきか否かについては、ソ連の学者の間でも異論がある。それはそれとして地域生産コンプレックスと日本の工業地帯との概念とは全然別のものである。似ているとすれば、それらの両方とも行政的な区画に拘束されない点であろう。ブラーツク・ウスチイリムスク地域生産コンプレックスのなかにいくつ行政区画としての地区があるか、答えられる人はいない。人口二十三万のブラーツクを中心とするこの地域生産コンプレックスは、イルクーツク州の北部に電力、アルミ、鉄鉱石、木材加工、若干の機械工業などを新しく集中的につくりだす。

　さて、この総合体の真ん中にあるニジネイリムスク地区訪問の第二日め、私たちはジェレズノゴルスクから北百キロにあるノーバヤ・イギルマの町に出発した。フレプトーバヤまでのはじめの十六キロはすでに複線化されたバム鉄道に沿ってはしる。新幹線よりも大きなレール、交流電化のすばらしい鉄道であることが素人の私にもわかる。そこからはウスチイリムスクにむかう支線にそうことになる。まわりは初めから最後までシベリアの森林、いわゆるタイガである。このタイガの木材資源の開発は、レスプロムホーズという企業で行われる。これは日本語には訳しようのない言葉である。日本では育苗、植樹、森林管理、伐採、搬出、製材などの工程がそれぞれ別の林業農家や、製材所、材木商などによって行われる。国有林にあっても営林署が行うのは普通は植樹から搬出までである。私達は、今からそのノーバヤ・イギルマ試験レスプロムホーズを訪問するわけである。

　木材は普通の人が想像する以上に我々の生活と大きな関係を持っている。都会の家々が鉄筋コンクリート造りになり、子供の玩具までがプラスチックになると、木材は我々の生活から消えつつあるようにさえ思われてくる。しかし実際は、林業は農業と同じように現代の文明の基礎である。この基礎のうえにパルプや紙、合板、ハードボード、チップボード、積層材などの製造、家具工業、木材化学、繊維産業、建設業などのさまざまな分野がひろがっている。私達現代人は、古代の人々と同じように木材なしで生活できないばかりか、その需要はますます大きくなりつつある。日本は毎年一億立方メートル以上の木材を消費している。生まれたばかりの赤ん坊も含めて日本人は、一人あたり約一立方メートルの木材を、その住む家からきらびやかなイブニングドレスとしてまで様々な形で年ごとに必要としている。一立方メートルの木材は六百着のスーツになる。この道の両側に絶え間無くつづくタイガは未開発のしるしではなく、限りない工業開発の可能性の象徴である。このニジネイリムスク地区の人口は七万二千四百人、一平方キロメートル当たりの人口密度は二人である。バム圏全体の人口密度〇・六人に比べれば確かに大きいが、日本の人口密度三百七人、ソ連全体の十二人、イルクーツク州の三・四人と比べれば、森林におおわれたこ



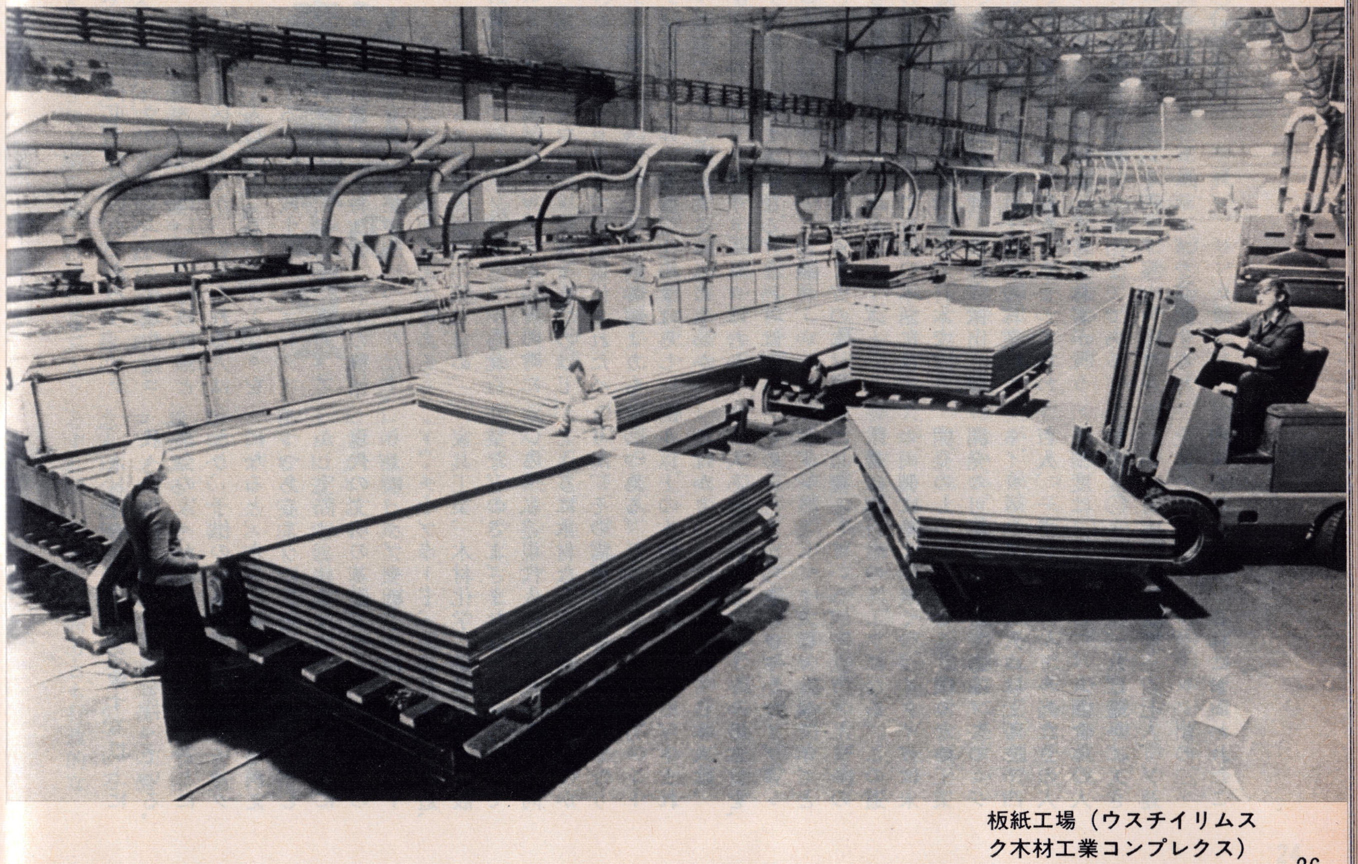
断裁前の紙のロール（ウスチイリムスク木材工業コンプレクス）



の地域の工業資源の有望性がよくわかる。資源の集中は地域生産コンプレクスの成立の条件のひとつである。ついでながら今私達がいるこの場所はイルクーツク州の北部というよりもむしろ中部で、すでに相当開発の進んでいるバム圏東部である。といっても州都イルクーツクからは五百キロ足らず、東京からいえば盛岡ぐらいの距離になる。

ノーバヤ・イギルマ試験レスプロムホーズは全体として年間処理能力五十万立方メートル、うち丸太が四十万立方メートル、鉄道用枕木三十万本が主製品であり、ほかのブラーツクとウスチイリムスクのパルプ工場にチップを出荷している。従業員は千五百人とのこと。企業活動の分野は、森林の中での樹木の伐採と、工場内での枝払い、樹皮はぎ、定尺切断、仕分け、貨車への積み込み、また製材や枕木加工などである。

この企業は七年前につくられた。バム圏開発計画の指導者ユーリー・ソボレフ教授は、バム地域のレスプロムホーズの最適規模として年間処理能力三十万ないし五十万立方メートルを提案



板紙工場（ウスチイリムスク木材工業コンプレクス）

ブラーツク木材工業コンプレクスの製品倉庫。輸出用の新聞用紙をチェックしているところ。



している。この企業はまさしくこの上限の能力をもっている。ソボレフ教授は資源量、労働生産性、当時の新しい機械設備の能力、バム圏の地理的条件などを考慮して「多くの経済専門家の計算の結果」として書いているが、このノーバヤ・イギルマ試験レスプロムホーズの企画・設計・建設がこれらの経済計算と無関係であったとは思えない。

さらにもうひとつの事情がある。ソ連の土地、自然資源は原則として国家のものである。森林も例外ではない。しかしその伐採は林業省だけが行っているのではない。多くの省庁、森林の少ない共和国が木材を必要とし、伐採許可をソ連邦林業国家委員会に求める。許可を得た機関はシベリアのあちこちで小規模な伐採を行う。当然「国家百年の計」は無視され、貴重な森林資源は「虫食い」状態になる危険性にさらされることになる。これに対処するには「強い大きな手」が要る。ソ連邦林業省がすべての事業を一手に引き受ける強力な実力を持たねばならない。優秀な生産性の高い装備をもった大型のレスプロムホーズは、このためにも必要である。

ノーバヤ・イギルマのレスプロムホーズに「試験」の文字が付いているのは、様々な意味を持っている。イルクーツク経済研究所のフィリシン教授は、シベリアには五十万立方メートルではなく、百万立方メートルのレスプロムホーズが必要であると考えていると私に話してくれた。

所長のチチカーノフ氏は四十五歳ぐらいの鋭い目付きをしたエネルギッシュな指導者である。彼は直ちに伐採現場に行くことを提案した。泥でこねくりまわされた工場の敷地を離れてまもなくレスプロムホーズの「林道」がはじまった。ところが驚いたことにこれは日本の「林道」のようなモトクロス愛好者むけのものではなく、この村まで走ってきた「幹線道路」よりはるかに立派なコンクリート舗装の自動車道路である。やがて支線に入り、幅二キロメートルぐらいに一面にタイガが伐採された現場に到着した。

じつは、ここに来るまでの間に、車に乗り込むと私はすぐにチチカーノフ氏に振動病のことを質問した。チェーンソー、つまり木材を伐るエンジンつきの手持ち型の機械ノコギリは日本でもひろく普及しているが、これを常に使用している山林労働者のあいだでは、機械の振動のため手の毛細血管が切れてしびれや痛みがおこるようになる。白蝋病という別名が示すように手が蝋のようにまっ白になる職業病である。七—八年働いた労働者の間では四割近くの人に起きるといわれている。日本では全林野など労働組合がこれにたいする対策をとるように使用者側に要求してきているが未だ解決をみていない。



木の伐採規則を説明するノーバヤ・イギルマ林業場の林務官（左）

チチカーノフ氏もこのことはよく知っていた。彼は、チェーンソーの改良、すなわち重心位置と回転数の改善により非常に大きな成果があったという。しかし更に彼は自信たっぷりに「まあ現場を見てください」という。

たしかに彼の言うとおりであった。シベリアの条件のもとでもはやチェーンソーの使用は時代遅れであることを私も一見して理解した。そこには、もはやチェーンソーの姿は無かった。もっと正確にいうなればチェーンソーが無くなったわけではない。ただ、チェーンソーを使っているのは、人間ではなく、LP—一九型伐採パケッチング機とよばれる伐採ロボットであった。長さ八メートルの鉄の腕—マニピュレーターを持っており、その先に二本のリング（ジョウ）がある。油圧により操作されるこの腕が立木に近づき二本のリングを開いて木の幹をつかみ、がっちりと固定する。下側のリングの下に大型のチェーンソーがあって数秒間で立木の根元を切ってしまう。機械はくるりと向きをかえ、反対側の地面に伐採した木材を置く。機械全体はキャタピラーの上にジーゼルエンジンと油圧駆動装置を載せており、オペレーターは暖房の利いたキャブのなかですべての操作を行う。

まもなく同じようなマニピュレーターを持ったトラクターがやってきて、木材をかきあつめ、あざやかな腕さばきで、というよりは、この場合はマニピュレーターさばきとでも言おうか、ワイヤーロープで十数本の木材をまとめて、木材運搬車のやってくる集積場まで引きずって行く。木材運搬車はここではソ連製品の大型トラックが使用されているが、他のレスプロムホーズで働いている日本製の運搬車も好評とのことであった。これらすべての作業が暖房の利いたキャビンにいる作業者によって行われている。屋外にいるのは、全体の作業状況をみている班長さんと機械類の作動状況を観察記録している若い女性だけである。ここは「試験」レスプロムホーズなのでこの娘さんが「特別参加」しているが、普通は彼女は定員外である。彼女達の記録はすべて林業省や、機械の設計者達により詳しく検討される。

彼女は別として、五人の作業班で一交代、つまり八労働時間で四百立方メートルの木材を伐採するという。ここで先程あげた数字、すなわち日本人は

森林の状態を監視する林務官のパトロールカー



平均して年間一立方メートルの木材を消費していることを思いだしてもらいたい。シベリアの森林資源が日本人にどういう意味を持つか、この点からも考えてみる必要があろう。

工場にかえる。運搬車が運んできた木材の処理はすべて自動化されている。自動化と木の枝から樹皮にいたるまで総ての木質部分の完全利用が、このレスプロムホーズで試験されている各種の機械類、処理ラインの改善の基本的方向である。私としては、それにすべての作業員の労働が暖房の利いた屋内やキャビン内で行われるよう配慮が払われている点を指摘しておきたい。

チチカーノフ氏の話では、この地域の樹種構成はアカマツが三十パーセント、カラマツが二十パーセント、エゾマツが十パーセント、トドマツが十パーセント、シラカバとドロノキ三十パーセント、それにベニマツがすこしということである。これはこの地域の樹種構成が非常に優れたものであることを示している。アカマツは日本人にはなじみの深い木である。建築用材としても家具用材としても美しい木目をみせる。日本の伝統的な針葉樹であるスギ、ヒノキ、ヒバなどにくらべればすこし樹脂が多いとされているが、江戸城の基礎に打ち込まれているのはアカマツである。ベニマツは日本人にはなじみがうすい。エゾマツとトドマツは北海道にしか産しないが、すでに日本人にとっては、使いなれた木材といえよう。この地域は、永久凍土帯ではあるが、凍土は比較的深いところにあるとみえて、樹木の直径は三十センチ以上はあるようである。凍土の浅い所では、樹木の直径は小さくなる。チチカーノフ氏は、彼のレスプロムホーズから日本向けに度々丸太を輸出したという。「こんな遠い所から日本むけに」となかなか信じ難い気持ちだったが、樹種と丸太のサイズを見ていると、なるほどとうなずかれた。ソ連側需要者の立場からみれば、家具用に適当な樹種が多いこと、広葉樹や針葉樹の中でもパルプ製造に適した樹種が多いことなどの理由でやはりこのイリムの木材は歓迎されるであろう。

レスプロムホーズは永久的施設である。この地方で樹木が成熟し伐採可能となるには百二十年位はかかる。一ヘクタールあたりの樹木密度は二百立方メートルであるとチチカーノフ氏はいう。イルクーツク州のマツ類の成熟林の平均密度は、二百十二立方メートルで、ベニマツの場合は三百十八立方メートルに達する。容易に計算できるが、この程度のレスプロムホーズは、百二十年目にもとのところへ戻って伐採するとしても、資源量六千万立方メートルごとに、仮にイルクーツク州の森林資源密度のヘクタールあたり一四一立方メートルで計算すれば四十二万ヘクタールごとに設置しなければシベリアの

林業場で植林のために育てられたアカマツの苗



伐採のあと、森の中を片付ける労働者。





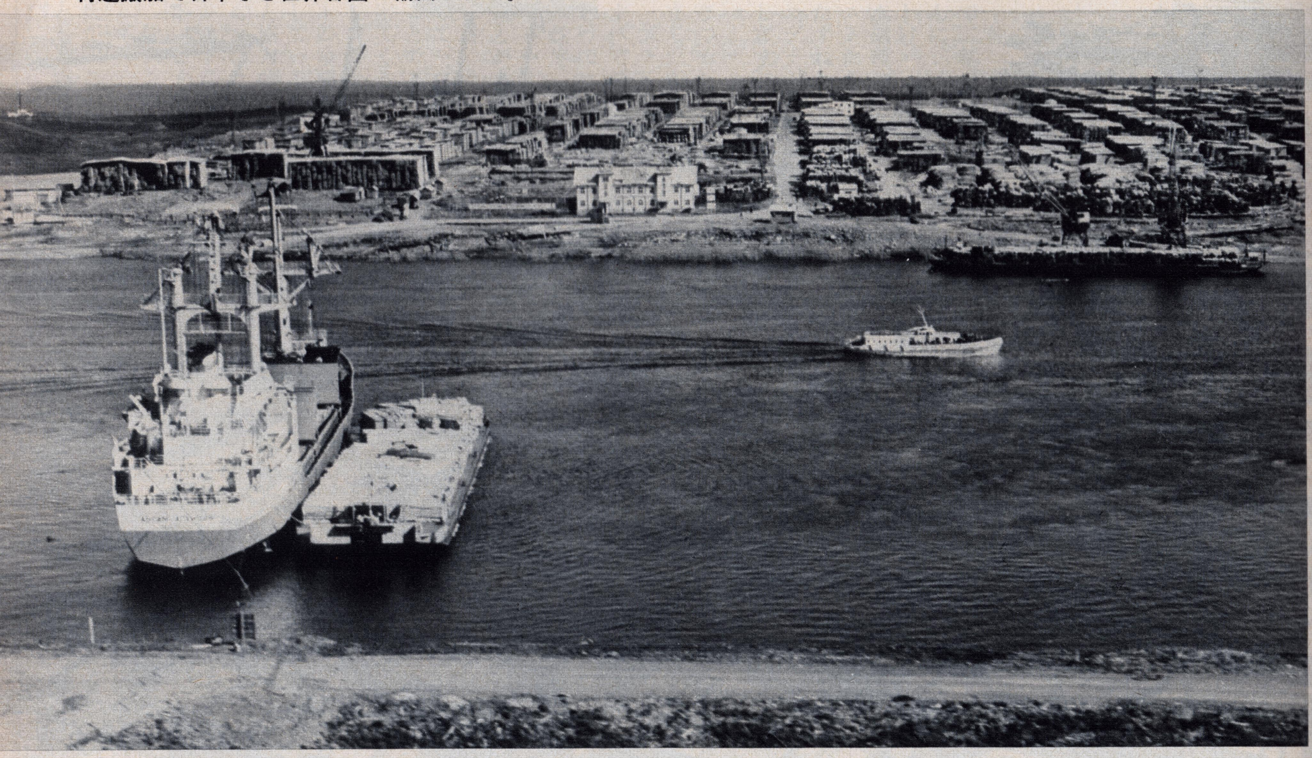
1958年6月、ソ日両国の間で通商条約が発効したあとナホトカ港に入った最初の日本船大正丸。この船が積み込んだ最初のソ連製品の中には製材も含まれていた。



鉄道で送り出される製材

森林資源の完全利用はできない。私はチチカーノフ氏に尋ねてみた。「現在最も遠い伐採現場はレスプロムホーズから何キロメートル離れた所にあるか」。答えは、四十キロということだった。「将来最大どの位の距離まで伐採現場からの輸送が予定されているか」。百キロとのことであった。大きなレスプロムホーズと言われても、これぐらいが限度である。もちろんこれは日本の尺度にすれば大きいかもしれない。しかしここで例のシベリアのことわざ「百キロメートルは距離のうちにはいらない」という言葉を思い出すのも悪くはなかろう。イルクーツク州の全面積の七十五パーセント、五十八万平方キロメートルは森林であり、その資源量は八十二億立方メートルである。この州だけでこのようなレスプロムホーズは、計算上は百三十カ所、自然保護の必要を考慮しても百カ所ぐらいは必要であろう。ソ連は世界第一位の森林国であり、世界の森林面積四十一億ヘクタールのうち二十二パーセント、九億二千ヘクタールがソ連にある。その森林資源の六十三パーセントはシベリアにあり、しかも東シベリアは西シベリアにくらべて四・八倍も大きな資源量を有している。

いっぽう日本は世界第一位の木材輸入国である。残念ながら我が国は需要量の七割近くを輸入にたよっている。日本の木材輸入で最大のシェアを占めるのは、ラワン材などでおなじみの南洋材である。輸入量の四十五パーセントはマレーシアやインドネシアから輸



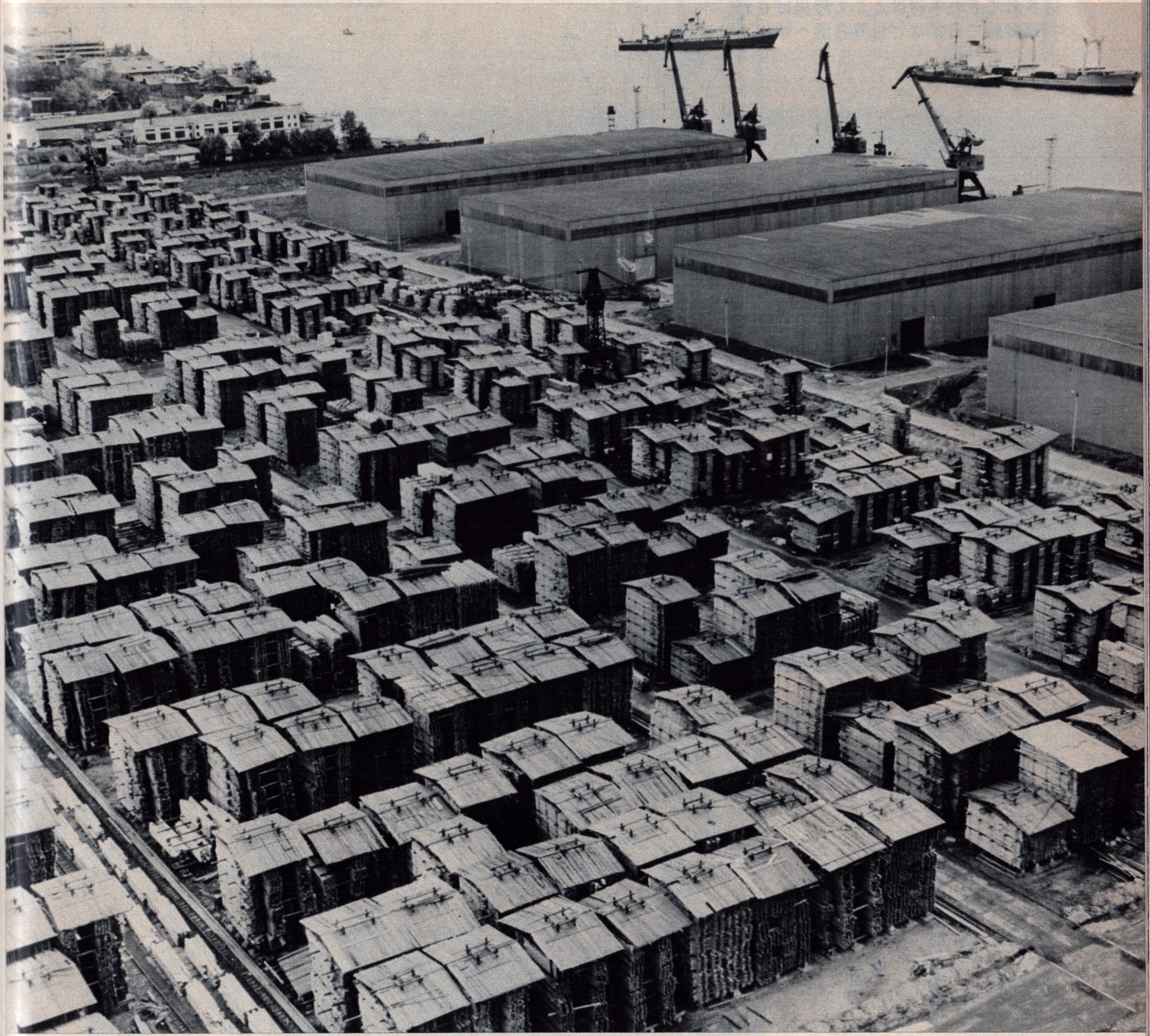
エニセイ川下流のイガルカ港。上流から浮送されてきた木材はここで陸揚げされ、木材運搬船で日本など世界各国へ輸出される。

入されている。米材（アメリカとカナダ）が第二位であり、一九八二年を例にとれば、約四十パーセントである。ソ連材は十パーセントから十七パーセントにとどまっている。直径一メートルを越す南洋材にくらべ、せいぜい三十センチどまりのソ連材は材木商の立場からみればたしかに魅力にとぼしい。いっぽうパルプ原料としてのソ連材は、いままで入荷している極東の材は割合に有利である。しかし将来カラマツの増加が予想されるであろう。伐採地が北部に移るにしたがいカラマツの比重は大きくなる。バム鉄道沿線の一部には樹種の九割がカラマツというところもある。カラマツは建築用材、土木工事用材として非常に優れている。クレムリンの城壁の基礎はカラマツである。イリムにも三百年以上もびくともしないで立っているカラマツ造りの農家がある。イルクーツクは意識的に木造家屋の街路を保存しているがその多くはカラマツ造りであり、百年以上立っているのはざらにある。これは、樹脂の含有量が多いからである。マイナス五十度の寒さのなかで育つ最もつよい樹である。しかしこれは、パルプ屋さん、化学屋さんにとってみれば、最も扱いにくい、手強い相手である。カラマツの利用について日ソ共同研究が必要であろう。このカラマツの良さはすでに東北地方や日本海沿岸の人々には認められており、木造家屋の土台にカラマツをつかう人がふえている。大阪にはカラマツで合板を作るのが得意な工場があらわれたという。いずれにせよ、ソ連の木材は今後樹種構成が変わるとしても、研究次第でまだまだ輸入の増加が可能であろう。

ラワン材はいろいろな意味で最も扱いやすい。しかし木材の輸入をめぐる環境は決して甘くない。インドネシアは一九八一年に「新林業政策」を制定し、徹底的な原木輸出制限を実施しはじめた。アラブ諸国が石油を国家の財産として扱うようになったのと同じ「資源ナショナリズム」である。木材をこれらの発展途上国は今までよりもはるかに大切にするようになろう。極めて当然のことである。

アメリカとも同じ意味での「貿易摩擦」がある。やはり原木での輸出の制限を強化しつつある。

ソ連についてはどうだろうか。確かに「木材輸出公団」は原木でなく、製材やパルプでの輸出を強化する方向にある。しかし同時に多数のレスプロムホーズを建設し、パルプ工場や製紙工場を建設するためだけにさえ、原木中心の対日輸出が相当長期間にわたり続くであろう。この方向を急速に発展させる為のカギはこれらの施設や輸送手段を輸出するためのクレジットの供与にある。これは、同時に日本からの機械設備や消費物資の輸出増加を意味する。


イガルカ港の製材置き場

さらに見逃してはならない点がある。それは日ソ貿易のバランスにおける木材の重要性である。木材とチップを合計すれば日本のソ連からの輸入総額の約四割にたっする。これは、大体においてパイプライン用の大口径鋼管の輸出に見合う金額である。今後も鋼管の輸出が続くとは限らないが、その分は機械類や消費物資の対ソ輸出の増加となろう。

再度繰り返すが、日本人の生活に木材は石油に劣らず重要である。機械や鉄鋼、消費物資の輸出も重要である。そしてこの問題を解決する大事なポイントは、シベリアに果てしなく続く世界最大の森林、タイガに我々も目を向けることではなかろうか。

日本人は森林を大切にする民族である。古代日本の森林面積率は七十五パーセントであったと島田錦蔵氏は述べているが、現在でもわが国土の六十パーセントは森林であり、これは工業国としては世界一である。アメリカは三百年の開拓の歴史のなかで国の半分の面積を占めていた森林を四分の一に減らしてしまった。木材の有効利用率も我が国は世界で一番高い。森林をめぐる日ソ間の協力は、両国の民族性からみても大いに発展させるべきであると私は考えている。

旅行中のプラテ氏との会話から (5)

仲　弘

バイカル・パルプ工場とジャーナリズム

仲「バイカル湖畔の湖沼学研究所で、私が副所長のマチャシェンコさんに、バイカル湖の自然保護、とりわけバイカリスクのパルプ工場の排水処理の問題について、ジャーナリストたちがよく協力してくれるかとたずねたときに、彼は、『私達はアカデミーの機関を通じて影響を報告します』と答えました。これは、ジャーナリズムに対して、すこしばかりつめたすぎる態度のように思われましたが」

プラテ「ジャーナリストがいつもすべての人から歓迎を受けるというわけではありません。日本でも、私は政界、財界その他の人々からインタビューの申し込みをことわられたことがありました」

仲「たしかにそうでしょうね。まして、ソ連のジャーナリストということであれば、会見をことわる人が出てくるのは容易に想像されます」

プラテ「ソ連でも、ジャーナリストの重要な役割をすべての人が理解しているわけではありません。もっと協力的であってほしいと思うこともたびたびです。しかし、ジャーナリストに対する態度は人によってちがいます」

仲「この点も日本と同じです」

プラテ「それに、マチャシェンコ氏が、この研究所の副所長であることも考慮せねばならないでしょう。所長のガラジー教授は、ノーボスチ通信社に対しても非常に協力的で、文も書いてくれています。責任者は思い切った発言ができるという点でも、日本と同じだとは思いませんか」

仲「そうですね。一般にモスクワよりもシベリアの学者の方々の方が、ジャーナリズムに対して協力的という印象をうけました。たとえば、経済研究所のフィリシン教授と、ノーボスチ通信イルクーツク支局のオストロウーモフ支局長との関係は、ほんとうに親しい友人のようですね」

プラテ「フィリシン教授だけでなく、アガンベギャン教授も我々ジャーナリストとは、全く気さくに会って、愉快に話してくれます。今度あなたが来たときには、アガンベギャン氏にも会っていただきましょう」

仲「ところでバイカル湖のパルプ工場の廃液流出問題はどうですか？」

プラテ「何よりも湖沼学研究所長ガラジー教授がバイカル湖の保全に全精力を傾けている人であることは明らかです。彼の役割はある意味では一番大きいと思います。

しかし、私達ジャーナリストの役割もこの問題の解決では小さくありません。ジャーナリストはすべての社会問題をとりあげ、批判することができます。バイカル・パルプ工場の廃液問題の場合もそうでした。『湖畔にて』という映画をつくってキャンペーンした芸術家たちの功績も評価しなければなりません。この映画はいまも時々テレビで放送されます」

日ソ経済協力発展の条件について

プラテ「日本が海の向こうの政策にしたがって対ソ経済関係の発展に熱意を示さなくなったのは残念です。日ソ経済関係の発展をはばむものは、ソ連の側から言えば何もありません。ソ連は日本とよろこんで取引するつもりです。とは言え、ソ連は、日本とだけ経済関係を発展させているわけではありません。西ヨーロッパの諸国は『制裁』を無視して対ソ貿易を続けていますから、日本は、資本主義先進国の間では、かつては対ソ取引額でトップをあらそうという地位にあったのが、今では五位になってしまいました。これは日本を担当するジャーナリストとしても残念なかぎりです」

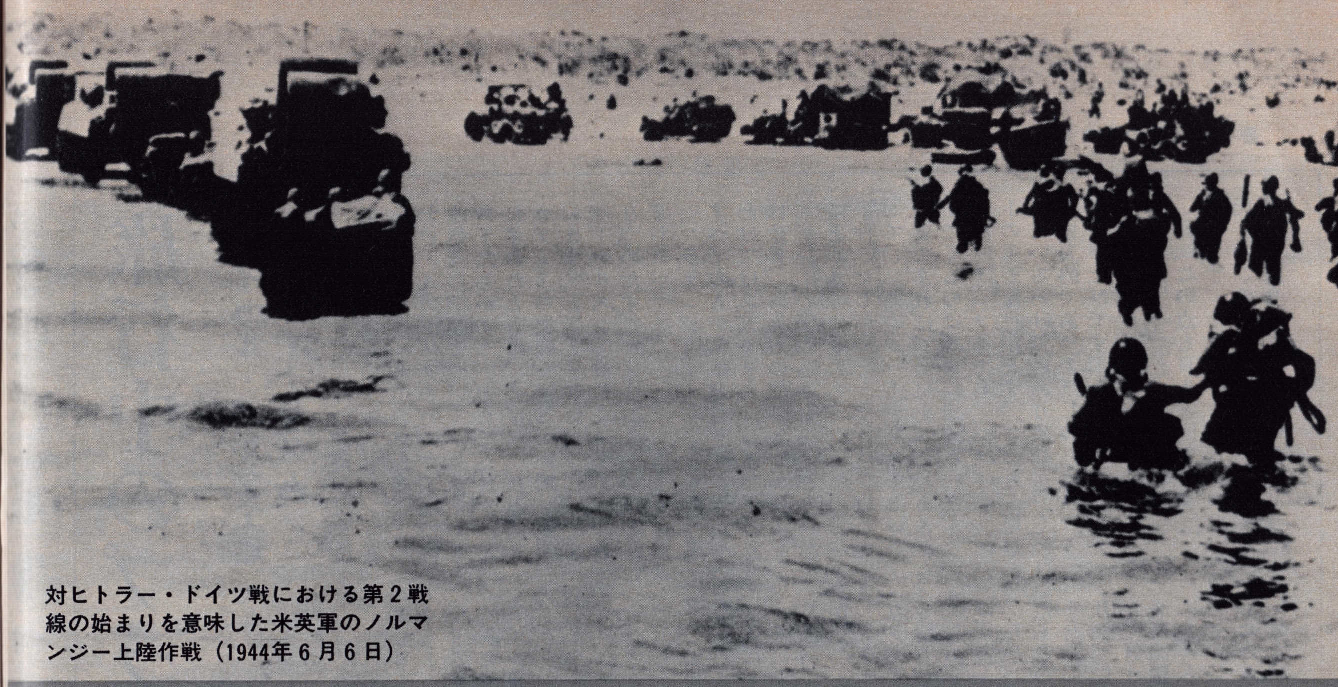
仲「日本の対ソ経済関係が、もっぱら日本側の政策によって減退しているという意見には賛成です。これは、私にとっても非常に残念です。しかしここで、理論問題として、日米間の経済的、政治的なつながりが西欧諸国にくらべて非常に大きいという側面をもっと考える必要があるのではないでしょうか」

プラテ「私は日本にいて、日米間の経済摩擦が日を追って増大するのを見て来ました。日米間の関係は今や戦争状態といえるほどの矛盾をはらんだ状態にあります。資源問題からいっても、米国は完全に日本の競争者です。それも、日本より強力な競争者です。いまにアメリカの自動車工業は力を回復して、かならず日本車を駆逐するでしょう。ソ連との経済関係ではこのような競争関係は存在しません。一体なぜ、日本は、このように対ソ関係を悪化させる方向をとって、みずからの損を招いているのでしょうか」

仲「日本の独占資本は、戦後アメリカによってつくりなおされ、育成されてきました。そして現在も、アメリカの太平洋支配体制に、ふかく組みこまれています。

私は商社にいたからよく知っています。日本の資本家が、東南アジアの諸国に投資するばあいの条件は、その投資が三年以内で回収されることです。これは、一方では大変な利益率です。東南アジアの安い労働力と、豊富な天然資源がこれを可能としています。しかし、これらの国々の政情は常に不安定です。日本の資本は、この不安定性をよく知っているから、このように短期間で投資を回収しようとするのです。

他方、この東南アジア諸国、現在では中南米諸国まで含めて『環太平洋諸国』といっていますが、その不安定な政治・経済情勢をささえているのは、強力なアメリカの軍事力です。要するに、日本の資本の利益は、アメリカの軍事力によって保証されてきたのです。これは、『結合した新植民地主義』とでもいえるでしょう。私には、ソ連の経済学者の多くが、この日本の経済体制の特徴を過小評価しているように思えます」



対ヒトラー・ドイツ戦における第2戦線の始まりを意味した米英軍のノルマンジー上陸作戦（1944年6月6日）

第2次世界大戦史

“第2戦線”の展開はなぜ3年遅れたか？

一九四四年6月6日、米英軍はフランス北西部のノルマンジーの沿岸に上陸し、ファシスト・ドイツは東からのソ連軍と西から進撃する米英軍にはさみ撃ちにされることになった。

第2戦線の始まりに伴う出来事は、歴史家ばかりでなく、広範な一般の関心を今もって引いている。編集部は論議のタネとなっている若干の問題についてソ連の著名な専門家たち――オレグ・ルジェシェフスキー・世界史研究所軍事史問題部長・歴史学博士・教授、エブゲニー・クリコフ同軍事史問題学術担当書記・歴史学博士候補、イーゴリ・チェルイシェフ・ソ連史研究所外交史部先任研究員・歴史学博士候補に答えてもらった。3氏の回答を一つにまとめて紹介しよう。

問い 欧州の第2戦線の問題が出てきたのは、一九四一年6月22日にナチ・ドイツがソ連を攻撃してまもなくである。しかし反ヒトラー連合側が一九四四年半ばまでこの問題を解決しようとしなかったのはなぜか？

答え まずその間の事情を簡単に話そう。ドイツ軍は二方面の戦争をいつも恐れていた。

たとえば、第1次世界大戦中ドイツ軍がパリ方面へ進撃したとき、東プロシアでロシア軍が攻撃に出てドイツ参謀本部の計画は挫折した。カイザー・ドイツは二つの戦線で戦う羽目になり、それがドイツの敗北の重要な要因になった。

一九四一年の7月と9月に早くもソ連政府はロンドンに対し、ソ独戦線から敵の30―40個師団を引き抜くために、欧州に第2戦線を開く問題を申し入れたが、英国側は取り上げなかった。

一九四二年6月、モロトフ・ソ連外務人民委員（外相）がロンドンとワシントンを訪問して協議した結果、一九四二年中に第2戦線をつくる合意が成立した。しかし米英両国は合意した期限内に義務を実施しなかった。一九四二年に第2戦線を開設しなかったことは、西側連合国がソ連の双肩に戦争遂行のすべての重荷を転嫁することを意味した。

チャーチル英国首相は、一九四二年6月に訪ソしてスターリン人民委員会議議長（首相）に欧州の第2戦線は一九四三年春に開くと約束した。チャーチルの声明は、会談に出席していたA・ハリマン・モスクワ駐在米国大使に支持された。しかしこの約束も守られなかった。一九四三年5月にワシントン会談でチャーチルとルーズベルト米大統領は、第2戦線展開の時期を一九四四年に延ばすことを2国間で決定した。

米英両国の支配層がこの問題を解決しなかったのは、両国の政治的考慮によるもので、ソ独戦の成り行きがどう

なるか、明らかに結果を待っていたのだ。しかしソ連を弱めるための戦争の引き延ばしは成功しなかった。戦局を転換した主な出来事を簡単にあげておこう。一九四一年と四二年にドイツ軍はモスクワとスターリングラードの近郊で壊滅させられた。一九四三年にソ連軍はレニングラードの封鎖を破り、クールスク近郊でドイツ・ファシスト軍をまたも大敗させ、西方へのとどまることを知らない進撃に拍車をかけた。連合軍は勝利に後れをとらないために急がなければならなかった。

問い 西側文献では“第2戦線”という概念の解釈に矛盾がある。たとえば、連合軍がすでに一九四二年に北アフリカでそれを開いたという説があるが、これについて話していただきたい。

答え “第2戦線”という概念を偽造しようとする動きは戦時中からあった。たとえば、一九四二年8月、W・チャーチルはドイツ軍が一兵もいなかったモロッコに米英軍が上陸したことを、「最良の形の第2戦線」だとごまかした。一九四四年の初めに、チャーチルは米英空軍によるドイツ爆撃を“第2戦線”とみなすべきだと語った。

こうしたごまかしの裏には、ナチ・ドイツの壊滅への米英両国の貢献を誇張し、3年間のソ連の軍事努力に有効な支援を与えていないことを正当化しようとする思惑が隠れていた。

問い 西側の文献では第2戦線の展開は、しばしばナチ・ドイツの壊滅を必至のものにしたできごとと評価されている。果してそうか？

答え もちろん、第2戦線の展開はナチ・ドイツを戦略的苦境に追い込んだ。連合軍の大規模なノルマンジー上陸作戦は戦略的な大勝利をもたらした――ナチ・ドイツは二つの戦線にはさまれ、フランス解放のための条件がつくられた。しかし第一にドイツの敗戦は一九四四年夏ごろにはもう決定的なものになっていた。バレンツ海から黒海までの戦線での戦闘で、ソ連軍は一九四一、四二、四三年のドイツ軍との一騎打ちで侵略者に最大の敗北を与え、その後ドイツはかつての威力を回復することができず、戦略上の主導権を失った。モスクワ防衛戦（一九四一年）、スターリングラード攻防戦（一九四二―四三年）、クールスク会戦（一九四三年）は、戦争における根本的転換の最も重要な節目となった。ナチ・ドイツの運命はソ独戦線で決定されたのである。一九四三年以降、ソ連は連合軍の援助がなくても単独でドイツに最終的に勝利できることは全く明らかだった。

第二に、欧州での第2戦線展開後も第2次世界大戦の主要な戦闘は、やはりソ独戦線でくり広げられた。一九四四年6月、フランスとイタリアに約一〇〇万のドイツ軍将兵がいたのに対し、ソ独戦線には四二〇万人のドイツ・ファシスト軍がいた。一九四四年の夏と秋にソ連軍は戦闘を続けながら西へ六〇〇―九〇〇km前進し、94個師団を撃滅し、捕虜にし、敵の二一九個師団と22個旅団を壊滅させた。ドイツはこの期間にソ独戦線で一六〇万人の将兵を失った。同じ期間に連合軍は敵の35個師団を撃滅した。西部戦線でのドイツ軍の損害は五二万人だった。第2戦線ができた後もドイツが東部に主要な集団軍を維持し、東部で最大の損失を被ったことは、数字が証明している。

問い 一九四四年秋にドイツ国境付近での連合軍の戦闘活動が低調だった理由は？

答え それについてはさまざまな理由が挙げられている。米国の指令官D・アイゼンハワー、O・ブラッドレーらは回顧録の中で、一九四四年の秋に連合軍は歩兵の数が少ないこと、ドイツ軍の西部要塞線が非常に強力であること、天候が悪いことなどのために、「消極的な塹壕内での持久戦術」に移行せざるをえなかったと書いている。

米国のこれらの著者の説明とは逆に、ドイツ軍の元将軍たちは、一九四四年秋西部戦線でドイツ軍の防衛戦が成功したのは「米国人たちの拙劣な、決断力を欠く用兵」のせいであると見ている。連合軍は、ドイツの国境に進出した一九四四年9月には兵力では敵よりはるかに優勢だった。米国の資料によれば、当時の米軍の兵力は二〇〇万人であり、ドイツ軍は約七〇万人であった。米英軍の戦車台数は二〇〇〇台以上であったが、ドイツ軍には戦闘できる戦車が一〇〇台しかなかった。そのほか連合軍の空軍は完全に制空権を握っていた。一九三八年に建設された西部要塞線（ジークフリート線）はその当時は半ば破壊されていた。ドイツ軍は一九四四年8月末からやっと要塞線を修理し始めたが、十分な時間と建設資材がなかった。ドイツが防衛力を十分に発揮できなかった大きな理由は、戦車、航空機、人力の不足である。

事実は以上の通りだ。これらの事実から、連合国側の企図が失敗に終わったのは、米英軍司令部に地上での大規模な戦略攻撃作戦を組織し、実行する経験がなかったからだと言える。

問い 第2戦線展開後のソ連軍と西側連合軍との協同行動は、実際にどのように行われたか？

答え この協同行動は極めて広範囲で多面的なものだった。周知のように、テヘラン会談の最も重要な文書――会談の軍事的諸決定（未公表）には、スターリンの「ソ連軍は東部戦線から西部戦線へのドイツ軍の転進を防ぐために、ほぼ同時に攻撃作戦を実施する」という言明が記録されている。

ソ連は合意した同盟国の義務を完全に遂行した。一九四四年6月10日、"オーバーロード"作戦開始の4日後にレニングラード戦線とカレリア戦線の諸部隊が攻撃を展開した。ソ連軍はベロルシアで"バグラチオン"作戦（一九四四年6—8月）を実施し、ドイツ・ファシストの"中央"軍集団を壊滅し、五〇〇—六〇〇km前進して西側連合軍に貴重な援助と支援をした。

戦略的意義を持つ別の例はアルデンヌの戦いである。一九四四年12月16日、ドイツ・ファシスト軍はアルデンヌで米軍に強力な奇襲攻撃を加えた。不意を打たれた米軍の数個師団は後退した。12月25日までに米軍の戦線は幅80kmの地区で縦深一〇〇kmまで突破された。そのほか、一九四五年1月1日に一〇〇〇機以上のドイツ軍機が27の最前線の飛行場、倉庫、兵器器材集積所を急襲し、大損害を与えた。

一九四五年1月6日、W・チャーチルは西部戦線での緊迫した戦況を緩和するために、ソ連軍が新たに攻勢をできるだけ速やかに始めるようスターリンに要請した。一方アイゼンハワーは、ソ連軍の支援のないことが米軍を"最大の苦境"に追い込んだ、とワシントンに報告した。

一九四五年1月12日、ソ連軍は予定を8日繰り上げて、バルト海からカルパチア山脈までの戦線で新たな大攻勢に移った。1月28日までに、連合軍部隊に追撃されたドイツ軍部隊は、アルデンヌとアルサス州の攻撃発起前の陣地に後退し、防御に回った。

問い　反ヒトラー連合の歴史的な教訓は何か？

答え　主要なことは、戦時中に社会体制の異なる国々の有効な政治的、軍事的協力の可能性が実際に証明されたことにある。

もちろん、反ヒトラー連合はその構成上、社会・経済制度が根本的に異なっている諸国の政治・軍事同盟であったが、それはまた戦争の最終目的と戦後の世界体制に関する考えの違いを決定した。しかしこれらの国を結束させた主要なものは、世界支配の野心を抱いた侵略者の壊滅の必要性であった。反ヒトラー連合の形成は、侵略者たちに抗して闘った諸国の国民間の協力の強化・拡大を促進し、世界のすべての反ファシスト勢力の結束を助けた。

第2次世界大戦中に、国際関係の将来の発展にとって大きな意義を持った歴史的先例が生れた、と言える。第一に、平和の保証には諸国民の集団的努力が必要であるという、長年にわたってソ連外交が提起した理念が確認された。第二に、共通の目的があれば社会・政治制度が違っても、国々の協力は可能であることが証明された。

西側の歴史家たちの中には、反ヒトラー連合は互いに敵意を持った諸国の"奇妙な"連合、"不自然な"同盟であった、と書いている者がいる。反ヒトラー連合のこのような評価を発明したのは、ほかならぬナチ・ドイツの宣伝機関であった。

では反ヒトラー連合の機能の遂行には矛盾と困難があったのか？　極めて重大な矛盾と困難もあった。しかしそれぞれがこの矛盾を話し合いを通じて、妥協と相互の譲歩の探求によって克服しようとした。連合の主要な力であったソ連の対外政策は、何よりもまず連合の強化や連合を破壊しようとした米英内の反ソ勢力の無力化に向けられた。

現在社会制度の異なる諸国の協力は、核破局の脅威から人類を救うために特に必要である。一九八四年2月にK・U・チェルネンコ・ソ連共産党書記長は次のように語った。「ソ連は偉大な社会主義の大国として、平和の維持と強化についての諸国民に対する責任を完全に認識している。われわれは、あらゆる大陸の国々との平和的互恵協力に門戸を開いている。われわれは、誠実で平等な建設的な交渉によるあらゆる国際係争問題の平和的な解決を支持している。ソ連は、実際の行動によって国際緊張の軽減を助け、世界に信頼の雰囲気をつくり出す用意のあるすべての国と十分に協力していく」

新刊紹介

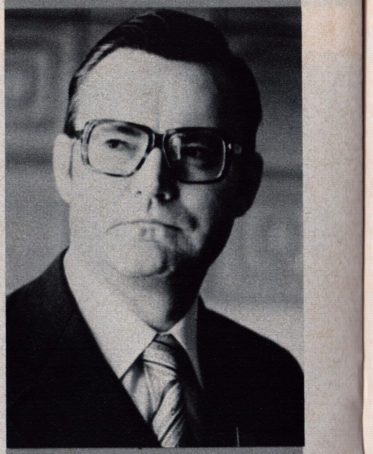
『ロシアの文豪たち——その作品と時代』

札幌の北海道日ソ友好文化会館からこのほど『ロシアの文豪たち——その作品と時代』（A5判、一三六ページ）という小冊子が出版された。

同会館は過去4年間に「ロシア文化セミナー」を35回開いてきたが、本書は一昨年秋、3回にわたって開かれた同セミナーにおける講演要旨をまとめたもの。

本書には「ゴーリキイの長編小説『母』について」（松元忠司・小樽商科大学教授著）、「プーシキンの『大尉の娘』とその時代」（外川継男・北海道大学教授著）、「ゴーゴリの人と文学」（灰谷慶三・北海道大学助教授著）の3編が収められている。三氏の講演はセミナー参加者たちに深い感銘を与えた。

なお、本書は、郵送料（切手二〇〇円分）を添えて北海道日ソ友好文化会館（〒〇六二　札幌市豊平区平岸二条十六丁目、電話〇一一—八一一—八〇五一）へ申し込めば、送ってもらえる。



姉妹都市関係樹立10周年にあたって神戸市民の皆さんへ

リガ市長　メチスラフ・ドゥブラ

「今日のソ連邦」誌を通じて、リガ市民を代表して神戸市民の皆さんに、両市の姉妹都市関係樹立10周年にあたってごあいさつできることは、私の大きな喜びです。一九七四年6月18日、宮崎辰雄・神戸市長と当時のリガ市人民代議員ソビエト執行委員会議長（市長）グナル・ジエメリス（故人）は姉妹都市協定に調印し、これが両市間の多面的な協力計画の基礎となりました。

リガと神戸がパートナーになったのは偶然ではなく、両市は多くの共通点を持っています。まず、リガは神戸と同様に、大きな海港、商港です。ただ、さまざまな国の船でにぎわうバルト海にありますが。

ラトビア共和国の首都リガは人口約九〇万で、ソ連の大工業中心地の一つです。ソ連の総生産高のうち、リガではモペット（原動機つき自転車）の2台に1台、客車と路面電車の3台に1台、ラジオ受信機の4台に1台、洗濯機の5台に1台が生産されており、リガはそのほかにも冷房装置、農機、電子設備など、技術的に複雑な製品をたくさん生産しています。

今日のリガの産業を代表するのは、神戸と同様に、電子工学、無線工学、計装工業、化学工業、すなわち現代科学技術の進歩を特徴づける分野です。同時に、わが市では織物、家具、陶磁器その他の日用品もたくさん作られています。わがリガ市の製品は世界の約一〇〇ヵ国に輸出されています。

私は神戸とリガに共通するものだけを挙げましたが、それとは別にも、両市の生活のさまざまな面で有益な協力を発展させることができるでしょう。両市の建設、公共交通機関の発達、商業、医療サービス、環境保護の経験を互いに知り合い、文化財を交換することも非常に有益だと思います。これについては、過去10年にわたって私たちが保ってきた接触が証明しています。

この期間に数千人のリガ市民——観光客、文化の働き手、都市経営、科学、工業の専門家が神戸を訪れました。私たちは宮崎辰雄・神戸市長、佐野雄一郎、宮岡寿雄、加納　學・同市助役その他の神戸市幹部の皆さんを大切なお客として迎えました。また、日ソ協会兵庫県連の久保二郎・会長、橘　武史・同事務局長その他多くの日ソ協会活動家もリガを訪れました。これらの人々の多くは、リガですっかりなじみになった"神戸デー"に参加するために訪れたものです。

たとえば一九七七年の第1回"神戸デー"では、リガ市民は日本の伝統的な生け花、琴の演奏、キモノ、書道を知ることができました。このときには同時に神戸市を紹介する産業博覧会が開かれ、両市代表団の有益な会談が行われ、将来の交流計画が話し合われました。ラトビアの伝統的な歌の祭典への神戸市の合唱団の参加は特に記憶に残っています。この合唱団の声は一万五〇〇〇人の歌い手を収容できる屋外舞台から響きました。

姉妹都市の日を祝う伝統はさらに発展しました。翌年には神戸で"リガ・デー"が開催され、リガ市の企業の製品を紹介する展覧会が開かれました。そのとき私はリガ代表団の団長になる幸運に恵まれ、リガ室内合唱団"アベ・ソル"が日本の聴衆の皆さんに温かく迎えられたのを見ました。この合唱団は14回公演しました。

神戸の詩人、赤松徳治氏がラトビアの民族詩人ヤニス・ライニスの詩を初めて日本語に訳したのも、私にはとてもうれしいことです。他方、リガでも日本の一連の作者の作品の翻訳が出版されました。ラトビア国立大学の植物園には"神戸コーナー"が設けられ、神戸の須磨離宮公園には、"リガの植物コーナー"が設けられました。神戸ポートピア81の期間中には三五〇万人がリガ市の展示コーナーを訪れ、ラトビア民族アンサンブルの公演を見ました。つまり、私たちの接触は多面的だということです。

姉妹都市提携10周年をお祝いするにあたって、私は両都市間の友好的な交流を広げ、深める可能性がまだいくらでもあることを確信しています。リガと神戸の住民は日ソ両国民の善隣と協力、平和をめざす共同のたたかいへの貢献を強めることができるでしょう。

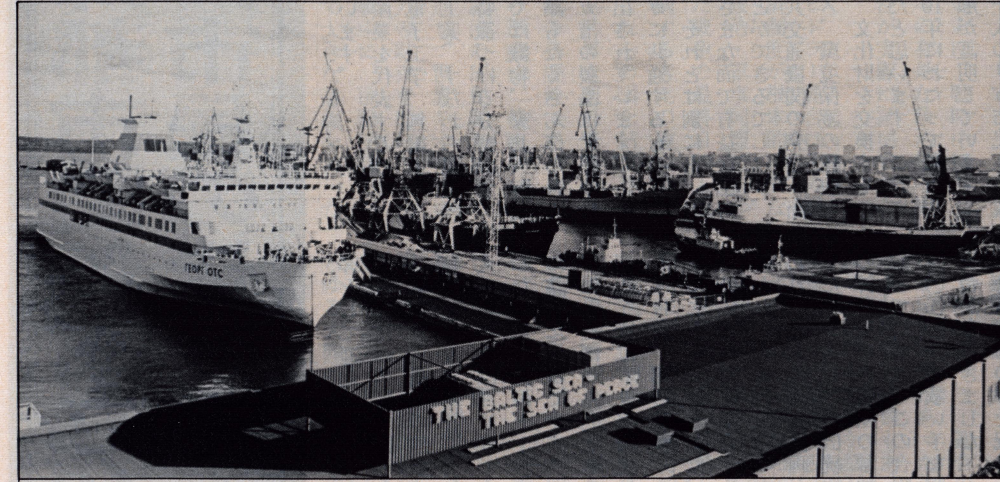
話題を拾う

写真の主の名、ついに判明

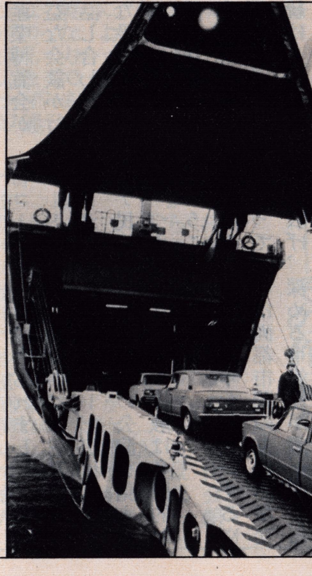


第2次世界大戦当時撮影されたこの記録写真がソ連の人々の目に祖国を守って戦った人間の象徴と映ってから長い歳月が流れた。この写真はタス通信の従軍カメラマンだったマクス・アリペリトがファシスト・ドイツ軍とのある戦闘の実況を撮ったもので、ソ連と外国の写真展に再三出品され、新聞雑誌に何百回も掲載されたが、攻撃の先頭に立ったこの人物が誰だか久しく不明だった。しかしこのほどザポロジエ市に住むエリョーメンコ一家がこの写真の主が父親であり夫であったアレクセイ・エリョーメンコであると通報してきて、専門家たちが鑑定した結果間違いないことが分かった。アレクセイ・エリョーメンコは戦前ウクライナのコルホーズ議長として働き、志願兵として出征、たまたまマクス・アリペリトの従軍した中隊の政治委員をしており、このときの戦闘で名誉の戦死をしたことが手紙や記録を比較検討した結果分かった。

バルト海に新商港



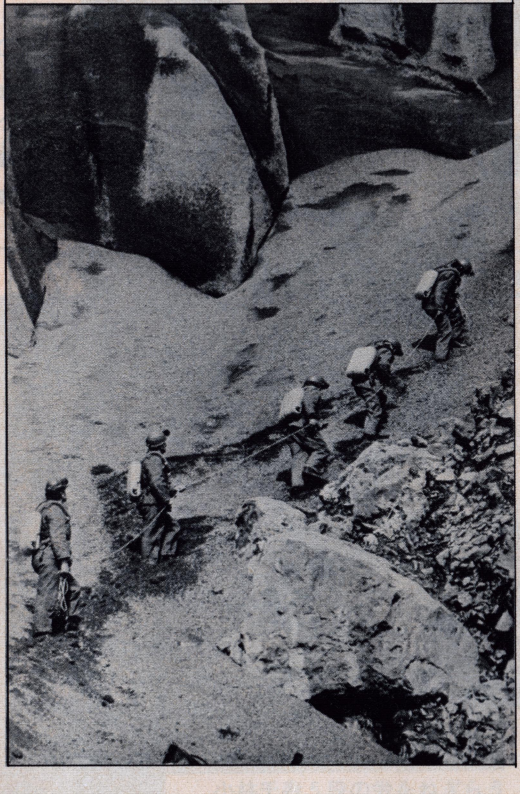
エストニアの首都タリンの近くに新しい商港が建設中で、竣工すればバルト海最大の港になる。新港はソ連と欧州諸国との荷動きと日本からの欧州向けコンテナ輸送が増えたためにつくられたもので、第1期工事分の操業開始は一九八五年になる。港の構内の大部分とバースは港の海底をしゅんせつした土を使って埋め立て、沖へ張り出すが、しゅんせつして水深が深くなるので10万トン以上の貨物船が係留できるようになり、年間約1900隻の内外の船舶が寄港する見込み。（写真上はタリン商港、下は外国に送られるソ連製乗用車）

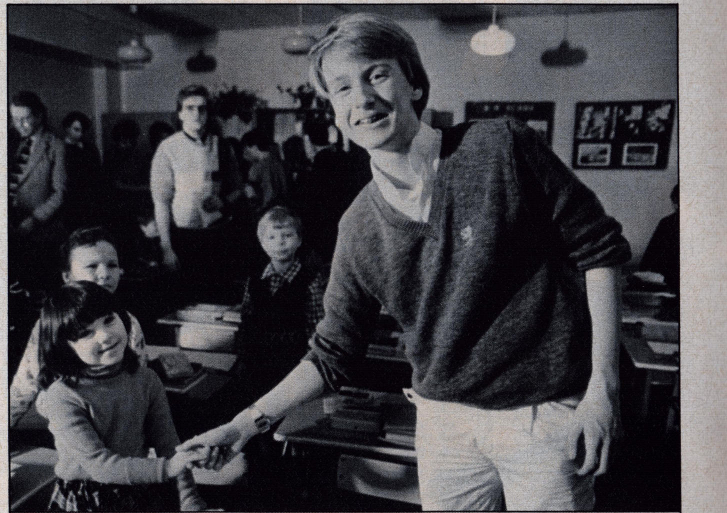




鉱山災害救助隊

チアトゥラ（グルジア共和国）のマンガン鉱採掘コンビナートの災害救助隊は、24時間出動態勢にある。隊員は100名で、事故が起これば近代装備を駆使して人命の救助に当たろうと待機している。幸い日頃の災害防止活動のおかげで長年事故は1件もない。（写真上は訓練の合い間に一服する隊員。下は救助隊の訓練）





ソ英中学生の交歓

モスクワ市のクラスナヤ・プレスニャ区の第一一二中学校（英語を教える）を先ごろロンドンのセント・ジョセフ中学校の生徒16名が訪問し、歓迎を受けた。一行はロシア語の成績がよくてソ連旅行に招待されたもの。第一一二中学校ではクイズ「モスクワ、ロンドンについて何を知っているか」が催され、勝ち抜き者と参加者全員に賞状と賞品が出た。中学生代表団の訪ソはこれが9度目で、ソ連の生徒の家庭への訪問も行われた。（写真は第一一二学校の準備学級を訪問して6歳のカーチャ・ボリソワと握手する英国の中学生）

ことしも恒例の囲碁交流
——日本から親善使節を迎えて

モスクワ囲碁クラブ会長
アレクセイ・バビツキー
カメラ
I・ポチョムキン他



▶小林千寿5段（プロ）の多面打ちの局面に思わず身をのり出す観客

ソ連のたくさんの囲碁愛好家にとって日本の棋士たちとの対局の日は、勝敗の結果いかんにかかわりなく、楽しい祭日のような日に変わる。もちろんわれわれもお客さんも勝ちたい気持ちは同じだが、敗北もまた将来への希望をプレゼントとしてくれる。この対局は自分たちの持っている力や可能性を点検し評価する良い機会であり、経験を学ぶ場であり、そして共通のものに熱中する人々の楽しい友好的な出会いである。

3月末、日通航空主催、日本棋院後援の第6回ソ連親善囲碁旅行団がソ連を訪れた。旅行団のメンバーの中にはわれわれにとって旧知の人もいれば初対面の人もいた。一行はソ連のスポーツ指導機関——ソ連国家スポーツ委員会を訪問した。下田真樹団長とビクトル・イボーニン・ソ連スポーツ委員会副議長は会談の中で、日ソの囲碁交流を今後も維持・強化したいという双方の希望を表明した。

一九八二年春に日本棋院のメンバーを含む囲碁旅行団がわが国を訪れた時のことが思い出される。下田真樹六段はソ連の棋士に贈り物の碁盤を手渡す時、碁盤の縁に〝ソ連の囲碁の発展のために〟という友情の言葉を書いた。あれから2年がたった。この間にソ連の囲碁界にどういう変化が起きただろうか？

ソ連の囲碁は同時に量の面でも、質の面でも発展した。この面白いゲームに〝征服された〟都市のリストに新たに多くの都市が加わった。囲碁では伝統のあるモスクワ、レニングラード、キエフ、カザンその他の都市の囲碁クラブの活動がより定期的になり、本格的になった。特に中学生の棋士の養成に多くの関心が向けられた。さまざまな都市の棋士たちの間で試合が行われ、それがよい結果をもたらしたのはいうまでもない。

こうしたことすべてにより、モスクワでの今回の日本の棋士たちとの対戦のために、われわれは強力なチーム（モスクワと他の都市の棋士から成る）を編成することが可能になった。そしてわれわれは、日本側の陣容がこれまでの旅行団では最強だったにもかかわらず、〝対等〟の条件で（これまで日本側がつけていたハンディキャップなしで）、3回の団体戦をモスクワで行うことに決定した。日本側のメンバーは七段3人、五段5人、四段から初段まで5人、2人の有級者という強者ばかりである。

対戦はホテル「スポーツ」の設備のよい広々としたホールで行われた。ここはちょうど1年前、多くの国のチェスの強豪が集まり、世界チャンピオン挑戦権を争う地域予選の会場になったホールだ。さて初日の対局は15組で行われ、3時間の激戦の結果10対5でソ連チームが勝った。翌日、日本側は二つのチームに分かれ、Aチームはモスクワ・チームと9組で対局し、Bチームはカザン・チームと6組で対局した。そして再び6対3および4対2で、ソ連の囲碁愛好者が二つの勝利をものにした。

さらにモスクワでもう1回、キエフとレニングラードでそれぞれ2回の対局が、日ソ双方の選手にハンディキャップをつけて行われた。日本側はモスクワで1回、キエフとレニングラードで各1回ずつ勝利した。こうして総合成績では明らかにソ連の囲碁愛好者に軍配が上がった。

日本の友人たちが2年前に残して行った友情の言葉がどうやら立派に実現され始めたようだ。しかしわれわれはこの勝利に幻想を抱くつもりはない。客観的、批判的に結果を検討してみよう。〝互角〟の条件で行われたすべての試合では、五段、六段クラスの対戦はみな日本側の勝利に終わった。更に、レニングラードではソ連の一流棋士たちニロフ、ラザレフ、アスタシキンらが敗北を喫した。これについては反省すべき点が多い。他方、ハリコフの若手ザイツェフとキエフのプリュシチの成績はなかなかのものだった。特にプリュシチは、二もくのハンディ付きな

少年選手の善戦をたたえる浦野さん



下田真樹6段は今回も上級者と対局した





小林千寿5段の労をねぎらう
レニングラードの囲碁ファン



小林正義6段とコンスタンチン・ロパチェンコ4段の対局（キエフ市で）

がら、下田六段に勝ったただ一人のソ連選手になった。下田六段は8戦のうち7勝し、見事な戦いぶりを披露し、その高い評判を改めて証明した。

アマチュア同士の団体戦が行われている間、旅行団に同行したプロの小林千寿五段が多面打ちで17組と対戦した。小林五段は〝互角〟とハンディキャップを付けた対戦を合わせて16勝1敗の成績をあげ、プロの力をはっきりと見せつけた。小林五段は試合運びの美しさと深さで、そして素晴らしい女性の魅力で対局者と観衆を魅了した。彼女にとって今回の旅行は三段当時の10年前に次いで二度目の訪ソである。今回は父親の小林正義六段（プロ）と西ドイツ人のご主人（アマチュア三段）を伴って訪れた。

これまでもそうだったが、今度もまた非常になごやかな、相互理解の空気に包まれた対戦だった。参加者は双方とも実に幅広い年齢とさまざまな職業の人たちであったことを指摘しておきたい。大学生、中学生、労働者、技師、教師、音楽家、学者、軍人などから成るソ連の囲碁愛好者にとって、会社社長、主婦、教師、デザイナー、経理士、法律家、大学教授、技師などの職業の日本のお客さんたちと人間的なふれ合いを持つのは興味深いことだった。

日本のお客さんたちが、ソ連の有段者や今度の旅行についてどんな印象を持ったかを、聞いてみたいと思う。小林千寿五段は次のように語ってくれた。

「ソ連の囲碁ファンは数がとても増えたし、主立った棋士たちの進歩も著しいですね。うれしかったのは子供たちがいい対局をしてくれたこと。特にペトロザボック市のジーマ・ボセンコ君はまだ12歳ですが、本当に才能のある少年で気に入りました。素晴らしい棋士になるでしょう。ちょうど私たちがモスクワ郊外を訪れた日に、第3回全ソ児童囲碁トーナメントが行われたと聞きました。ぎっしりつまった旅行スケジュールの関係で出席できなかったのが残念です。

ソ連の棋士たちがさらに伸びる可能性はもちろんあります。ただ五段、六段のレベルに達した人が腕を磨くには、プロとの対局が必要だと思います。ヨーロッパの囲碁愛好者たちと比較してソ連の棋士たちの力はどうかと言えば、日本で長期間修業した数人の強豪は別として、私の見たところソ連の棋士たちはもうヨーロッパの人たちと互角に勝負できると思います。

今回の旅行からはとてもよい印象を受けました。昔の知り合いに再会できたのもうれしかったし、美しい都市を見物することもできました。古い文化財が大事に保存されているのも見ました。でも一番好感がもてたのは、お会いした人がみんな誠実に、快く私たちをもてなして下さったことです」



ホテル「スポーツ」のホールで行われた団体戦



タチヤナ・クルロビチ（25歳）
ソ連建設銀行の上級経済担当者

私の職業——生活と意見

いろいろな職業にたずさわっているソ連の人たちの生活を紹介してほしいという読者の皆さんからのご要望で、本年9号に「私の職業——生活と意見」と題してモスクワに住む実在の人たちの生活と意見をご紹介したが、本号ではその第2回目をお届けする。

この企画の取材には前回同様、S・コレソワ、E・ツェイトリン、A・アナニエフ、I・キセリョフ、V・アキモフの5人の本誌記者があたった。

銀行員

タチヤナ・クルロビチ（25歳）。ソ連建設銀行（ストロイバンク）支店の上級経済担当者。

タチヤナは中学を卒業する時、卒業後の進路——進学か就職かについて明確な考えを持っていなかったので、とりあえず自宅のすぐそばにあった建設銀行の地区支店にタイピストとして入った。1年だけ働くつもりで、その間に周囲をよく観察し、将来の道を探ろうと思った。しかし1年たって退職願いを出すと、支店長はこの銀行での彼女の将来の仕事の見通しと有利なことを説明して、留まるよう説得した。

現在タチヤナは通信制の全ソ財政・経済大学3年生だが、すでに上級経済担当者として働いている。

仕事の内容——モスクワの三つの区の建設組織の財政活動を監督し、建設組織の人たちと折衝する。勤務場所は主として銀行の支店。

勤務時間——午前9時から午後6時まで。昼食時間45分。休日は土曜と日曜。

休暇——4週間。普通は夫や友人たちと黒海沿岸で過ごす。

仕事の魅力——家から勤務先まで歩いて10分なので昼食も家でとれる。銀行が住宅建設にも融資しているので、他の職場より早く国営住宅に入居できる。職場には若い同僚がたくさんいる。仕事は面白く、活気がある。

「数字や書類の中に閉じこもらず、銀行のお客さんたちと接するようにしているわ。時々、建設現場に検査に行きます。そんな折に夫と知り合ったの。彼はパワーショベルの運転手です」

仕事の短所——「賃金が、大学を卒業しても大して上がらないことかしら。でもお金のためだけで別の仕事に変わったりはしないわ。だってそれ以外は申し分ないんですもの。仕事が私の性格にぴったり合ってるし、それに、夫の給料が四〇〇ルーブルと高いから」

将来の見通し——「しっかり働けば支店長にだってなれそう。銀行の本店にも移れるし。本店なら昇給のことも含めて、もっとチャンスがいろいろありそう」

仕事上の特典——大学の通信学部の学生として、追加の有給の試験休暇（夏冬各2週間）がある。

この職業への周囲の評価——「私は巨額のお金を扱っているので、事務職をつまらないと思っている人でも、私の前ではそんなこと言えないみたい」

社会活動——職場の自分の課で壁新聞を発行している。

趣味——「とにかく時間が足りなくて。大学もあるし、2歳の息子がいるし。息子と散歩したり、テレビを見ながら編み物や裁縫をします。大学を卒業したら2人目を生みたいわ」

人生観——「夫と平凡に楽しく暮らしています。持っているものの中で喜びを見つける努力をし、自分たちの才能と可能性に従って働き、生きていきたいわね。別に起こさなくていい問題は起こさないように、起きた問題はきちんと解決するようにしているわ。我慢できないのは、なんでも批判して、たえずあらゆることに不満なペシミスト。肉体労働は男の人にとって貰い仕事だと思います。だから息子が大きくなったら技能労働者になって欲しい」

生地専門店の店員

ライサ・ニコラエワ（24歳）。家族は技師の夫と2歳の息子。モスクワの新興地区にある生地専門店〝トカーニ〟（織物）の木綿製品部の主任店員で、勤続年数は7年。

ライサは中学卒業後、国民経済大学の試験を受けたが失敗した。入試委員会にトカーニの代表が加わっていて、落第した学生の中から見習い店員を探していた。「迷いました。次の試験ま



ライサ・ニコラエワ（24歳）
生地専門店の上級販売員

ではまだ1年あるし、1年たってまた受からなかったらと思うと……店員の仕事がなんだか現実的に思えたの。それに私は裁縫が好きだし、トカーニの仕事も面白そうだったから」

半年間の無料の講習のあとライサは生地専門店トカーニで働き始めた。

仕事の内容——店は小さいが、快適。売り場が一つあるだけで、そこにライサのほか5人の（女子）店員とレジスター係が1人働いている。客のいない時は隣のセクションの女の子としゃべってもよいし、少し腰かけてもよい。

勤務時間——午前11時から午後8時まで。昼食休みは1時間。休日は水曜と日曜。

休暇——15日。夫や子供と両親の別荘で過ごす。息子が生まれるまでは夫と南の黒海へ出かけていた。

仕事の魅力——単調でないこと。いろいろな商品、各人各様のお客さん、いろいろな要望や質問に出会える。いつもファッションに精通し、多くの人と知り会える。

仕事の短所——ほとんど1日中立ちっぱなしなこと。休日（水曜日）が夫の休日と一致しないこと。

将来の見通し——ライサには他の若い店員（若い人が多い）と同様、勉強を続け、昇給できるチャンスがある。ライサは働き出して1年後、通信制の商科大学に入学し、最近そこを卒業したのだが、入学に際しては大学と同じ専門の商業部門で働いているということで特典を受けた。大学を卒業すると、店の本部（販売店を幾つも経営している）の人事部がライサに学歴に見合った仕事を探してくれ、それほど大きくない店の店長になるよう勧めたが、ライサは辞退した。その訳を彼女はこう語る——「そんなポストに就くには若すぎるわ。店全体の責任を負うんですもの。仕入れ主任の仕事だったら引き受けたでしょうけど、今のところ空いたポストがないのよ。人事部は副店長より下のポストを何か探すと約束してくれました。見つかれば引き受けるわ」

仕事上の特典——制服があることとニューファッションの新製品を最初に買えること。

社会活動——店のコムソモール組織の書記。

この職業への周囲の評価——彼女は多くの人から少し軽はずみのところがあると見られている。夫は時々、男性の客にやきもちを焼く。

趣味——裁縫、写真。

人生観——「人生に必要なのは、面白い仕事、良い家族、快適な家。私にはそれが全部そろっていると思う。2人目の子供が欲しいけど、新しい仕事がはっきりしてから決めるわ」

レストランのウエートレス

マイヤ・スドロギナ（52歳）。未亡人で2人の子供（息子と娘）がいる。最近子供が生まれた息子夫婦と同居。娘も嫁ぎ、別居している。

何の職業に就こうかと迷っていた若い頃は、将来ウエートレスになろうとは思いもかけなかった。ここにくるまでには何度か転職した。まず教師養成中等専門学校を卒業し、幼稚園の保母として働いた。次に体力的には大変だが賃金の良い塗装工の技術を身に付け、建設現場で働いた。

レストラン〝チョープルイ・スタン〟で働くよう勧めてくれたのは、そこで働いていた彼女の女友達だった。その頃マイヤは結婚しており、新しい職場の魅力は、レストランが住宅のすぐ向かいにあったことだ。マイヤは見習いウエートレスとしてチョープルイ・スタンに就職し、同時に6カ月間のウエートレス講習会で学んだ。

仕事の内容——マイヤは四つのテーブルを担当している。一つは6人用、二つが4人用、もう一つは2人用。

お客さんをたくさん呼ぼうと、このレストランでは変わった趣向の注文方法を導入した。客は各テーブルに備えつけの電話で注文する。電話のオペレーターが注文を受け、それをそのテーブル担当のウエートレスに伝える。レストランの全従業員と常連客の意見では、これはとても便利なサービスだという。それにかなりの時間と給仕する者（大多数は女性）の労力が節約できる。



マイヤ・スドロギナ（52歳）
レストランのウエートレス

勤務時間——隔日出勤で午前10時から午後11時まで。1時間の昼食休み。

休暇——15日間。他のほとんどの休日もそうだが、夫が健在中に建てた彼女の別荘で過ごす。子供たちの家族もよくその別荘で休息する。

仕事の魅力——マイヤは接待の仕事が好きだし、レストランを訪れる新しい客やチョープルイ・スタンに少なくない常連と会うのが気に入っている。「レストランにはいろいろな気分の人がやって来ます。ある人はうれしいことをお祝いしたくて来るし、ある人は孤独を癒したくて来る。私はその都度、お祝い事は共に喜び、寂しい人には気分を盛り立ててあげたいのです」

仕事の短所——土曜、日曜、祭日にどうしても客が集中し、そういう日は仕事が終わると、くたくたになること。

将来の見通し——希望すれば特別の講習会を修了し（働きながら受講しても、仕事を一時休んで受講してもよい）、給仕長や支配人になることもできる。しかしウエートレスのままで彼女は十分満足しており、職を変えるつもりはない。あと3年たてば、年金がもらえるようになる。

仕事上の特典——食事を職場で、しかも非常に安くとることができる。ほかにチップももらえる。これを多くの人はウエートレスの仕事の主な魅力だと考えているが、マイヤはチップはいつかすたれてなくなる伝統だと思っている。

社会活動——レストランの労組委員会副議長を数年間務めている。

この職業への周囲の評価——「身内には学歴の高い者が沢山います。息子は物理学者だし、妹は航空設計技師です（ちなみに妹の小さい頃の夢はウエートレスになることでした）。彼らは私の年ではウエートレスは相当つらいだろうと思って、別の何か軽い仕事を探すように勧めますが、変わりたくはないですね」

趣味——編み物。モスクワから35㎞離れた所にある前述の別荘で過ごすこと。マイヤは都会で生まれ育ったが、特に近年は土への執着が強くなり、別荘で野菜やいちご類、大好きな草花を栽培している。

人生観——「人の善意というものが好きです。嫌いなのは無感動と無関心。息子は物理学者、娘は劇場の衣装係と、子供たちが立派な職業に就いているのはうれしいことです。自分が大学に行かなかったのは残念だわ」

タクシー運転手

ユーリー・チュラコフ（28歳）。5歳の娘がおり、妻は秘書・タイピストとして働いている。ユーリーがタクシーの運転手として働き出したのは一九七八年から。仕事には満足しており、子供の頃から「大きくなったら必ず自動車に関係した仕事に就こう」と決めていたことが実現したと思っている。



ユーリー・チュラコフ（28歳）
タクシー運転手

車の運転と整備は軍隊時代に覚えた。除隊後しばらくトラックの運転手として働いたのち、タクシー営業所で働く。ユーリーは9年制の中学校しか終えていなかったので、営業所管理部は彼に後期中等教育を修了させた。こうして夜間で1年学び、現在は2級運転手。

勤務時間——交替制で隔日勤務。午前4時から午後4時までの時間帯の場合、勤務11時間プラス食事休み1時間ということになる。

休暇——3週間。妻の両親の別荘で家族と過ごしたり、釣りに行く。

仕事の魅力——新しい人、新しい会話、新しい状況——たえず新鮮な印象にひたっていられる。ユーリーは人付き合いがよいので、この意味は大きい。

仕事の短所——座りっぱなしで、これが結構疲れる。

仕事上の特典——管理部は運転手の健康につねに注意しており、毎月医療チェックを行う。その結果、必要とあれば勤務時間を変更したり、治療を指示したりしてくれる。

将来の見通し——ユーリーは昇進と学歴を結びつけて考えている。現在通信制の全ソ機械工業大学の予科を受講中。営業所の管理部はこうした勉強を続けたいという人には妨害するどころか、あらゆる援助をする。ユーリーの場合、入学試験の勉強に都合の良い勤務時間表が組まれている。

将来、全ソ機械工業大学に入って、そこを卒業すれば、自動車とトラクターの整備技師の資格が取れる。いずれにせよタクシー営業所で働き続けたいと思っている。

社会活動——営業所のコムソモール組織の活動家で、労働の組織の問題に取り組んでいる。

この職業への周囲の評価——「ほかの職業の人たちに対するのと変わらないね。自動車を持っている人とはもちろん〝専門的な〟話になるけど」

趣味——「まず、車だね。もっともぼくの場合ホビーが仕事になったんだけど。趣味の2番目は釣り」

人生観——「ほかの人でぼくが何より評価するのは、素朴さ。新しいものにすぐかぶれる奴は嫌いだよ」



▶モスクワで開かれた北太平洋のオットセイに関する政府間委員会第27回総会

オットセイ保護で協力する4ヵ国

本誌記者　アンドレイ・バイダク

オットセイは北太平洋——ベーリング海、オホーツク海、日本海に生息する貴重な海獣である。長い間の乱獲によりオットセイは絶滅の脅威にさらされたが、ソ連、日本、米国、カナダの専門家の共同の努力によってオットセイの個体群を確保するだけでなく、捕獲も可能になった。オットセイの保護と捕獲の問題は、さる4月モスクワで開かれた北太平洋のオットセイに関する政府間委員会第27回総会の中心議題となった。

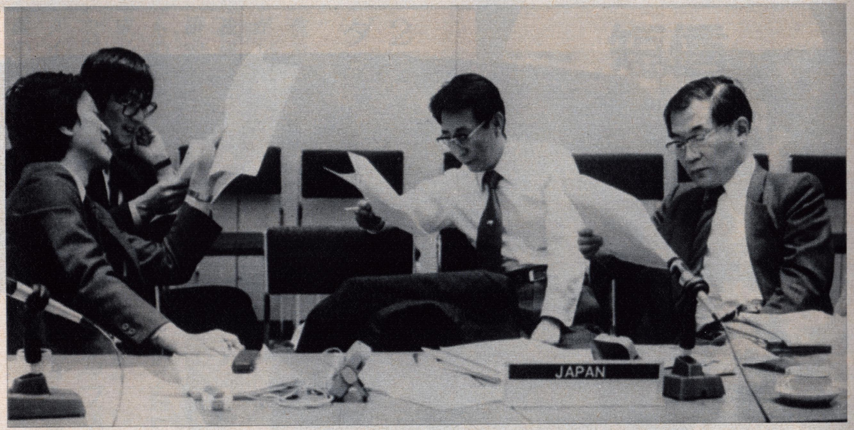
オットセイの総頭数を維持すると同時に捕獲するには、効果的な国際協力が必要である。問題はオットセイには独特の生活サイクルがあることだ。つまりソ連領のコマンドル諸島とチュレニー島、米国領のプリビロフ諸島の繁殖地で半年を過ごし、繁殖し、子供を育て、その後南下し、日本とカナダの沿岸近くの沖で越冬する。

オットセイの保護に関する最初の国際条約は一九一一年、日本、英国、ロシア、米国の4ヵ国の間で結ばれた。一九五七年2月、ソ連、日本、米国、カナダの間で現行の「北太平洋のオットセイの保存に関する暫定条約」が結ばれた。この条約は、オットセイの個体群を増やす一連の措置を実施し、オットセイの海上での捕獲を完全に禁止（資源調査のための捕獲を除く）し、繁殖地をもつ米国とソ連は、両国の島の陸上で捕獲されたオットセイの皮の15％ずつを、繁殖地をもたない日本とカナダに引き渡すことを定めている。条約の条項と要望を実現するために、加盟当事国によって北太平洋のオットセイに関する特別の政府間委員会が設置された。この委員会は毎年4ヵ国の首都で交互に総会を開く。

日本代表団長の藤村弘毅・海洋水産資源開発センター理事長は「オットセイの保存問題を解決するのに一番大事なことは、オットセイの個体群の資源と回復能力を知ることである。だからさまざまな国の学者たちのこの分野の研究とその成果の交流の意義は、非常に大きい」と語った。

委員会の会議で学者たちは、現在幼獣の数が若干減っているのは二つの要因——一九五六—一九六八年中の雌の捕獲と幼獣の低い生存率によるものであることを確認した。一部の専門家は、生存率が低いのはまず第一に北太平洋の気象条件の変化や海洋汚染と関係があると考えている。そのほか、多数の幼獣がトロール網に掛かって死んだ。

オットセイの調査と保護でとくに重要なのは、国際科学計画である。ソ日両国の学者間の接触について、日本代表団員の吉田主基・医学博士（水産庁遠洋水産研究所おっとせい資源研究室）は「さきにソ連の学者が日本の学術調査船に乗り、日本の学者がソ連領の繁殖島でのオットセイの幼獣の計算に参加したが、この共同調査は有益だった」と指摘した。同氏は「ソ連のオットセイ専門家が日本の研究所を視察するための交渉が目下行われている」と強調した。吉田氏の意見によれば、学術資料の交換は協力の良い例である。



会議の休憩時間中の日本代表団

ビャチェスラフ・ゼムスキー・全ソ海洋漁業・海洋研究所海洋哺乳類実験室長は「ソ連ではオットセイの保護は計画的に、厳格に科学に基づいて行われており、特別の部がそれを担当している。私たちは繁殖地付近の海水の清澄度を見守り、その周辺に保護地帯を設けて、そこでのあらゆる経済活動を禁止している。これらの地域ではオットセイに不安を与えないために、航空機の飛行や船舶の航行が禁止されている。いま私たちはオットセイの病気の撲滅措置を策定している」と語った。

ビャチェスラフ・ゼムスキー教授と日本の吉田主基博士



カーメン・ブロンジン・米国代表団長もソ連の成功を認め、こう語った。「ソ連領の島々でのソ連のオットセイ保護措置は全く優れている。そのうちの幾つかは、他の国々の学者たちが最も注意深く研究する価値がある」

最終会議でソ連、米国、カナダ、日本の代表は、今回の第27回総会が課題を成功裏に遂行したこと、つまり昨年度の科学研究の諸結果を検討し、各国別の研究プログラムを調整し、合理的な捕獲の実施に関する指示を与えたことを一致して指摘した。委員会は条約当事国に一九八四年にコマンドル諸島とチュレニー島で七四〇〇頭の雄オットセイ、セントポール島で二万二〇〇〇頭の雄、セントジョージ島（プリビロフ諸島）で五〇〇頭の雄を捕獲することを勧告した。次の委員会の総会は一九八五年4月に東京で開催される。



「どこが故障したのかな…」（E・ペソフ撮影）

短信アラカルト

2kgのダイヤモンド

重量2kgの人造ダイヤモンドがレニングラードの高周波電流研究所で生産された。この研究所ではこれまで成功したものより10倍も大きい結晶を成長させることができる装置を開発したもので、この人造ダイヤは特に強力な磁場と高温の下で合成される。生産された人造ダイヤは異常に高い屈折率を持っているので、このダイヤを材料にしてほとんど凹凸のない強力なレンズを製造できるが、これは光学機器の可能性を著しく拡大する。新しい装置では原料の処方しだいで、人工の緑玉石、トパーズ、サファイア、その他の宝石を製造できる。これらは外見上自然の宝石とまったく変わらない。

爆破でダムをつくる

キルギス共和国（中央アジア）のナリン川に出来るカムバラチンスカヤ水力発電所の高さ二七五mのダムは、指向性爆破を利用して建設される。これで建設費を約1/3減らし、ダムの工事期間を同じ位短縮することができよう。一〇〇〇分の1秒単位の間隔で分けられた多くの爆発からなる一斉爆破により、ダムの堤体内に一〇億立方m以上の岩石を入れることができる。このダムは堤頂の幅が二八〇m、長さが2kmになる。

カフカズ山脈の新スキー場

グルジア共和国の大カフカズ山脈の支脈にウインタースポーツの新しい中心地――グダウリがつくられる。この新しい高山保養地は、アルペンスキーをやるのに理想的な条件に恵まれている。総面積五八〇haの斜面にあらゆるタイプのコースを開設できる。風向きにも恵まれ、スキー・シーズンは半年以上、夏まで続く。グダウリへは、グルジアの首都トビリシからにぎやかな観光ルートづたいに行くことができる。

すでに設備の整ったホテルが営業を開始し、2基のスキーリフトが完成（将来は全部で21基になる）。今年中にさらに二つのホテルの建設が始まる。一九九〇年までにグダウリは保養地として一度に六〇〇〇―八〇〇〇人の観光客とスポーツ客を収容できるようになる。将来は収容人員を三万人まで引き上げることが計画されている。

ドネツク炭田の今後

ウクライナ共和国のドンバス（ドネツク炭田）は二五〇年も前から採炭されている有名な大炭田だが、一部にその将来性を疑う声も出ている。しかし、地質学者たちの最近の調査はそのような意見を退けるものだ。地質学者たちは少なくとも50の炭鉱を建設できる新しい炭層を発見した。炭鉱はまず南ドンバスにつくることが予定されている。南ドンバスは新しい工業地区だが、ここでは高炉用の粘結炭層が大製鉄所群のすぐ近くにある。ドンバスの伝統的な境界外でも大きな炭田が発見された。ここは非常に厚い褐炭層が地表に直接顔をのぞかせているほどなので、露天掘りが可能だ。

パガニーニの弁護

スベルドロフスク市（ウラル）に住むクラシック音楽ファンの二人の犯罪学者が、イタリアの偉大なバイオリニスト、ニコロ・パガニーニ（一七八二―一八四〇）の〝えん罪〟を晴らそうと、調査結果を発表した。この二人はデビコフ民警大佐とイシチェンコ法学博士候補。二人は、パガニーニに対してフランスの作家スタンダール（一七八三―一八四二）、ドイツのバイオリニスト、ルドウィッヒ・シュポーア（一七八四―一八五九）、その他の前世紀と今世紀の芸術家たちが提出した告発に反論している。ウラルの犯罪学者たちが〝パガニーニ事件〟に取り組んだきっかけは、パガニーニが妻殺害のかどで4年間監獄に入っていたという説の信ぴょう性に疑問を持ったこと。モスクワとウラルの図書館で史料を3年間研究した結果、デビコフとイシチェンコは、一八〇一年から一八〇四年までパガニーニが服役していたという説を裏付ける文書的な証拠がまったくないことを突きとめた。このことはパガニーニの作品によっても確証されている。そこには監禁による憂愁や孤独感の片りんさえもないからだ、と二人は主張している。

ウラルの犯罪学者たちはまた、パガニーニが不具だったという伝説も否定した。彼らは、主治医のベナッチーが書き留めたパガニーニの人物描写と、生前のいくつかの肖像画――細面、広い額、聡明そうな目の音楽家が描かれている――とを対比した。人物描写と肖像画は争う余地のないほど一致した。パガニーニの入獄説、悪事を働いたとか、不具だったとかいううわさについて言えば、それらは、多数のパガニーニをねたむ人や悪意を持つ人々によってばらまかれたのだ。このうわさは作家や芸術家の耳にまで達し、ゆがんだイメージをつくるに至った――二人の犯罪学者はこう結論している。

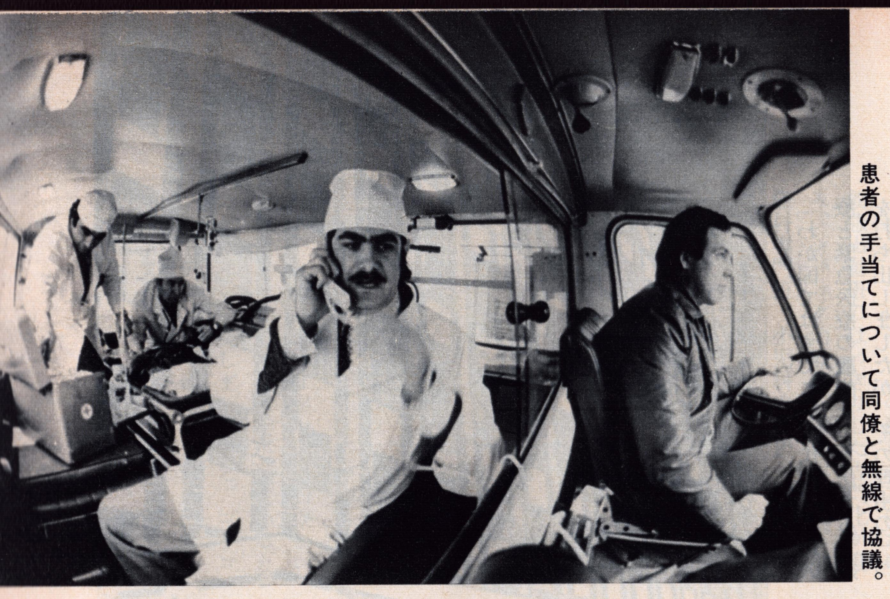
心筋梗塞と闘う救急医療

本誌記者 リュドミラ・エニューチナ カメラ V・フェドレンコ



スクリフォソフスキー記念救急医療研究所長でモスクワ市救急医療合同の総長ボリス・コマロフ（ソ連医学アカデミー準会員）





救急車に道を譲るのは世界どこでも同じ。患者の手当てについて同僚と無線で協議。

モスクワのある建設事務所に務めている大工のウラジーミル・ワシリエフは、当直勤務がそろそろ終わりかけたとき、突然、胸にひどい痛みを感じた。ワシリエフの様子がおかしいのに気がついた若い配車係嬢が救急車を呼んだ。ソ連では24時間体制の救急医療が行われている。電話番号は全国共通で03番。

数分後に集中治療班が現場に到着した。心臓の専門医が病人を診察して、高血圧による急性の冠状動脈不全との診断を下し、必要な注射を打ったが、ワシリエフの容態はよくならず、心室細動（心室の心筋線維が不整なけいれん性収縮を起こし、心臓の拍動が極度に不規則になる）をはじめた。こういう症状はしばしば、臨床死と呼ばれる。

医師は心臓に電気刺激を与えて心臓がまた正常に働くようにさせたが、ワシリエフの容態は依然として危篤状態を脱しなかった。そこで病人はただちに救急車でモスクワのスクリフォソフスキー救急医療研究所の心臓病緊急治療センターへ送られ、ショック治療室に入れられた。

その後の14時間にワシリエフは30回も臨床死の状態に陥ったが、その都度危機を脱した。医師たちが勝利したのである。9日後、ワシリエフは退院した。その穏やかで明るい目をみると、この人が何回も死に神の手にとらわれかけたなどとは信じがたい。

スクリフォソフスキー記念救急医療研究所の所長でモスクワ市救急医療合同の総長ボリス・コマロフ・ソ連医学アカデミー準会員にインタビューしたとき、記者がワシリエフが命拾いしたのは奇跡だというと、コマロフ所長は「私たちは奇跡など信じていません」と、記者の頭を冷やすような口ぶりで言った。「それに、厳密に言えば、ワシリエフの場合は特筆すべきことも、特に面倒なことも別にありませんでした。医師はこういう場合には何をしなければならないかをちゃんと知っていたのですから」

心臓病はいつ首位を譲るか？

統計によれば、こんにち世界の先進国ではどこでも、心臓病の罹病率が第1位を占め、ガンを第2位に抑えている。また国連の世界保健機構（WHO）の資料によると、心筋梗塞患者の40―60％は発病の初期に合併症を起こして死ぬ。そのうち70％が自宅で死亡しているのは注目すべきことである。

コマロフ所長はいう。



交通事故の負傷者を収容する救急車



モスクワ市救急医療ステーション。市内各所に40の支所を持つ

「わが国ではすでに50年代に、救急医療と緊急医療の機能を一本化する方針を打ち出しましたが、その理由の一つは前述のような事情があったためです。それ以前は二本建てになっていて、それぞれ独立していました」

それまで、救急車を呼べるのは、人身事故、交通事故、けがなど、街頭や工場、あるいは公共の場所でこれらの事故が起きた場合だけだった。自宅で急病になったり、けがをした場合は緊急医療で、呼び出し先は最寄りの診療所だったが、その後は命にかかわるような緊急の場合はすべて救急医療班が出動することになった。

「しかし、モスクワのような整然とした組織のある都市でも救急医療の一元化という決定を実現するのは簡単なことではなかったのです」とコマロフ所長は言った。「救急医療の手がける内容が広がるにつれて、救急車の出動要請回数がぐんと増えたからです。改組後の最初の2年間でほぼ5倍になりました」

それからあとになると、この出動要請回数は安定して、モスクワの場合年間約二五〇万回、1昼夜あたり七〇〇〇回になった。そこで、医師や助手を大増員し、救急出動班に新しい薬や医療機器、自動車を回し、救急ステーションをたくさん新設して電話や無線を設備することが必要になってきた。

「救急医療を集中化して体制の建て直しをする一方で、専門化を進めたので、救急医療の内容をぐっと引き上げることができました」と、コマロフ所長はいう。「それは、心臓血管系疾患の治療分野で特にはっきりあらわれました。私はいろいろな国際医学会議やシンポジウムに出席しますが、たとえばアメリカでは心臓の冠状動脈不全で死ぬ者が毎年五万人もいることを知っています。その多くは病院へ運ぶ前に機を逸せずにちゃんとした手当てを施せば助かったはずだと思います。

たしかに、狭心症や心筋梗塞の患者は数週間は絶対安静にし動かしてはいけないものだと久しいあいだ考えられていたので、自宅で手当てをしたものです。死亡率が高いのはこのためだった。今では確信しています。私たちの治療方法がより完全なものとなるにつれて、重症の心臓病患者でも特別な方法で、まして医師の付き添いがあれば動かしてもよいことが明らかになったのです」

新しい治療法の開発

コマロフ所長を総長とするモスクワ市救急医療合同の傘下にはスクリフォソフスキー救急医療研究所と、40の支所をもつ救急医療ステーションが属しており、約七〇〇の救急出動班が指揮下に入っている。この数年のあいだに救急出動班のはっきりした専門化が進み、ショック治療班、毒物専門班、神経科専門班、小児科専門班、心臓病専門班、集中治療班などができている。

スクリフォソフスキー研究所は治療施設であるとともに大規模な研究センターでもあるのが特徴で、35の専門治療部に細分化され、緊急外傷部、緊急神経外科部、火傷部、急性中毒治療部、緊急心臓脈管外科部などがある。記者はコマロフ所長に勧められてこういう専門治療部の一つ、心臓病救急治療センターを見学した。このセンターの所長はアレクセイ・ゴリコフ医学博士である。

「このセンターでは集中救急治療をコントロールし、管理しながら進めるという原理を開発しました」と、ゴリコフ博士が話してくれた。「救急医学にこれまでの伝統的な医学原理を導入したのです」

「といいますと?」

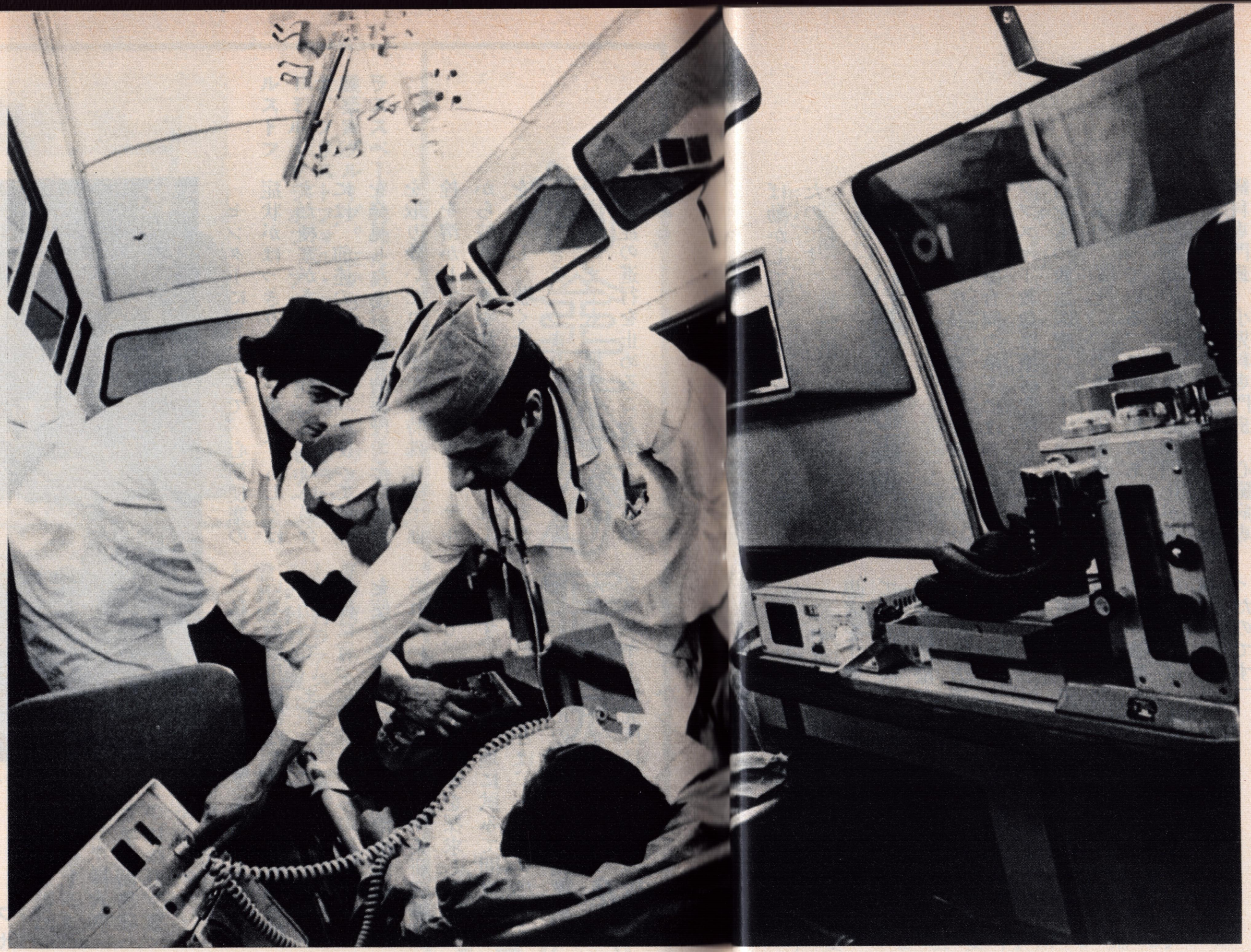
「これまでの伝統的な医学では、まず患者を丁寧に診察してから診断を下して、治療法を決め、回復するにつれて必要な治療処置の手直しをしていくというやり方でした。このやり方だと何日も、時によっては数週間も数カ月もかかることがあります。救急医はつい先頃まで、主として自分の経験や勘、対処の早さなどに頼ってきました。ゆっくり診察する時間がないので救急医はしばしば、本当の病因を確かめずに、病状だけを見て治療を行うことが多かったのです」

今日では救急出動班の心臓医は緊急診断法によって敏速に正確な診断を下し、処置を決め、症状を管理する医療機器をもっているので、病院へ運ぶ前に電気刺激療法、麻酔、電気麻酔を行えるようになっている。

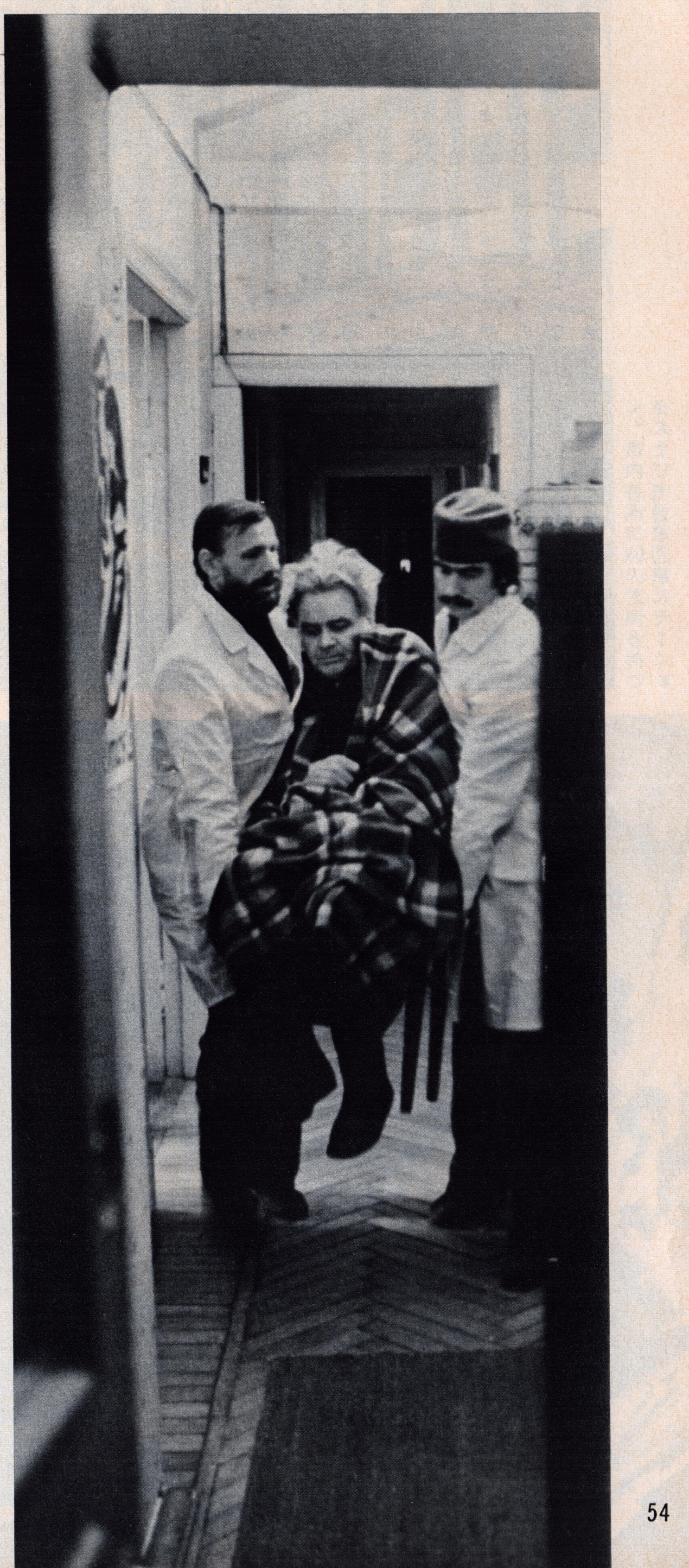
それに多くの心臓病の場合、麻酔そのものは人道的な行為というよりむしろ治療法なのである。心筋梗塞の場合、痛みは衝撃を受けた心臓に破壊的な作用をおよぼすから、できるだけ早くその痛みを取り除かねばならない。これまでに知られている麻酔薬は効き目は強いが、どれも麻薬系のものだから、使うと必ず好ましくない副作用を伴うので、電気麻酔法の力を借りることになった。当初の実験でも電気麻酔法が無害でしかも大きな効果のあることが



モスクワ市救急医療ステーションの中央指令室



最初の治療は患者を病院へ運ぶ救急車の中で始まる。



病人を家から運び出す救急医療班の医師と看護人

分かった。

危険な不整脈は強い電気刺激を与えて再び心臓を正常に働かせることができる。患者がこの（原則として非常な苦痛を伴う）処置を痛がらずに我慢させるためには、強い電気刺激を患者に与えるあいだの何秒間か、電気麻酔をかけるのである。するとほぼ一〇〇％、患者は30秒後には意識を回復して医師の質問に答えられるようになる。しかもこの処置を施したあと患者は非常に気分がよくなるので、治療を続けるために救急車で病院へ行くようにと勧めても、患者がなかなか言うことを聞かなくなるほどだ。

激減した死亡率

「救急心臓医が緊急診断法を身につけるにしたがって、高血圧症の発作が起こる原因や、その発作が心筋梗塞におよぼす影響をまったく新しい目で見直さねばならないような予想外のデータにぶつかったのです」と、ゴリコフ博士が話を続ける。

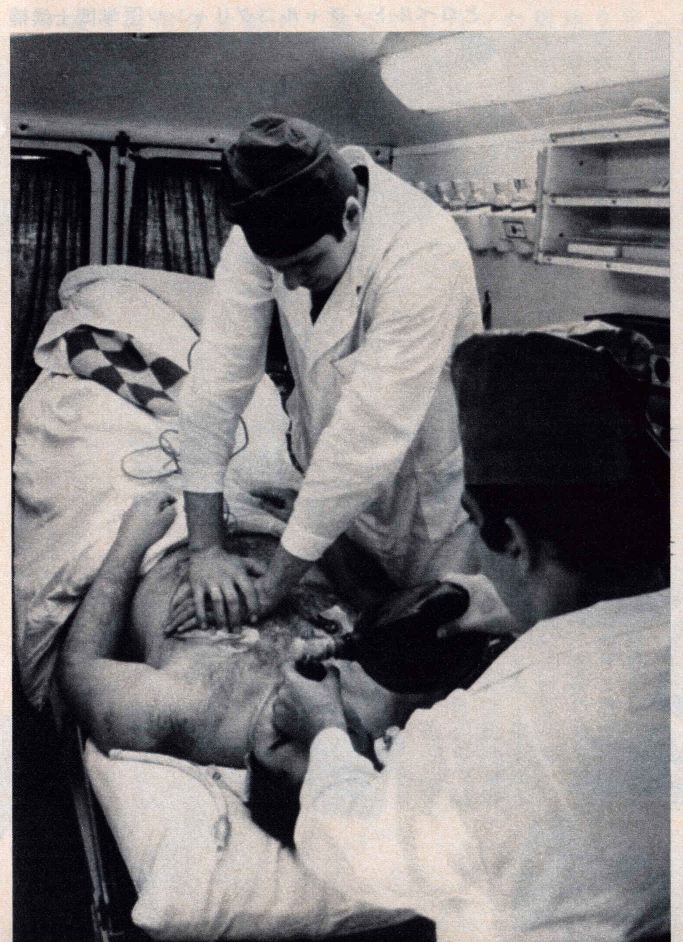
発作の原因は一応2種類に分類できる。一つのケースは、心臓を働かせ過ぎて、血液の送り出しが高まるために起こるもの。もう一つのケースは、心臓の働きはごく普通か、普通より低いくらいだが、血管が急激に収縮するために起こるもの。医師は患者の高血圧性発作がどちらのタイプなのか、機器を使って診断し、手早く必要な薬を決める。投与された薬の効果もこうした緊急診断法によって追跡できる。以前の救急治療では医師はこういったことができなかった。

「私たちはベータ遮断剤の役割も新しい目で見直すようになっています」とゴリコフ博士は言う。「この薬に添付してある説明書を見ると、実にいろいろな国で生産されていますが、心筋梗塞の症状がひどいときには絶対に使用してはいけないと書いてあります。要するに、このグループの薬を使用すると、心臓の収縮機能が衰えるのです。これは梗塞を起こしている場合には絶対禁物と見られてきたのですが、今では、患者に心臓機能の高進症状がある（動脈の血圧が上がるとは限らない）場合にはベータ遮断剤を使用すると、すばらしい治療効果が得られ、危険な併発症を予防することが分かっています。

新しい緊急診断法のおかげで心筋梗塞の初期の最も危険な時期の死亡率がぐんと減りました。私たちのセンターの心臓専門の集中治療班について言えば、死亡率はわずか1％です。患者の多くは発作を起こした現場で救急治療班が施した手当てだけで十分でした。従って、そのあと入院させる必要はありませんでした」

カテーテルによる治療

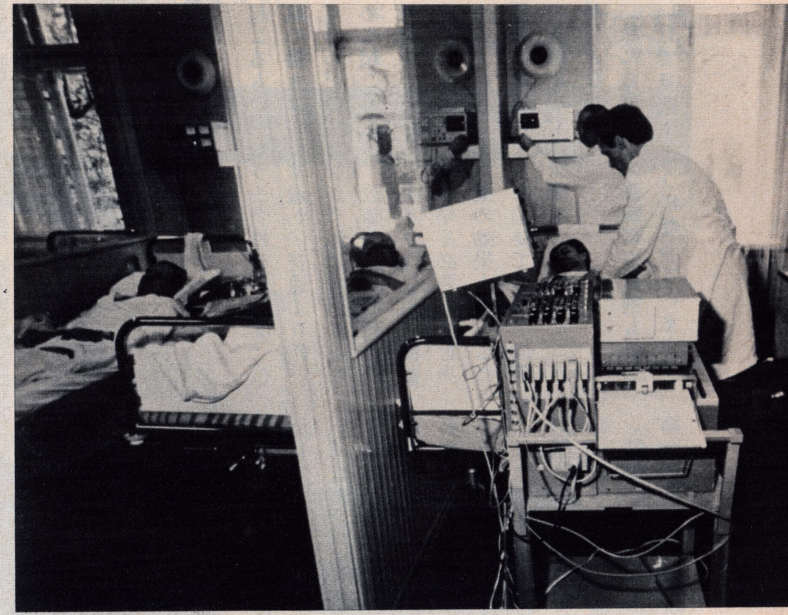
「もっとも、救急治療の任務はその場でしかるべき手当てをするだけが全部ではないのです」と、再びコマロフ所長が語る。「モスクワ市内には、心臓病治療センターが約40あり、そこでは心臓病患者の独自の緊急治療法が開発されています。もっとも効果のある治療法の一つが冠状動脈の緊急カテーテル法で、これはレントゲンで透視しながら冠状動脈内に指向性のカテーテルを入れる方法です」



心臓発作を起こした患者に携帯蘇生装置で緊急治療。

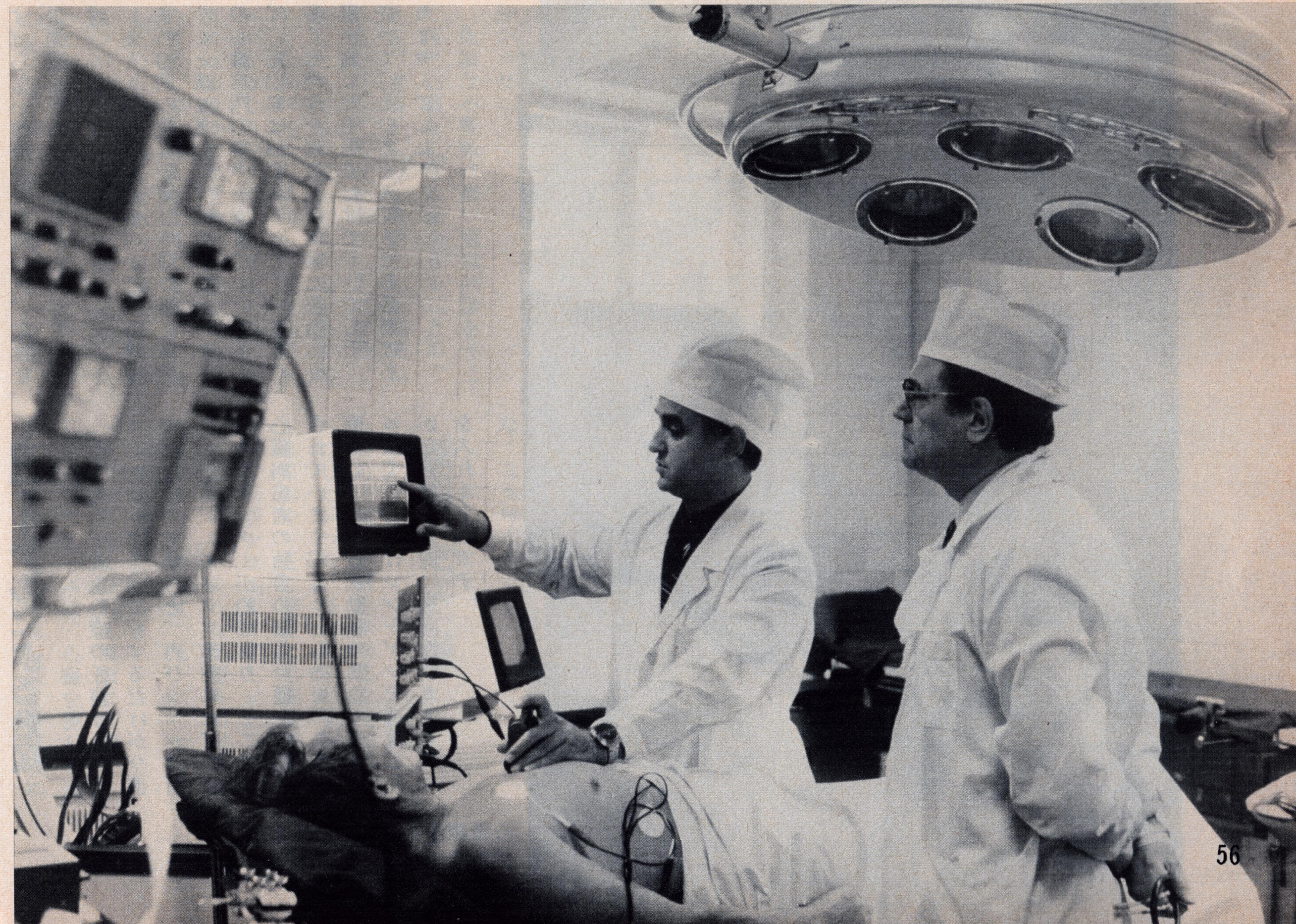
センターにきた患者で、心筋梗塞の症状がはっきりしない場合、もしくはまだ梗塞があまり進行していない場合には、前述のカテーテルを使って血栓を発見したり、機械的手段でその血栓を取り除いたり、または特殊な薬で血栓を溶かしてしまう。このカテーテルから特殊な薬を注入すれば、けいれんをなくし、狭くなった血管を広げることができる。つまり、心筋梗塞を予防できないまでも、梗塞の規模を抑え、併発症の進行を止めることができるのである。

「私たちの治療センターに備えられている治療用機器は医学上の研究開発に役立っています」と、コマロフ所長は最後に言った。「これらの治療用機器を使ってまったく新しい治療法が開発されています。私たちは学術研究機関として、絶えずなにかを探求しているのです。ここで実地に試みて間違いないと分かったことは、モスクワだけでなく、他の都市のほかの治療施設にどんどん伝えています。わがスクリフォソフスキー研究所はソ連全体の医学センターですから」



スクリフォソフスキー研究所の集中治療室

スクリフォソフスキー研究所の心臓病緊急治療センターで患者を診察するコマロフ所長（右）とロベルト・チャルゴグリャンツ医学博士候補



村全体がモデルハウス

本誌記者 アレクサンドル・ソコロフ
カメラ E・ネーデリ



ラススベート村のための住宅を設計した若い建築家グループ。左からイリーナ・トゥルシナ、フリストフォル・ロトシニコフ、ウラジーミル・マラホフ、アレクサンドル・セリベルストフ

ロストフ・ナ・ドヌー市（ソ連欧州部の南）から20㎞の所に、このほど新しい村ラススベート（暁）が出現した。この村の特徴は、どの家もオリジナル設計によって建てられているということ。家々には建築明細一覧表があり、建築コストや必要な建材量が分かるようになっている。これはラススベート村の住民だけでなく（この村の住宅建設費用はコルホーズ、つまり集団農場が負担した）、住宅協同組合や個人の資金で、この気候帯に家を新築するためのモデルハウス選びにこの村を訪れる人にとっても大切なデータである。それ以外にもブルガリア、ドイツ民主共和国、ポーランド、ドイツ連邦共和国の専門家もここを訪れている。この村はさながらユニークなモデルハウス見本市の観を呈しており、同時に伝統的な民族建築に基づくソビエト建築の新しい方向の可能性を示す展覧会場にもなっている。

第3の道

ソ連の農村では昨年1年間に六二〇〇万平方mの住宅が建てられた。一九九〇年にはこの数字は一二〇〇万平方mにまで引き上げられる予定である。農村建設の伸びは、もちろん、建築学の発展を促している。

ソ連では一時、農村でも都市型の中層住宅がもてはやされた時期があった。中層住宅のまずまずの経済性が農場の指導者や村ソビエトなど、住宅建設の発注者に受けたためだ。快適な都市型のフラットは、最初、非農業従事者（教師、文化会館の指導員など）、青年、よそから農村に移住して来たばかりの新住民の間で好評だった。だが土地に愛着が出て来るようになると、中層住宅の生活はだんだん味気なくなった。一方、年配者たちはしばしばモダンなフラットへの入居を拒否した――自分の家での昔ながらの生活の方をよしとした。都市なみの便利さはなくていい。その代わり自分の庭や納屋がある。窓の下には自由に使える住宅付属地が広がっている……。

そこで建築家は2―3世帯用のコテージ（別荘風の小邸宅）を農家の人に勧めたのだが、それではスペースが十分ではなく、子どもが大きくなり、自分の世帯を持つようになると親の家を出て行かなければならない。それはみんなを満足させるにはほど遠かった。

そこでドン川の下流と北カフカズの農家の設計を行っている研究所のスタッフは、建築学博士候補フリストフォル・ロトシニコフの指導の下に第3の道を選んだ。新築家屋の設計の際には農村住民が何世代にもわたって積み上げて来た経験を利用するという道だった。

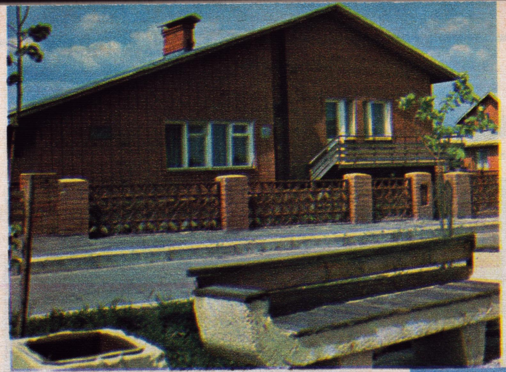
この第3の道の出発点になったのはコサック（15世紀後半からドン川、クバン川、テレク川下流の空いている土地に移り住んだ中央ロシアからの移民）の中庭式の農家だった。建築家はここ三〇〇年間のコサックの住居の発展の法則性を研究した。古文書・古記録を調査し直し、写本やデッサン、写真、製図を研究し、ロストフ州や北カフカズの農村を訪ね歩いた。その結果、家と納屋は一つの複合体を構成していたことや、主屋には通常、最低10―12人が居住し、祖父、父、息子など数世代のコサックが同時に生活していたことが分かった。

現代の農民はどんな住居を求めているのか？ 住まいに対する農民の好みを知るために建築家によるアンケート調査が行われ、調査結果はコンピューターで処理された。そこから導き出された結論には社会学者、社会統計学者、経済学者も関心を示した。住民の回答は、コサック式農家を研究の出発点に選んだ若い建築家たちの正しさを裏付けるものだった。現代農民の核家族化の傾向を克服するには8―10人家族用の家を建てる必要があるというのが大方のアンケート回答の考えであった。

この見解にはすぐに反論が出た。理由は、建築費が〝高くつく〟の一語につきた。だが〝第3の道〟の支持者は説得力ある論陣をはった。こういう家に住む農村の一家は、若い所帯でも2―3人の子どもがいる。つまり、15―20年もすれば当然もう一つ二つの新所帯が誕生するわけだ。それならば後になって2軒の家を建てるよりは、家族



ラススベートの中心部



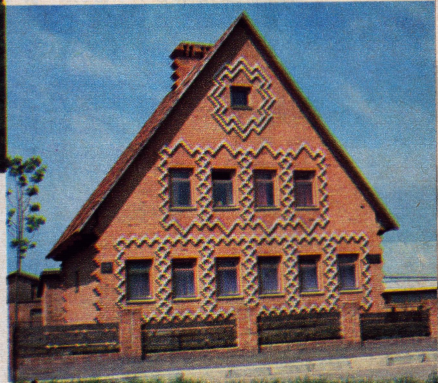
ラススベート村には同じ家は二つとない



村の中央通り



この村に来れば必ず好みの家がある



ラススベートによみがえった伝統的な民族建築



何世帯も住める住宅

が増えることを予定に入れてまず大きな家を建ててしまった方が経済的だろう、というものだった。実際、農作業の性格から言って、大人は朝から晩まで畑か農場に出ているので、朝早く農作業に出る前に子どもを幼稚園に連れていくよりも、おじいちゃんやおばあちゃんと一つ屋根の下で生活する方がはるかに都合がいい。

アンケート調査から数カ月後には最初の設計図がいくつか完成していた。

〃建て増し可能〃住宅

全部で一〇〇点の設計プランが採用され、それがラススベート村の一〇〇戸の家になった。各家がそれぞれ特徴を持っている。暖房に太陽エネルギーを利用した家、敷地内に数ユニットの増築が出来るスペースを確保した〃横に伸びる〃家、必要ならばあと1、2階は増築できる〃上に伸びる〃家。この新しい家の多くは2階建てで、1階を年配者向け、2階を若者の好みに合わせた2世代同居用になっている。家には二つの入口——表玄関と裏口があり、使いやすい間取りで、部屋と部屋、キチン、バスルーム、ユーティリティ間の連絡もいい。各家には必ず付属の建物がついている。

一〇〇戸の家はどれも設計、インテリアなどバリエーションが豊富で、それぞれに違うのだが、共通点が一つある——居住性の高さだ。村の公共施設——ホテル、店舗、クラブ、式場なども大変魅力的だ。

村全体の設計もとても独創的で、辻公園、並木道、歩道、舗装された車道(車道から直接各戸に乗り入れることが出来る)、家畜の通路などがある。

もっとも、この村に来てまず驚嘆したのは、家にではなく、子どもたちにだった。実に子どもの多い所だ。ラススベートの1所帯の平均人数は4・5人で、州平均の3・2人を大きく引き離している。社会統計学的にこれほど顕著な変化が出て来たのはこの4年間のことだという。

なお、ここと同じような村が現在ロストフ州の42の地区で建設中である。

アジアにとっての脅威か、アジアからの脅威に対する回答か？

タス通信政治評論員 アスコリド・ビリュコフ

最近、米国政府の手によって、明らかにアジア諸国民を対象にした宣伝キャンペーンが展開中である（遺憾ながら、若干の現地の政治家やマスメディアもこれに加わっている）。このキャンペーンの目的は、アジア諸国民に、〝ソ連の脅威〟がまさに太平洋地域において増大している、と信じ込ませようとすることである。このテーゼの作成者は、ソ連製ミサイルＳＳ20がソ連アジア部へ配備されたと言って人々を脅している。そしてロシア人の侵略性なるものにもっと真実味を帯びさせようというので、極東で最初に軍備増強を始めたのはソ連であり、米国はそれに対して対応手段を取らざるを得なかっただけなのだなどというウソをばらまいている。

真実を回復するために若干の事実を引用したい。まず最初に、極東に真っ先に核兵器を持ち込み、実際に使用したのは誰だったか思い出しておこう。その後、朝鮮戦争や一九五八年の台湾海峡の危機の時、また対ベトナム侵略の過程で核兵器の使用を辛うじて思いとどまったのは誰だったのか？ 米国から何千マイルも離れたこの地域における米国の〝死活の利益〟を守るために〝米国が手にしているあらゆる手段〟を行使する可能性について、米国の最近の2代の大統領が言明しているが、これが極東にとって真の脅威でないとしたら、何だと言うのだろうか？

第2次世界大戦後、米国はアジア太平洋地域に三〇〇カ所以上の軍事基地および各種施設を展開した。フランスの「モンド・ディプロマチク」誌は、〝通常兵器あるいは核兵器の利用による干渉の主要な足がかりとして〟横須賀とスビク湾（フィリピン）の米海軍基地、嘉手納と南朝鮮の大邱、クラーク（フィリピン）、アンダーソンとポート＝アプラ（グアム）の米空軍基地を挙げている。

だが問題はペンタゴンのこれらの〝足がかり〟だけに限らないのだ。この地域に配備された米国太平洋軍の兵力はソ連やその他のアジアの社会主義諸国に向けられており、兵員数は一五万人に達し、四〇〇〇基を数えるミサイル＝核能力で武装されている。米国太平洋軍司令官のウィリアム・J・クロウ海軍大将が最近認めたところによると、この地域には、最新式兵器で装備された6空母部隊、トライデント型ミサイル搭載原子力潜水艦、最新鋭航空機が常時配備されている。さらにまた同司令官は、米国がこの地域における軍事的プレゼンスを拡大し、艦隊および航空機の近代化を図る方針であると言明した。遺憾ながら認めなければならないが、太平洋地域のワシントンの一部の同盟国も、米軍との共同軍事演習や、米国第7艦隊の艦船および潜水艦に巡航ミサイル〝トマホーク〟を装備するという米国の計画が自国（同盟国）の安全の強化とこの地域の安定を促進すると誤って考えている。

これらや他の事実をもって見れば、アジアに対する真の危険がどこから来ているかを理解するのは困難ではないと思う。世界における――この地域も含め――軍拡競争とさまざまの種類の戦争準備をリードしたのは、いつも米国であった。「ノートン・アンド・カンパニー」社発行の『核攻撃単一統合作戦計画――米国の核戦争秘密計画』には、「レーガン政権の下ではもう、ソ連を絶滅する計画なぞ米国にはないかのように慎重にふるまったり、装ったりすることは行われていない」と書かれている。また、「現在の状況では、核攻撃単一統合作戦計画が、大統領に残しているただ一つ確かなバリエーションは、ソ連に狙いを定めた一〇〇〇発以上のミサイルを同時に発射する、全面攻撃だけである」という結論が述べられている。

アジアも含め、事実上あらゆる方向からワシントンがソ連に対して行っている戦争準備を、ソ連は否でも応でも考えないわけにはいかないのである。

通常のパトロールを行う米国空母は、艦載戦闘爆撃機用に一セット――一〇〇発の核爆弾を搭載している、と見られている。その威力は一〇〇―五〇〇キロトンである。この数字をもとに香港の週刊誌「エイシャ・ウィーク」は次のような情景を思い描いている――「米国空母ミッドウェーが東京湾南東、横須賀湾に停泊している時、その艦内には、一九四五年8月6日、死の放射能によって約一一万八〇〇〇人の広島市民を蒸発させ、焼死させ、あるいは傷つけた核爆発の、最低でも五〇〇倍以上の威力を持つ核爆発物がある」。

もちろん、核兵器を満載した米国空母、在日米軍基地は日本にも脅威をもたらしている。だがこの核戦力は米国人がソ連用に準備したものであり、その直接の目的はまさにソ連を壊滅させることなのである。これはわれわれに、この深刻な危険から身を守るための不可欠で、まさにやむを得ない措置をとる完全な権利を与えるものである。

ソ連はアジアと極東諸国に、この地域における国際緊張緩和を目ざすさまざまな提案を再三行って来た。一九八一年、わが国はすべての関係諸国と極東における信頼措置に関して具体的交渉を行うことを提案した。更に、海軍活動の相互制限について、特に広大な戦闘パトロール区域内からミサイル搭載潜水艦を引き上げることについて、および相互に合意した境界内にミサイル搭載潜水艦の航行を制限することについて米国と協定を結ぶことを提案した。ソ連は、世界の各海域へ、特に最も船舶航行の多い海上交通路（シーレーン）が伸びている海域へ信頼措置を広げることを提案した。

モンゴル人民共和国政府がアジア・太平洋諸国間で相互不可侵・武力不行使協定を作成・調印しようという重要な提案をしたが、ソ連は喜んでこれを支持した。

ソ連はかつて、インド洋海域における軍事活動の制限について米国と話し合う用意があると声明した。だがわれわれは類似の措置を太平洋に適用するのにも障害はないと考えている。例えばソ連は、ＮＡＴＯおよびワルシャワ条約加盟諸国がブロックの行動範囲をアジア全域に決して広げないよう提案した。

このように実際に、国際緊張の緩和、現在の情勢を打開する方法の模索を目ざすソ連の平和提案には不足がない。ソ連はこれらの提案を、誰の安全も一方的に侵すことのない、米国との対等ということを基盤に実際に遂行する用意がある。しかしながら、米国およびそのアジアの同盟諸国からはいかなる前向きの反響も得られなかった。

ワシントンやそれに追随する太平洋の同盟諸国は、日和見主義的な宣伝的思惑によって、最近は〝防衛的目的〟で核兵器を使用することについてより多く語るようになっている。しかし、本質的には彼らの政策はゆるぎない核先制打撃の概念に依然として基づいている。

まさにこのために、わが国のアジア地域へソ連製中距離核手段を配備するという措置がとられたのである。これらの手段はこの地域における米国の前進配備核兵器との均衡を保つためのもので、それ以外の目的はない。ソ連は、核の生産・取得を拒否し、自国内に核を保有しない国家に対しては絶対に核兵器を使用しないとはっきり言明した。しかも、非核保有国のどの国ともこれに関して特別の協定を結ぶ用意がある。

アジア諸国の側から表明された不安に答えるかのように、ソ連は、欧州中距離核戦力（ＩＮＦ）削減交渉が合意に達し、それが効力を発すれば、その時点でソ連東部へのＳＳ20ミサイルの展開は中止されようと予告した。もちろんこれは、アジア地域において戦略的状況の本質的変化が起こらず、そしてまず第一に、新たな中距離核手段の、ソ連領東部に到達可能な地域への展開を米国が開始しないという条件の下でのみ可能だった。

だが、この約束はワシントンの行為によって台なしにされた。米国は第一撃核兵器の西欧への展開に着手し、アジア太平洋地域においても戦略的情勢を変える措置を取り始めた。こういう条件の下で、米国がソ連とその同盟国に対してつくり出している脅威に対し、それに相応した対抗措置をソ連が取ることは、まったく当然のことに思われる。

対決政策の拒否、一九八三年12月以前の、米国製新型核ミサイルが欧州に配備開始される前の状態への復帰、軍事的対立のレベルの低下、信頼措置の実行――これが、アジア太平洋地域が平和に暮らすためにモスクワの提案している道である。

催し物のお知らせ

☆ブリャート自治共和国の歌と踊りのアンサンブル「バイカル」の公演

新潟・市公会堂（6月15日）、喜多方・プラザ文化センター（17日）、北上・市民会館（18日）、青森・市文化ホール（19日）、室蘭（20日）、苫小牧（21日）、札幌（22日）、稚内（25日）、名寄（26日）

▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話03・261・4897）へ。

☆スタニスラフスキーおよびネミロヴィチ＝ダンチェンコ記念国立モスクワ音楽劇場バレエ

東京・東京文化会館・（6月30日、7月1、2、3、4、5、6日）、東京・昭和女子大人見記念講堂（7月7日）、東京文化会館（7月7日）、横浜・神奈川県民ホール（7月8日）、沼津・市民文化センター（7月10日）、松戸・聖徳学園（7月11日）、神戸・神戸文化ホール（7月12日）、大阪・フェスティバルホール（7月14、15日）、姫路・文化センター（7月17日）、鹿児島・市民文化ホール（7月19日）、福岡・市民会館（7月20日）、いわき・平市民会館（7月22日）、水戸・茨城県民文化センター（7月23日）、名古屋・市民会館（7月24日）、青森・市民文化会館（7月26日）、秋田・県民会館（7月27日）、仙台・宮城県民会館（7月28日）、前橋・群馬県民会館（7月30日）、千葉・県文化会館（7月31日）、神奈川県民ホール（8月4日）、東京厚生年金会館（8月5、6日）、札幌・厚生年金会館（8月8、9日）

▽お問い合わせは、全国労音（電話03・265・6361）へ。

☆第13回全国ロシア語コンクール

▽7月8日（日）午後1時から、日ソ学院（東京都世田谷区経堂1―11―2）で。

▽優勝者は2週間のソ連旅行に招待。入賞者には賞品、参加者全員に記念品を贈呈。

▽申し込み締め切りは6月25日。所定のスピーチ原稿に参加費1000円を添えて申し込む。申し込み・問い合わせ先はコンクールの事務局（電話03・429・8239）へ。

陶磁器の人形の世界

オリガ・カシーリナ
カメラ A・スベルドロフ



アスタ・ブルジェジツカヤは独特の作風を持つ陶芸家である。彼女は繊細な技術と豊かな想像力によって、楽しい陶磁器の人形の世界を作り出している。ブルジェジツカヤの作品は何度も、全ソ的な展覧会はもとより、外国の展覧会にも出品されている。

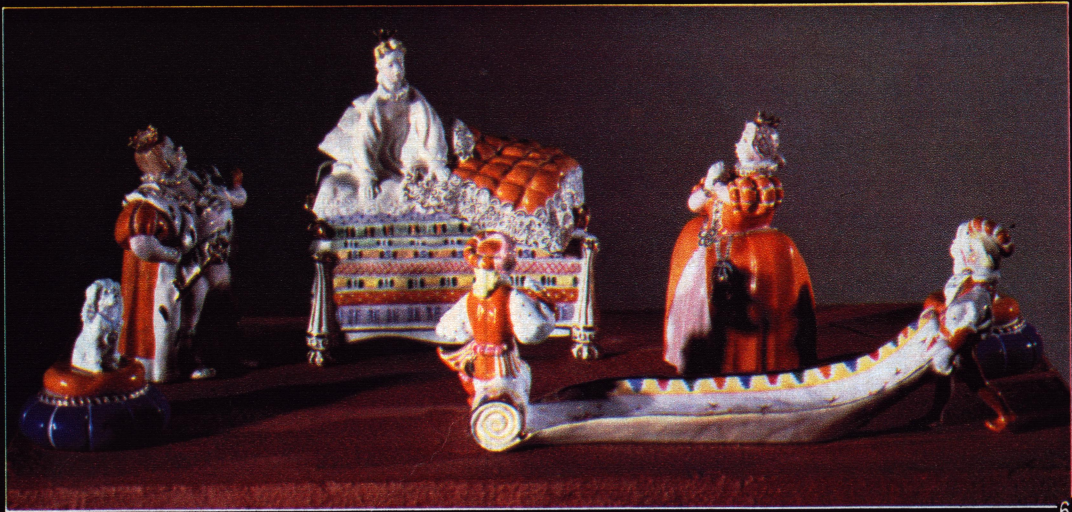
……陶器でできたガリバーが周囲の小人たちを見ている。その表情は何とも言えぬほど子どもっぽく、すっきりしており、惚れぼれするほどだ。

一見ひ弱そうなこの小さな人形を単なる装飾品、思わず笑みを誘う玩具、と言って済ましていいものだろうか。ブルジェジツカヤが作り出す世界には調和と美があふれている。磨き抜かれたフォルムは主人公たちの性格や状況を解明するカギにすぎない。ブルジェジツカヤは一風変わった彫刻家である。作風には演劇への、演出への傾倒がうかがえる。若いころから舞台に心引かれていたので、自分で舞台を設定し、主人公たちを自分のファンタジー、自分の思想に合わせようという気持ちがあるのだろう。

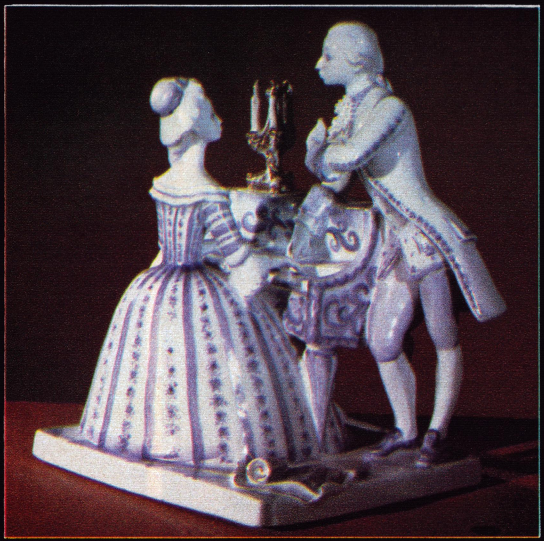
一九四五年にスリコフ記念モスクワ美術大学を卒業したブルジェジツカヤは、古い歴史を持つモスクワ郊外の有名なドゥリョーボ陶磁器工場で働き始めた。すでに長年にわたって芸術陶器主任を務めている。ブルジェジツカヤは有名な俳優たち、サーカスの名優たちのドラマチックな瞬間、工場の日常生活を表情あふれる作品に仕上げた。文学ものはブルジェジツカヤの独特の世界である。プーシキンのテーマには若いころから取り組んでおり、19世紀ロシアのこの天才詩人の肖像、作品の主人公たち、特に『エブゲニー・オネーギン』を扱ったシリーズなどたくさんの作品を献げている。〝オネーギンもの〟は特に表情に富んでおり、細かい心理のひだまで伝わってくる。作家チェーホフのもの悲しいこっけい物語も格好の



▲『ファラオの娘と幼児』（一九六七年、シリーズ『神話のテーマ』より）



『おやゆび姫』（一九五五年、レニングラードの国立ロシア美術館所蔵）



『モーツァルト』（一九七八年）



『ガリバー』（一九五七年）





『ハムレット』（一九五八年）

ソ連の人気俳優 オレグ・ヤンコフスキー

映画研究家　ワレンチナ・ソログープ



舞台と映画で活躍する
オレグ・ヤンコフスキー

オレグ・ヤンコフスキー（40歳）は15年以上も前からの人気俳優だ。いままでに何十という役を演じ、名演技と言われたものも少なくない。

彼は映画の主演男優として理想的な容姿を持ち、ずっとスターの座を守り通してきたが、最近美男俳優と言われてきたヤンコフスキーの人気が質的に変化してきた。ファン層が広がり、年齢、趣味、教養の異なる各層の人々がこぞって彼を見に、映画館や劇場に足を運ぶようになった。多くの人が認めるように、スクリーンや舞台に彼が出演していることが、その作品の成功をすでに約束しているのだ。

レーニン・コムソモール賞を受賞したヤンコフスキーが、俳優の道に入ったのは偶然のことからだった。14歳のとき、当時すでに俳優だった長兄が、病気になったローティーン役の俳優の代役として、急拠サッカー好きの少年だった弟を舞台に引っぱり出したのである。この舞台がたまたま好評で、この成功がオレグをサッカーから演劇へと引き込んだ。

オレグは中学校卒業後ボルガ沿岸のまちサラトフの演劇学校に入り、その後サラトフ・ドラマ劇場の俳優となった。

ヤンコフスキーが映画と出会ったのもまた偶然だった。劇団がウクライナのリボフ市で公演していたとき、まちのあるスナックで有名な映画監督のウラジーミル・バソフの目にとまったのである。バソフはそのとき自作の映画『楯と剣』の主演男優を探していた。

「きっとあの若者は物理か数学をやっているのだろうなァ……もし俳優だったら、主役にもってこいなのだが……」――バソフはそうつぶやいた。ヤンコフスキーを物理学者か数学者と見たのは、バソフの見当違いだったが、主役の一つを当時無名のこの俳優に与えたという点では、バソフの眼力は正しかった。撮影終了後バソフ監督は「むだの無い、むしろ抑えた演技こそ映画俳優としてとくに貴重なものだ。ヤンコフスキーにはそれがみんな自然に備わっている」と語った。

舞台演劇の分野でもこの若い俳優はついていた。彼はモスクワの最も面白い劇場の一つ――レーニン・コムソモール記念劇場に招かれた。

映画出演については、初期のころの役はあまり出来がよくなかったが、しかしその多くはやはりヤンコフスキーの俳優としての成長のために必要なものであった。こうして多くの役をこなしてヤンコフスキーは徐々にエブゲニー・カレロフ監督作品の『二人の同志の勤務』のアンドレイ・ネクラソフ役の演技に到達した。一九一九年を舞台とするこの作品の中でヤンコフスキーは、一九一七年の10月社会主義革命の意義を受容し、理解したロシアの真の知識人の心理を見事に表現した。

映画『報奨金』と『フィード・バック』でヤンコフスキーは個性豊かな党指導者の役を演じた。『報奨金』（監督セルゲイ・ミカエリャン）は、ある建設作業班がせっかく支給された報奨金を、自分たちにはもらう資格がないとして拒否するストーリーである。ヤンコフスキーの演じる建設場党委員会書記は冷静で注意深く賢明であり、労働者たちの異例の行為の正しさを理解し、自分の誤りを認める勇気を持っている。

ヤンコフスキーはこう語っている。「これらの作品に出演してとても有意義だった。私は『報奨金』を携えて、米国、オーストラリア、イタリア、フランスなどを回った。各地の観客の反応の大きさにびっくりした。一見して、きわめて国内的な問題をテーマにしているこの作品が、いたるところで人々の心を打ったのだ」

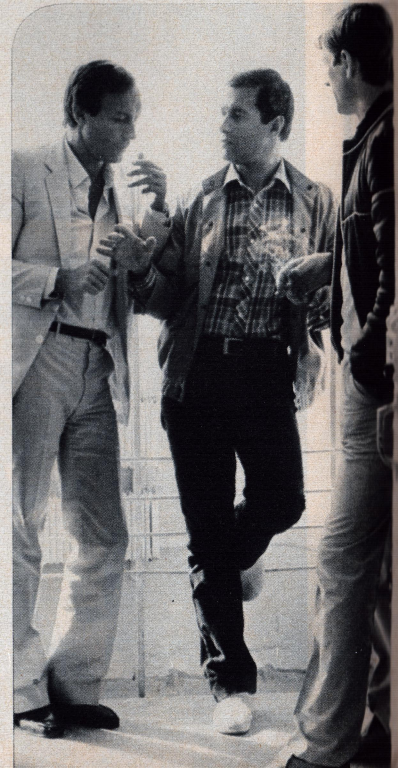
この2本の映画への出演は、ヤンコフスキーがソビエト演劇の正面舞台に出る飛躍台となった。レーニン・コムソモール記念劇場の『赤い草の上の青い馬』でのレーニンの役は、彼の最も重要な仕事の一つになった。劇作家のミハイル・シャトロフと演出のマルク・ザハロフの意図を受けて、ヤンコフスキーはメーキャップをせず、衣装を一寸工夫するだけで、レーニンをみごとに演じ切っている。このドラマが描いている諸事件を若い頃に身をもって体験した婦人作家のマリア・プリレジャエワは、この芝居の印象をこう語っている。「ヤンコフスキーはメーキャップなしで演じている。彼の顔はレーニンには全く似ていないが、私たちはレーニンの声を聞き、姿を見ることができる。目の前に生きたレーニンがいるかのようだ」

普通、ヤンコフスキーの演じる人物は自分の正しさを確信する意志の強い人間、実生活や自分自身と調和のとれた人間である。ところが最近ではこれとは正反対の人物も演じている。人生に破れた人間、自虐的な人間のテーマである。たとえば映画『転換』、『帽子』、『協議恋愛』の彼の役がそうである。このテーマがとくに鋭く描かれているのが、ビクトル・メレシコ脚本、ロマン・バラヤン監督の『夢うつつの飛行』（一九八二年）である。この映画でヤンコフスキーが演じるのは技師のセルゲイ・マカロフ。彼は魅力的で、聡明だが、虚無的であり、道徳的方向を見失い、精神的平衡に欠ける人物だ。彼は虚無と偽りの国から抜け出すことができず、苦しみ、その苦しみを抑えるために、さらにおどけ、ヤクザな生活をし、よからぬ行為を重ねていく。

「私にとってマカロフ役は、人生における自分の場をさがすという永遠の題材のバリエーションの一つで、二度と出会うことのない役だ。マカロフは自分の世代の一定の特徴をもった人物であり、私は彼を正当化しないが、あわれむ」とヤンコフスキーは言っている。

昨年この映画は20カ国余りから買い付けられた。

ヤンコフスキーが主演した映画を4本紹介しておこう。



◀『夢うつつの飛行』撮影中の（左から）ヤンコフスキー、ロマン・バラヤン、アレクサンドル・アブドゥーロフ

「帽子」

脚本＝ビクトリア・トカレワ
監督＝レオニード・クビニヒーゼ

ヤンコフスキーが演じる主人公デニソフは才能のあるトランペット奏者だが、軽薄で、人と折り合わぬ性格のため、どのアンサンブルに入っても長続きしない。そこで彼は若者たちを集めて、バンドを結成し、コンクールめざして練習を始める。ところが思いがけず、巡業を控えた楽団からソリストとして誘いを受け、仲間たちも、恋人も捨てて去って行く。しかし彼には、リーダーがほかにいるバンドで演奏することはできなかった。いつでもどこでも自分がリーダーでなくては気がすまないのだ。デニソフはモスクワへ帰る。しかしすでに恋人は他の男と結婚し、



彼の抜けた若者たちのバンドも見事コンクールで優勝した。彼はひとりぼっちになった。しかし、デニソフはやはり非凡な音楽家だ。客席にいたデニソフを見つけたかつてのバンドの若者たちは、恩人を立たせて聴衆と一緒に温かい拍手を送るのだった。

この映画でヤンコフスキーは吹き替えなしで歌い、踊り、トランペットを演奏している。



「夢うつつの飛行」

脚本＝ビクトル・メレシコ
監督＝ロマン・バラヤン



40歳の誕生日を目前にしている主人公のマカロフ（ヤンコフスキー演）はすべてを手にしているようだが、実は何も得てはいない。自分の仕事には興味が持てず、妻と娘がいるが、別居している。愛人もいるが愛してはいないし、クラスメートも友人ではない。マカロフには驚くべき特性がある。彼は常に夢の中を飛んでいるのだ。現実に飛べたらどんなにうれしいか…しかし羽は無い。彼は妻、愛人、同僚、友人に常にウソをついている。だが才能もあり、魅力的で機知に富んでいるので、皆、彼を許そうとしている。

マカロフは40歳の誕生日を祝い、青春や楽しみや今までの自分に別れを告げるためのピクニックを思いついた。しかしやはり満たされぬ思いは消えず、客たちから一人隠れてしまう。皆彼を探し、溺れたのではないかと心配するが、彼は少し離れた場所で、皆のお人よしぶりをあざ笑っている。とうとう皆が、常日ごろ彼に対して思っていることをぶちまけるが、この期に及んでも彼は悪ふざけをやめず、野原の方へ走って行く。少しして慟哭に顔をひきつらせ、干し草の山にもぐり込み、寒さ、虚無感、孤独感に耐えかねてか震えているマカロフをカメラは映し出す。彼は自分を見つけることができるだろうか。映画は結論を出さず、観客の自由な想像にまかせている。



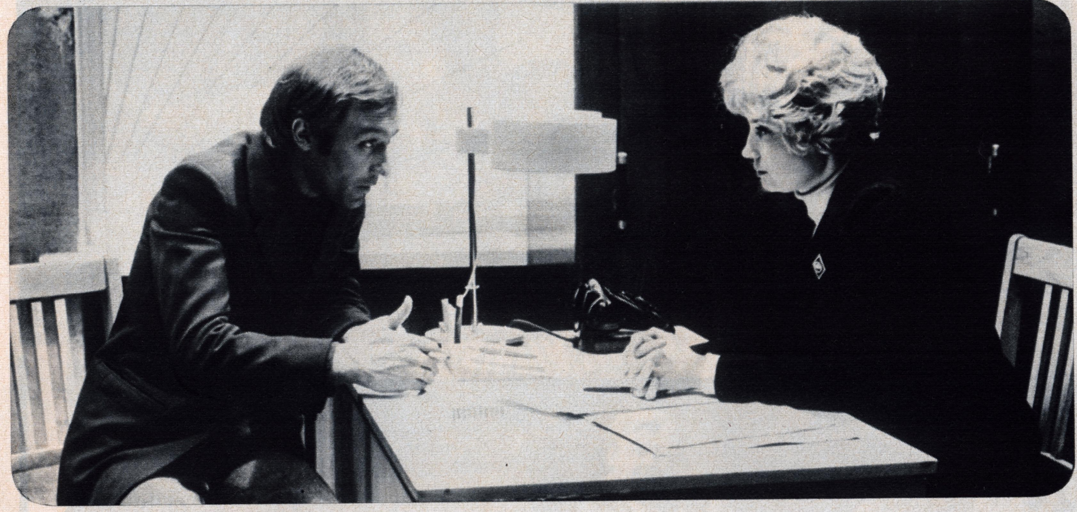


「転換」

脚本＝アレクサンドル・ミンダーゼ
監督＝ワジム・アブドラシトフ



ビクトル（ヤンコフスキー）とナターシャの生活には、不和のきざしすらなかった。いま、休暇から帰る途中の二人も、家に着いて荷を解くのを楽しみにしている。だが突然、ビクトルの運転する車の前に老婆が倒れこみ、頭を強く打って死んでしまった。老婆の死を契機にビクトルの生活は"転換"する。愛する仕事と穏やかな生活の世界から、一転して調書、訊問、対審の世界へと連れこまれたビクトルには、世界中が自分を陥れようとしているように思えた。老婆がよりによって自分の車の前で転ぶなんて、何と悲劇的な偶然だろう。

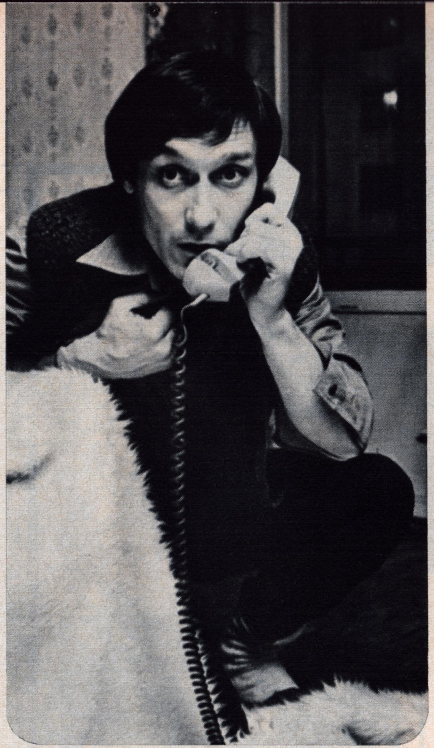




審理の結果、ビクトルに落ち度はないと判定されたが、この事件をきっかけにビクトルとナターシャの生活にひびが入る。ビクトルは、自分を無罪にするために卑劣な手段を使ったナターシャを許すことができない。自分を愛する余りそうしたことは分かってはいるのだが……。

『協議恋愛』

脚本＝セルゲイ・ミカエリヤン
アレクサンドル・ワシンスキー
監督＝セルゲイ・ミカエリヤン



二人は地下鉄で出会った。彼女は仕事の帰りだった。彼はぐでんぐでんに酔っていて、電車から外に運び出され、ベンチに座らされた。二人はまるっきり違い、最初からお互いが気にくわなかった。彼らは全く別の人生を歩んで来たが、この偶然の出会いは二人の運命を大きく変えることになる。



ベーラは聡明だったが、ひどく醜かった。図書館で働き、とっくに結婚などあきらめていた。イーゴリ（ヤンコフスキー）は美男だったが、軽薄だった。一流のスポーツマンをめざしたこともあったが、2位より上に上がれず、世の中に腹を立て、スポーツ界から足を洗って工場に就職した。

再会した二人は一見全くばかげた約束をする。お互いに自己暗示によって、イーゴリは人生に興味を持ち、仕事を愛し、ベーラを好きになることを、ベーラも彼に恋をすることを約束しあう。



最初はこの約束も全然うまくいかない。恐らく、どんな自己暗示も効果はないだろう。結局、ベーラがイーゴリの持っているいい面をすべて出させようと献身的に、真剣に励まさないかぎり、そして、ベーラにとってイーゴリが最愛の人であるように、ベーラがイーゴリの最愛の人にならないかぎり……。



▼呑牛忌に出席した佐藤三千夫の妹のタヨミさんとハルさん
第三回呑牛忌で記念会を代表してあいさつする首藤直一郎氏

シベリア干渉戦争と闘って散った

呑牛・佐藤三千夫の死

作家 大南勝彦



10月革命後のソビエト極東地方で、日本帝国主義のシベリア出兵に反対し、パルチザン部隊に加わって闘った日本人佐藤三千夫の事跡をしのぶ第三回呑牛忌が、5月13日、出身地の宮城県登米郡登米町の保呂羽城跡にある佐藤三千夫記念碑の前で行われた。

この集いには佐藤三千夫の実妹のタヨミさん（82歳）とハルさん（75歳）をはじめとする遺族、各界関係者約60人が出席し、主催者の佐藤三千夫記念会を代表して首藤直一郎氏が「佐藤三千夫の反戦の遺志を子々孫々まで伝えていきたい」とあいさつした。次いで日本共産党の庄司幸助中央委員、日ソ協会宮城県連の三春重雄氏、M・エフィーモフ・ノーボスチ通信東京支局長らがあいさつを述べた。

本誌では第三回呑牛忌にちなんで、作家の大南勝彦氏に佐藤三千夫の生涯について書いていただいた（編集部）。

去る五月十三日、宮城県登米郡登米町で、シベリアで反戦活動中に倒れた佐藤三千夫の追悼会が今年も行われた。没後六十二年、登米町に三千夫の碑が建てられて三年、地元では、三千夫の愛称をとって「呑牛忌」と呼んでいるものだ。拙稿では、佐藤三千夫の死が現代の我々に問いかける意味を考え、三千夫についての、今日までの顕彰運動の経過なども紹介したい。

佐藤三千夫は明治三十三年（一九〇〇）一月二日に生まれ、地元登米の尋常小学校を経て宮城県立佐沼中学（現佐沼高校）へ進んだが、同校の同盟休校事件に関係して四年の時に退学処分。その後仙台の私立東北中学（現東北高校）へ転校して大正八年（一九一九）に卒業している。その年、簿記の学校へ入っているが直ぐにやめて、同年七月には、早くもウラジオストクへ渡った。ウラジオストクでは木村商会に就職しているが、ここの経営者木村恪を紹介したのは佐沼中学校長で、木村は同校長の弟であるという。

佐藤三千夫はシベリアで日本軍への反戦ビラをまき、現地のパルチザンと共にソビエト・ロシアの赤軍を助けて活動、大正十一年（一九二二）十二月四日に力尽きた。二十二歳十一ヵ月の短い生涯である。

ここで先ず注目しておきたいのは、文字通り脇目もふらない、あまりにも真っ直ぐな彼の人生の軌跡である。中学を卒業して社会へ出ると、直ぐにシベリアへ渡り、三年半の反戦活動を経て、死に至る。物事を総て純粋に受けとめて燃える少年期から青年期にかけて、ただひたすらに青春を駆け抜け、シベリアの曠野に果てた。若く、一途になる年頃であったからこそ燃えることが出来た、とも言えるが、三千夫の生きた時代背景を見ると、決してそれだけではないことが判る。

一九一七年（大正六）のロシア革命が、日本のインテリゲンチアや労働者など各層に、大きな影響を与えたことは知られている。折から、列強による植民地拡大闘争をめぐって始まった第一次世界大戦（一九一四《大正三》－一九一八）に便乗参戦した日本は、中国山東省のドイツ利権と、ドイツ領南洋諸島を手に入れていた。一九一八年（大正七）、ソビエトがドイツと単独講和を結ぶと、米、英、仏と共に日本はシベリアへ出兵。チェコスロバキア軍の捕虜救済が名目であったが、内実はロシア革命後の混乱に乗じた完全な干渉戦争で、東部シベリアの要地を占領、しかも協定を無視して八万五千の大軍を派遣し、国際世論の非難を浴びた。反革命勢力を支援していた四国連合軍はパルチザンに悩まされ、一九二〇年（大正九）六月までに米、英、仏は撤兵するが、日本軍は居すわり、

いわゆるニコライエフスク事件となる。日本軍は賠償の保障と称して北樺太を占拠するが、結局国際的に孤立して一九二二年（大正十一）にシベリアから撤兵、一九二五年（大正十四）の日ソ国交回復と共に北樺太からも引揚げた。

佐藤三千夫の中学時代からシベリアでの死に至る数年間は、まさにこの間に入る。日露戦争後あたりから日本の資本主義は独占段階に入っていたが、第一次世界大戦で漁夫の利を得たことで、大資本は益々強大化し、同時に中小資本も急成長した。それによって、いわゆる労働者階級と呼ばれる中間層が激増したが、当時、まだあらゆる面で未成熟な資本主義経済下で、労使は対立の度を深めるばかりであった。すなわちインフレ、生活苦による労働争議と米騒動が、全国到る所で次々に起き、激化した。米騒動には警察ばかりか軍隊まで動員され、そのことが却って、民衆に権力とは何かを知らせ、戦う権利意識に目ざめさせた。

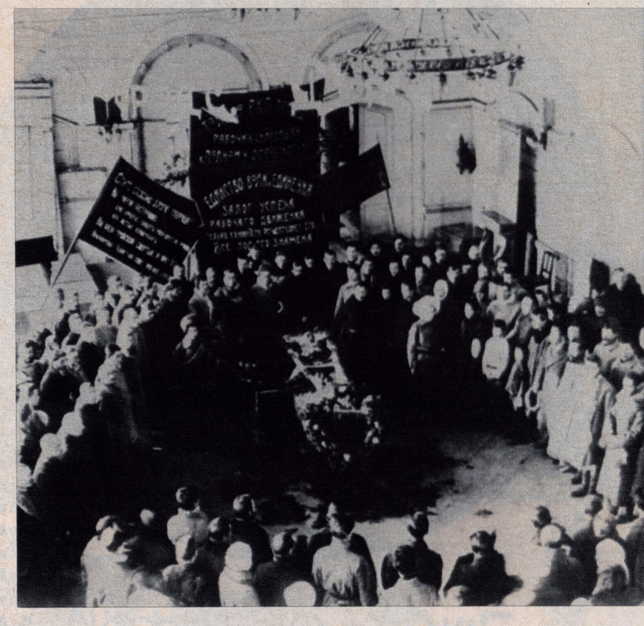
中学時代から大変な読書家だったという三千夫は、家の経済事情から佐沼中学を一年間休学しているし、そのあと同盟休校事件で退学。一年後に転校した私立東北中学時代には、仙台の米騒動（大正七年八月）に出会う。これらが彼の思想形成にどういう影響を与えたかは想像に難くない。加えて、中学卒と言っても休学と退学の期間が二年間あるので、東北中学卒業時は十九歳である。彼なりの自覚を以てシベリアへ渡ったことが、彼の行動からも理解出来る。

絶えず逮捕の恐怖にさらされながら、ロシア人、中国人、朝鮮人などの同志と共に、佐藤三千夫は、銃を取って白軍と戦ってもいる。最期の時は早くやって来た。一九二二年（大正十一）十月、三千夫は日本軍の兵営に忍び込んで、労働者、農民出身の兵士達に干渉戦の実体やそれがもたらす意味などを説き、ハバロフスクへ向かった。しかし発見をおそれて山中を歩き、夜は朝鮮人宅に泊る。雨で衣服や靴はズブ濡れになっても、次の行動計画のため、疲れ切った体に鞭打って歩き続けた。発熱と下痢に悩まされたというから、すでに体力そのものが低下していたのだろう。十月末、ハバロフスクに着いて陸軍病院に収容された三千夫は、二度と立つことが出来なかった。だがその死の床で、彼は日本軍の撤兵と、ウラジオストクが赤軍により解放されたというニュースを聞いた。

両肺をすっかりやられていた三千夫は、同年十二月四日、結核で死亡。同月十日、ハバロフスクの共産党、労働組合、赤軍、パルチザンの同志達によって、盛大な葬儀が行われた。かつて本誌に三千夫のことを書いたノーボスチ通信ハバロフスク支局のエブゲニー・ブガエンコ記者は、日本軍兵士がヤコブレフカ村その他幾つかの土地で、士官の命令を拒否して赤旗をかかげたり、赤軍兵士達と友情交換をしていた事実を、ハバロフスク・アルヒーフ（文書保管所）の記録から証言している……。

当時の「赤旗（THE SEKKI）」（赤旗社）、「第二無産者新聞」（第二無産者新聞社）、「進め」（日本労働協会）、その他日本の活動家達の出版物を読むと、史上初めての社会主義革命と、同混乱からロシア民衆を守ることが、同時に世界中の民衆の権利を守ることにほかならないという、純粋な熱気が伝わってくる。佐藤三千夫の短い生涯はそのような時代の旋風の中で理解すべきであり、彼が正に命をかけて戦い抜いたという事実の前に、我々は胸を締めつけられる。ましてその「第二無産者新聞」の中に、「吾々の前には又第二次世界大戦の危機が迫っている。死に瀕した世界帝国主義は再び世界再分割の為の闘争（略）」を始めようとしているという記事を見出す時、三千夫の死の問いかける意味は、決してある時代だけの問題ではないことを思わざるを得ない。

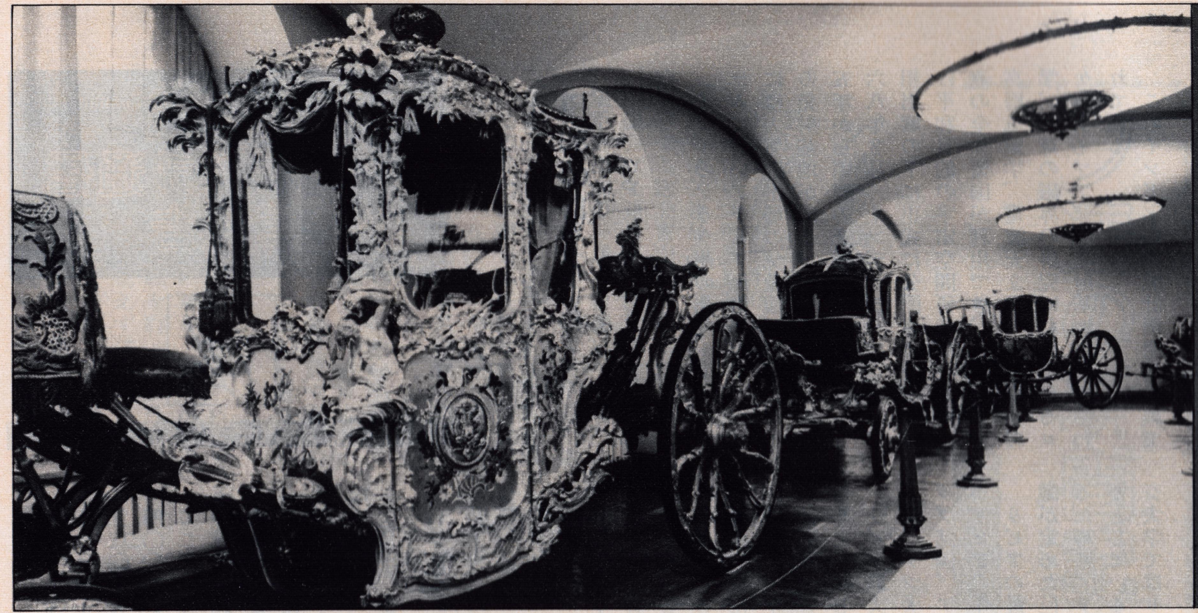
佐藤三千夫とその周辺のことをまとめた労作に、徳永直『日本人サトウ』（新日本文庫『妻よねむれ・日本人サトウ』）がある。登米町で、重病をおして三千夫の碑建設に奔走したのは当時七十七歳になる首藤直一郎氏だ。三千夫顕彰に生涯をかけた首藤氏の業績を是非ソビエトの人達に伝えたいという金野文彦事務局長の声に動かされ、今回、本誌をはじめ「トルード」、「コムソモリスカヤ・プラウダ」、ソビエト・ラジオ・テレビに私は取材を依頼した。私自身は、NHK「ラジオ・ジャパン」にソビエト向け原稿を提供していた頃、二度三千夫のことを書いている。今回、金野氏の保管する佐藤三千夫顕彰会の資料や、首藤氏の手記を参考に拙稿をまとめた。



1922年12月10日、ハバロフスクで行われた佐藤三千夫の葬儀

文化トピックス

クレムリン宝物殿の馬車コレクション

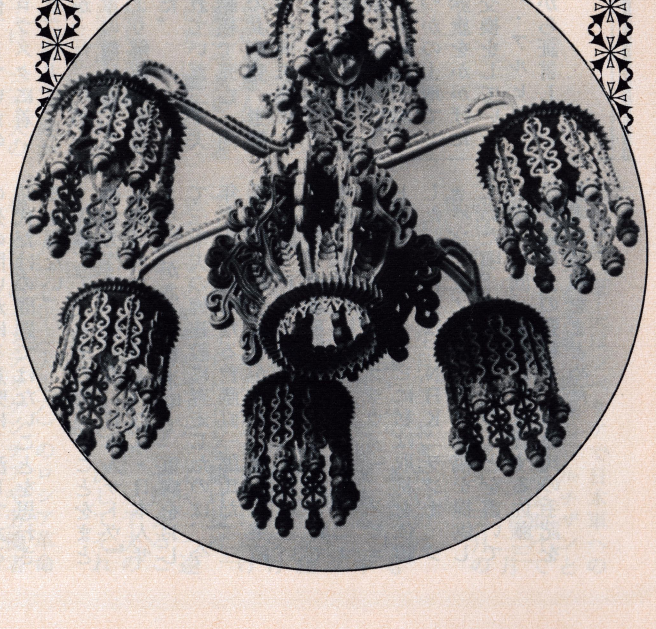


モスクワ・クレムリンの武器庫（宝物殿）には、古い四輪馬車のユニークなコレクション（写真左）がある。美術的、歴史的に価値の高いこの世界的なコレクションには、16世紀—18世紀にロシアの皇帝や女帝が使った各種の四輪馬車が収められている。これらの馬車はどれも内外の名工たちの手になるものだが、ソ連の修復技術者たちは馬車の傷のついた装飾模様を修理し、かつての豪華けんらんさを取り戻した。

コックさんの趣味は木彫り



リトワ共和国の首都ビリニュスにあるレストラン「ビリニュス」のコック、ビタリウス・バリュキャビチュスさんは、モスクワの全ソ国民経済成果博のコンテストで金賞を受賞した一流の調理師だが、趣味の木彫りの腕も大したもの。写真上は数々の作品とご本人、下は力作の見事な木製シャンデリア。



パリの国際コンクールでグランプリ



パリで行われたロン＝ティボー国際コンクールでソ連の若手ピアニスト、スタニスラフ・ブーニン（モスクワ音楽院付属中央音楽学校の生徒。17歳。写真左）がグランプリを受賞した。2位にはアルマアタ（カザフ共和国の首都）音楽院の教師ジャンナ・アウバキロワ、4位には黒海の保養地ソーチの交響楽団のソリスト、アレクサンドル・フォメンコ、5位にはモスクワ音楽院研究科生ウラジーミル・ビンニツキーがそれぞれ入賞した。コンクールには多くの国から38人が参加した。

モスクワの春の美術展

3月から4月にかけてモスクワの三つの展示ホールで恒例の春の美術展が開かれ、モスクワの美術家たちが描いた現代人のポートレート、風景画、静物画、ポスター、彫刻が展示され、入場者の目を楽しませた。作品の大多数は昨年制作されたものである。写真は盛況の展示会場。





ノーボスチ通信 特派員報告

平和のロケット

P・シャシ（インドの記者）（ニューデリー）

インドのケララ州の州都トリバンドラムに近いアラビア海沿岸のトゥンバには大気圏上層の気象観測用ロケットの発射基地がある。この基地は一九六五年に国連の庇護の下にあり、一九六八年2月、インディラ・ガンジー首相出席の下に正式に公開された。基地は平和目的の宇宙空間研究用として国連の全加盟国が利用でき、主に気象学、高層気象学、電波天文学、電離層物理学、地球の磁界の研究に利用されるロケット・ゾンデの発射基地として使われている。

このインド宇宙研究計画発祥の地でコンピューター・情報グループを指導するラネ博士の報告によると、ここには五三〇〇人が働き、そのうち学者は一四〇〇人いる。

ここでは多くの実験がソ連の協力の下で進められている。毎週水曜日にはソ連製の気象ロケットM―一〇〇が、もう13年間にわたって定期的に打ち上げられており、打ち上げ失敗は一度もない。

リビアの青春

E・アスラニヤン記者（トリポリ）

リビアの一番にぎやかで威勢のいい春祭り――リビア青年の日のざわめきが止んだ。青年のデモ行進や学生集会が行われるこの春の祭りを私が見るのはこんどで3度目である。カレッジや大学の学生たちのTV討論会が数時間続けられ、学生たちは自分たちの集団の課題について語り、他の都市の学生たちを祝福した。

リビア最大の大学はトリポリのアリ＝ファテフ大学で、この大学では東アラブ諸国、アフリカ、欧州大陸の青年がリビアの学生とともに学んでいる。

リビアの最高立法機関――全人民会議が定めた巨大プロジェクトを実施するために、リビアは自前の専門家を必要としている。トリポリ大学とベンガジ大学ではリビア経済に必要な人材の需要を充たせないので、最近セブハに第3の大学が開校した。

今日、リビアのカレッジや学校では軍事教練に多くの時間が割かれている。女子生徒も射撃訓練を受けている。三〇〇万のリビア国民は一九六九年の9月革命の成果を守る覚悟ができている。リビア人は、青年も含めて、米国をはじめ西側諸国のせいで平和がますますもろくなっていくのを理解している。リビアは米国製新型核ミサイルの配備が始まったシシリー島コミゾ市から三〇〇kmしか離れていない。「アフリカにも照準を合わせた米国製ミサイル」――リビア各紙の今日のタイトルはこう語っている。

フィンランド湾 コトカ港にて

S・オストロウーモフ（イルクーツク駐在記者）

コトカはフィンランド最大の輸出港だが人口は六万二〇〇〇人と少なく、フィンランドで第11番目。コトカ港にはソ連船をはじめ、毎年約一六〇〇隻の船が入る。ここから世界のすみずみに紙、パルプ、木材が積み出され、主に石油と石炭が入ってきている。フィンランドに入って来る石油の80％はソ連産。これに他の石油製品を加えると、この数字は90％近くになる。一九八〇年以降フィンランドはずっとソ連の対資本主義諸国貿易で第2位の地位を占めている。一方ソ連はフィンランドの最大の貿易パートナーである。

一九六五年以来〝ビャルツシリヤ〟造船所の営業担当重役をしているベステルバク氏は、一九四五年に労働者として造船所に入った。今は年に15回位ソ連を訪れる。種々の船舶が建造されるヘルシンキやツルクの〝ビャルツシリヤ〟造船所と違い、コトカ港の造船所は船舶の修理だけをやっている。しかも修理作業の半分はソ連船だ。ソ連の船舶修理の注文（一九八三年のソ連船修理総額は二〇〇〇万ルーブル）がなければ、コトカ港の造船所の従業員の大半は解雇せざるを得ないだろう、とベステルバク氏は率直に語った。

シベリア人とフィンランド人との協力について話すように請われた私は、フィンランドが協力した一例として、バイカリスク、ブラーツク、ウスチイリムスク、レソシビルスクの木材加工業、製紙パルプ工業の大規模設備の供給、ノリリスクの強力な非鉄金属生産ラインの製造・納入、エニセイ、レナ、オビ、イルティシ川、北海航路用の吃水の浅い砕氷船、ばら積み船、タグボート、はしけ、ホバークラフト……の建造を挙げた。私がもう何度となくフィンランド建造の船でシベリアの川を航行したことを話すと、フィンランドの人たちは大いに関心を示した。

ソ連の新聞記事から

（一九八四年5月前半）

ソ連最高裁判所総会

第11次ソ連最高会議第1会期で選出されたソ連最高裁判所の総会がV・I・テレビロフを議長として開かれた。総会はソ連最高裁判所の裁判官のメンバーと総会書記を承認した。

総会はソ連最高会議幹部会令「刑法、矯正労働法の一層の改善について」の裁判所による適用の実際に関する問題を審議した。

この問題に関して採択された決定では、殺人者、収賄者、ヤミ屋、国民財産着服者、常習犯や誠実な勤労の生活様式を送ることをあくまでも拒む者に厳罰措置をとる裁判所の義務が強調された。それと同時に、社会的に大して危険でない行為の初犯者に自由剝奪のつかない措置をもっと幅広く適用する必要が指示された。

不法な解雇および配転を未然に防ぐために、各裁判所に対し、明らかに違法な解雇または配転を行った責任者には、働き手が止むをえず欠勤した期間の賃金の支払いによって企業、機関または組織に与えた損害を自分で補償する義務を負わせるという法律の要求を、無条件に守るよう指示した。

（プラウダ紙5月15日号）

ソ連国防省の発表

西欧で続いている米国製中距離ミサイルの増強に伴い、ソ連と他の社会主義諸国は、自国の安全を保障するために対抗措置をとらざるをえなくなっている。

ソ連・ドイツ民主共和国両国政府の合意に従って、ドイツ民主共和国内に、西欧諸国への米国製ミサイルの配備に対する対抗措置として射程をのばしたソ連製作戦・戦術ミサイルが追加配備される。

今後ともワルシャワ条約加盟諸国の対抗措置は、力の均衡と、とくに米国製新型ミサイルが配備された方向からのわれわれとわが同盟諸国に対する具体的な危険性の解消に必要な範囲内に厳しくとどめられるであろう。

（「赤い星」紙5月15日号）

平和に奉仕する音楽

5月15日モスクワのチャイコフスキー記念音楽院の大ホールで、第2回モスクワ国際音楽祭の開会式が盛大に開かれた。音楽祭のスローガン〝ヒューマニズムと平和と諸国民間の友好のための音楽〟は、50カ国以上の進歩的な音楽家をモスクワに集めた。

開会式で朗読されたK・U・チェルネンコのメッセージは参加者と来賓の長い拍手に迎えられた。メッセージは音楽祭組織委員会議長のT・N・フレンニコフ・ソ連作曲家同盟理事会第一書記が代読した。

A・ライチェフ（ブルガリア）、M・Sh・ベナニ（アルジェリア）、寺原伸夫（日本）、K・パラシオ（スペイン）らの音楽家が、現代世界における音楽の大事な役割について述べた。

このあとのコンサートはソビエト音楽の巨匠D・カバレフスキー作曲のオペラ『コラ・ブルニョン』の曲で幕を開けた。参加者は自ら指揮をしたカバレフスキーに拍手を送った。この音楽の夕べではまた、他のソ連の作曲家の曲も演奏された。R・シチェドリンは新作――『自画像』の交響楽団のための変奏曲を、E・スベトラノフは第二狂想曲を披露した。

（ソビエト・ロシア紙5月16日号）



（E・ミルトキ作、クロコジール誌11号から）

インド訪問を終えたソ連の宇宙飛行士

さきごろ宇宙船ソユーズT11号で宇宙飛行をしたソ連・インド国際クルーのソ連の宇宙飛行士Y・V・マルイシェフとG・M・ストレカロフ、それに控え要員のA・N・ベレゾボイとG・M・グレチコおよび宇宙飛行士養成指導者のV・A・シャタロフの5人はインド訪問を終え、5月15日ニューデリーから帰国の途についた。空港ではインドの宇宙飛行士ラケシ・シャルマとラビシ・マルホトラ、インド空軍司令部の代表およびその他の政府関係者が暖かく見送った。

タス通信特派員のインタビューに答え、インドの宇宙飛行士ラケシ・シャルマは次のように語った。

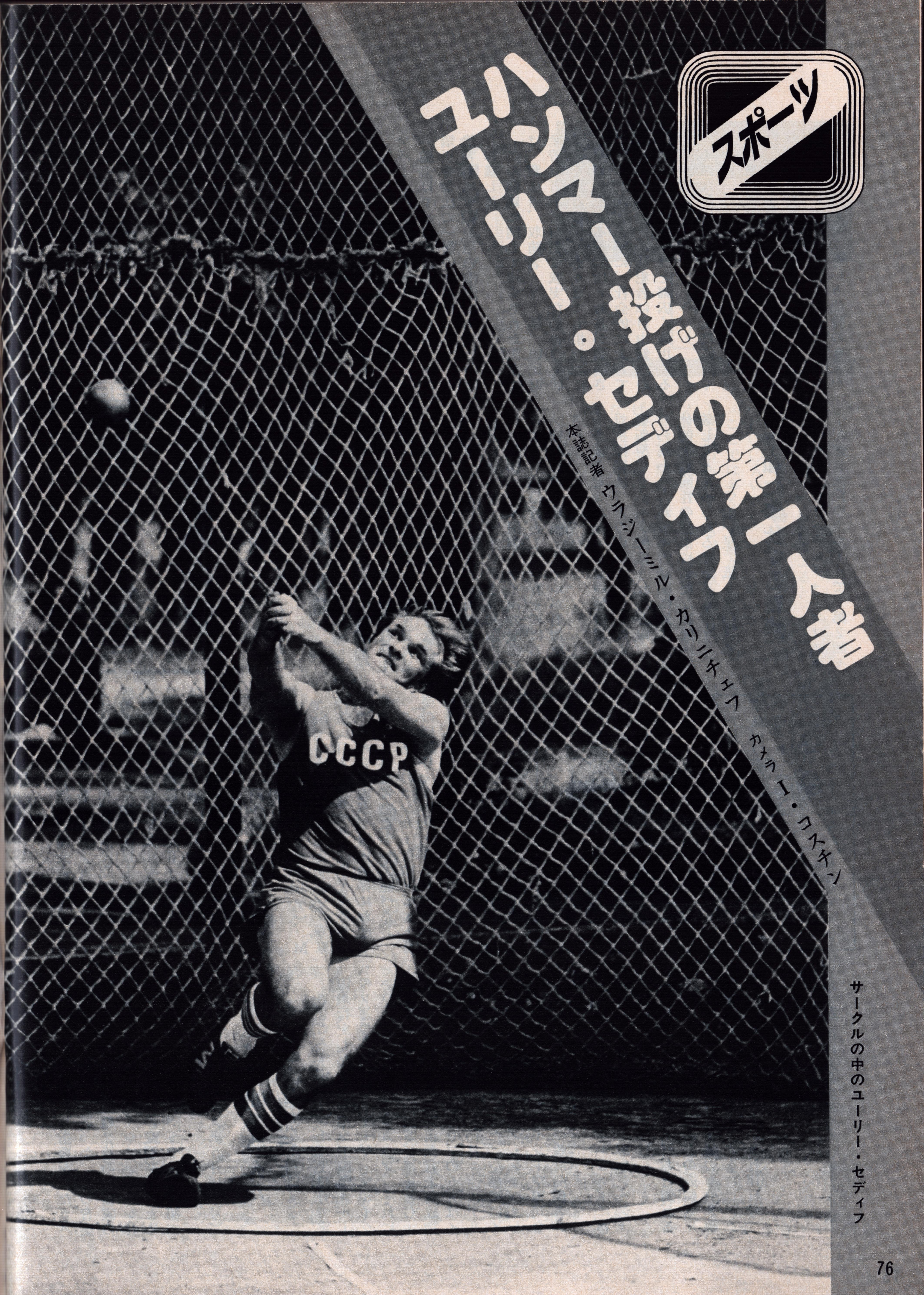
「われわれはソ連の友人たちと別れるのがつらかった。われわれの友情もインド・ソ連間の宇宙開発協力も引き続き強固になるものと確信する」

（プラウダ紙5月16日号）

スポーツ

ハンマー投げの第一人者 ユーリー・セディフ

本誌記者 ウラジーミル・カリニチェフ　カメラ I・コスチン



サークルの中のユーリー・セディフ



1日の練習で50回以上投げる



コーチのアナトリー・ボンダルチュクと失敗の原因を分析する。

少しずつ動きを速めながらハンマーを回す。1回転、2回転。速さを増した鋼鉄の球は青い空へ飛ぶ。数秒後、スタンドから拍手がわき起こる。鋼球は世界記録を示す小旗を飛び越えて、グリーンに落下したのだ。大きな電光掲示板に「1投目――ユーリー・セディフ（ソ連）――81m80cm――オリンピック新記録、世界新記録」の文字が浮かんだ。

これは一九八〇年のモスクワ・オリンピック大会での一コマである。

ユーリー・セディフがスポーツを始めたのは17年まえ、ウクライナ共和国の首都キエフの学校でだった。セディフはキエフで生まれ、育ち、いまもそこで暮らしている。彼は回想する――

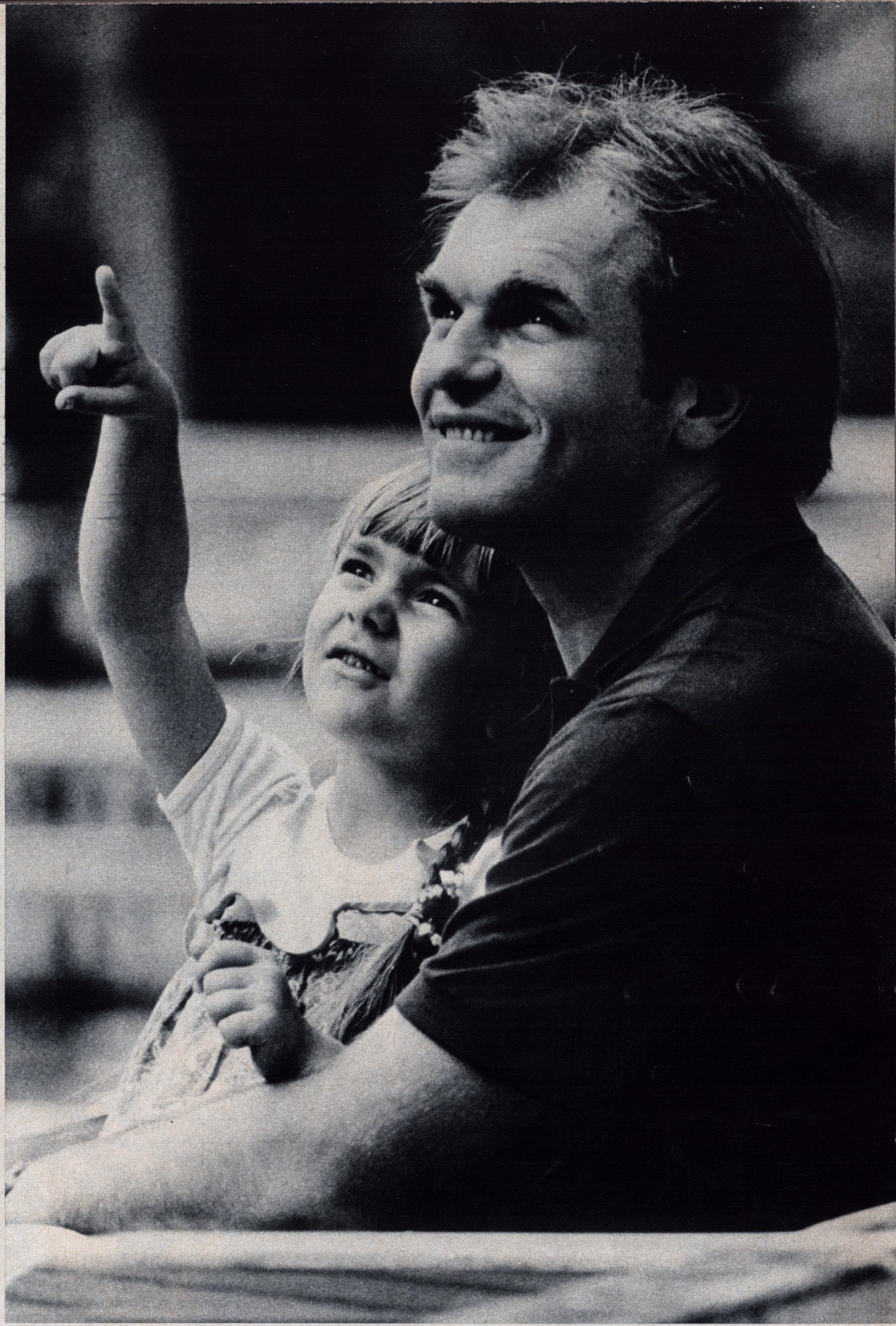
「私たち12歳の少年にとって、〝スポーツ部〟という言葉は魔法のような力を持っていました。私はこの言葉に引かれてスポーツ会館を訪れたのです。練習もとても気に入りました。そのころ、私はスポーツの種目のことなど考えていませんでした。ただ練習のプロセスが好きだったのです」

17歳のとき、セディフは全ソ学童スパルタキアードのハンマー投げで優勝し、多くの専門家の注目を浴びた。それからいくつものジュニア新記録を樹立し、学校を卒業してからは最終的に進路を決め、キエフ体育大学に入学した。

「私は数学が得意でしたが、体育大学を選びました。スポーツでの成功を目ざそうと決意した人間にとっては、それはごく自然な選択だったと思います。理論に裏打ちされた練習は、いっそうよい効果を生みます。その逆の関係も成り立ちます。いま私は大学院で学位論文の準備をしていますが、自分の経験が大いに役立っています。コーチになるつもりですが、そのためには理論も実践もよく知っていなければならないと思います」とセディフは言う。

セディフのスポーツ人生にとって、コーチが非常に大き

スポーツの鬼も娘には甘い



娘の相手をしてやる時間が少なくて残念だが、2人とも体を動かすのは大好き。▼



な役割を果たした。一九七二年末から彼はオリンピック・チャンピオン（ミュンヘン大会）のアナトリー・ボンダルチュクについて練習を始めた。コーチも教え子もモントリオール・オリンピックを目標に据えた。セディフは2年後にはすでに70mのラインを越え、ボンダルチュクと互角の力をつけていた（ミュンヘン大会でのボンダルチュクの記録は75m50cmの五輪新）。一九七六年のモントリオール・オリンピックでは教え子がコーチを抜いて優勝（77m52cmの五輪新）、この種目で史上最年少（21歳）のオリンピック・チャンピオンになった。ちなみにボンダルチュクは75m48cmで銅メダルだった。

モスクワ・オリンピックの勝利ののち、セディフはしばらく精彩を失ったかのようだった。モスクワ・オリンピックで銀メダルを獲得したソ連のセルゲイ・リトビノフが絶好調で、その陰に隠れてしまったのだ。リトビノフは一九八二年の夏に83m98cmの世界新記録を樹立した。セディフはそのすぐあと、アテネで行われた一九八二年欧州選手権でリトビノフを抑えて優勝したが、一九八三年にヘルシンキで行われた世界選手権ではリトビノフが優勝し、セディフは2位にとどまった。この2人の一騎打ちはまだ終わっていない。それどころか、お互いにますます闘志を燃やしている。

ユーリー・セディフはいま29歳。引退するつもりはない。

「スポーツが喜びであり、精神的、知的充実をもたらしてくれるかぎり、私はスポーツにとどまります」とセディフは言う。

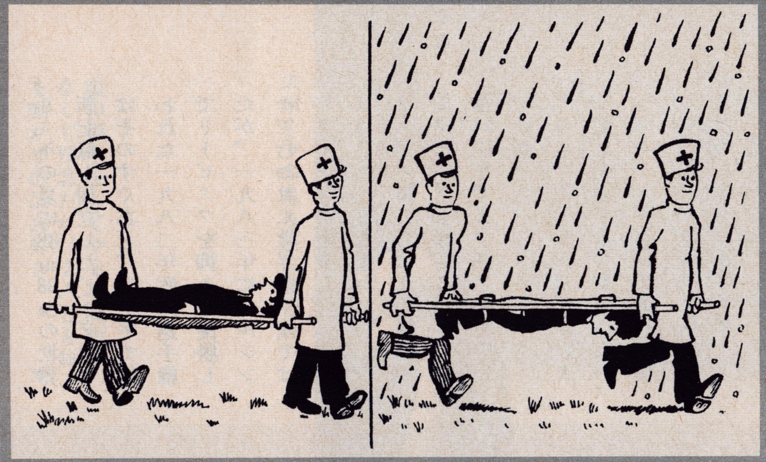
現在、ソ連のハンマー投げ陣は世界最強である。モスクワ・オリンピックとミュンヘン・オリンピックで金、銀、銅メダルを独占、この4年間に7回も世界記録を更新した。現在の世界記録はリトビノフが出した84m14cm。ソ連のナショナルチームには世界のトップレベルを行くハンマー投げ選手がさらに何人かいる。選手はみんな一緒に練習し、つねにライバル意識を燃やしているが、それはチームに不和をもたらすどころか、逆に団結を固めている。

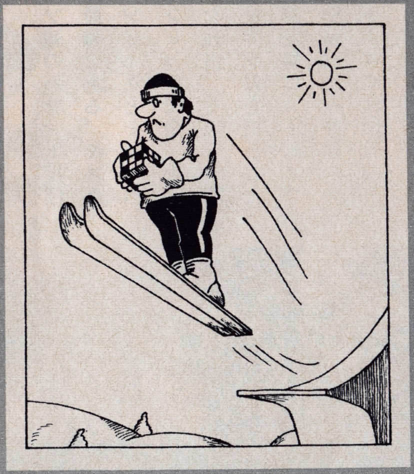
もう一度ユーリー・セディフの言葉を引用しよう——

「現在の記録は決して限界ではありません。ソ連のハンマー投げ選手はそれを更新する力を持っています。私たちは一つの流派を形成しており、いつでもトップの座を交替できるほど才能のある選手がひしめいています。

率直に言って、モスクワ五輪のあとの4年間ずっと、自分にとって3度目のオリンピックになるはずのロサンゼルス大会でメダルを狙おうと思って準備してきました。しかし、それはいま不可能になりました。現地の情勢からソ連の選手たちは大会への不参加を余儀なくされたからです。その責任は、完全にロサンゼルス五輪の当事者たちにあります」

ユーモア

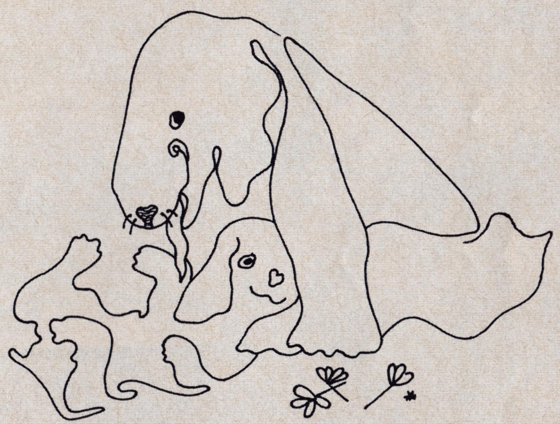




ソ連版ひとふで書き

だれでも、自然の中に心ひかれるものを持っています。色、音、形……。ソ連医学アカデミー遺伝学研究所の若い生物学者アレクサンドル・ツケルマンの場合、それは動物たちの愛らしい、優雅な動作でした。それをどうやったら紙の上に再現できるか？ 試行錯誤の末たどりついたのがひとふで書き（と厳密に言えるかどうか）。

「動物は気どったり、嘘をついたりしません。動物と一対一でいると、自分自身が試されているようです」とはツケルマンの弁。





今日のソ連邦 一九八四年6月15日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可 発行人 加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3−9−13・電話03・447・3536）
印刷・発行所（株）新時代社（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1−14・電話03・293・4881）
定価 一五〇円
（購読料は会費に含まれる）